
初恋をあきらめて

さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋をあきらめて

【Nコード】

N57280

【作者名】

さくら

【あらすじ】

公爵令嬢ナターリアには好きな人がいました。けれど、傾きかけた家のために後宮に入ることになりました。年下の国王陛下との間に王子も誕生しますが…。やがて権力争いにまきこまれて、危険な目に遭います。争いなどが苦手な方はご注意下さい。

王宮へ行く日（前書き）

はじめまして。

読む専門でしたが、私の頭の中で妄想が広がってしまい、物語にしました。よろしければお付き合い下さいませ。

王宮へ行く日

私には好きな人がいます。

けれど、私にはそれを伝えることが出来ない。

だって、私は家のために今日別の人のもとに行くのだから…

「お嬢さま、王宮からお迎えの使者が参りました」

「いま、参ります」

私は公爵令嬢ナターリア、18歳。幼なじみの3歳上のカールに恋をしていました。

男爵家の跡取りで私とは少し身分違いだけど叶わない恋ではないはずでした。

母にはひそかに伝えて、いずれは結婚できるのではとっていました。

けれど、父が病気になる、まだ幼い弟たちではロプーヒナ公爵家は支えられません。

傾きかけたわが家を助けるには、私が後宮に入り国王陛下の側室となるだけ。

忘れなければ…。

「ナターリア、こちらへおいでなさい」

「お母さま、何ですか?」

「ごめんなさいね。あなたに重荷を負わせてしまって…。

私に何の力もないばかりに。」

母は公爵夫人とはいっても商人の娘で、遠縁にあたる男爵家の養女となつて公爵家に嫁いだので、後ろ盾がありません。父とは貴族にしては珍しい恋愛結婚です。

「お氣になさらないで下さいませ。それより、お父さまや弟たちのことよろしくお願いします。」

「ありがとうございます。出来るだけのことはしますから、安心して頂戴。それよりこれをあなたに渡したいと思つて……」

渡されたのは、カールさまからの手紙でした。

『お久しぶりです、ナターリアさま。後宮に入られると伺いました。幼い頃、仲良く遊んだことが、昨日のことのようです。どうぞお幸せに』

王宮へ行く日（後書き）

いかがでしたでしょうか。

ハッピーエンドにしたいなとは思っていますが、もしかしたら違う結果になるかな…

王宮に入って（前書き）

続いて王宮に入ったところです。

王宮に入って

「奥さま、お嬢さま…!」

「あら、アリス。どうしたの?」

「どうしたのではございません。お急ぎ下さいませ。お迎えの方々がさきほどよりお待ちでございますよ!」

このうるさいアリスは私付きの侍女。

「ごめんなさい、アリス。すぐ行くわ。お母さま、それでは行ってまいります」

「行ってらっしゃい。アリス、ナターリアをお願いね。」

「お任せ下さい、奥さま。さ、お嬢さま参りましょう」

そのころ王宮では、謁見の間でウロウロと歩く国王陛下の姿がありました。

それを見咎めた女官長が、

「陛下、何をそわそわしておられますのか?」

「いや、何か落ち着かなくて…。女官長、あの、まだか…?」
ボソボソと国王陛下アレクセイが答えます。

この国では、国王陛下または王太子殿下は16歳になったら、妃を

迎えるのがしきたりでした。

後宮に何人か妃を迎え、その中から正式な妃・王妃、または王太子妃が選ばれます。

国王陛下アレクセイは若くして即位したのでまだ妃はいませんでした。そのため、王妃の役割は母の王太后が担ってきました。

このたび16歳になったのでようやく妃を迎えることになりました。

「何をでございますか？ああ、後宮に入られる令嬢でしたらまもなくお着きになりますよ。しっかりして下さいませ。いくら初恋の女性が参られるとはいえ…」

近くに控えているのは女官長。国王陛下の乳母でもあります。

そのとき、護衛の一人が来客を告げました。

「申し上げます。今日より後宮に入られるご令嬢方が参られました」

「さっ、陛下。お早く玉座へお座り下さいませ」

きびきびと女官長がアレクセイに言います。

「分かっておる。余はもう子供ではないぞ、マーヤ。もうすぐ逢えるのだな…」

あわてて国王陛下が玉座に座り、護衛に命令しました。

「通すがよい。」

「はっ、了解しました」

護衛に伝えた後、謁見の間に妃に選ばれた三人の令嬢方が入ってきました。

「ペトロヴィチ公爵の娘・シャルロツテ、16歳でございます。よろしくお願ひします」

大臣の娘で王太后のお気に入りで王妃に一番近い存在です。

「ロプーヒナ公爵の娘・ナターリア、18歳でございます。よろしくお願ひします」

「ハリス伯爵の娘・オリガ、20歳でございます。よろしくお願ひします」

伯爵の娘とはいえ、母は先々代の国王の王女で国王の叔母にあたります。

王宮に入って（後書き）

いよいよ後宮が始まります。ドキドキ…

陛下との挨拶（前書き）

ついにきました。

陛下との挨拶

玉座に悠然と座る国王陛下からお声をかけられました。

「ようこそ王宮に参られた。これからのことは女官長に聞くがよい。疲れたであろうから、今日はゆるりと過ごされよ」

16歳になられたばかりなのに幼さの残る中にもなかなかの男前で威厳のある若き国王陛下でした。

国王陛下とのご挨拶を終えて、三人のご令嬢方はすぐに後宮に入られることになりました。

それぞれ与えられた部屋に落ち着きました。明日は王太后さまとお茶会にが予定されています。

「ナターリアさま、疲れましたね。でも、私もついに憧れの後宮で働けるんですね」

「マリア、楽しそうね。」

少し疲れた表情でお茶を飲みながら侍女のマリアと会話しています。

「何をおっしゃっているんですか！後宮で侍女として働けるなんてマリアにとっては夢のようですわ。ここで働いたっていうと、縁談の数も違いますのよ。」

かなり興奮してマリアは話します。

うるさい侍女だと思ってたのにこんな一面があったとは…

「マリア、疲れたからもう寝ましようか？」

少し微笑んでナターリアはマリアに言いました。

「はい、ナターリアさま。明日の予定もありますし、お休みなさいませ」

翌日、慣例により王太后さまのもとでお茶会が開かれました。

招待されたのは、後宮に入ったシャルロツテとナターリアとオリガの3人です。

「よう参られた。この後宮にこんなに美しいご令嬢方をお迎え出来て嬉しく思います。」

王太后さまが笑顔で迎えて下さいました。

「ご招待ありがとうございます、王太后さま。」
三人が口々に答えます。

「おお、シャルロツテどの、すっかりお美しくなられて見違えましてぞ。」

「恐れいります、王太后さま。父からも王太后さまにくれぐれもよろしくお伝え下さいと申しております。」

前国王陛下が早くに亡くなったとき、シャルロツテの父の大臣が後ろ盾になって国王陛下を支えたことを恩義に王太后さまは感じておりました。

「こちらこそよろしく伝えて下され。私がおりますれば、今後のこととはご心配なきようにと」

「ありがとうございます、王太后さま。そのお言葉、父も喜びます。」

王太后に答えたあと、シャルロットは勝ち誇ったような笑顔をナターリアとオリガに向けます。

それは一番年下でありながら王妃になるのは私だと言わんばかりでした。

「さあ、お茶会を始めましょう。側妃の方々、こちらへおいでなさい」

後宮に入られる方には位がありました。

一番上はもちろん王妃ですが、次は側妃で他国の王女や公爵・侯爵・伯爵出身またはの位です。次は夫人でそれ以下出身の位です。三人とも側妃に選ばれました。

王妃に選ばれるためには側妃にならなくてはなりません、三人とも王妃候補としての条件を満たしています。

しかし、ナターリアだけはそういう目で見られているとは露とも思っていないませんでした。

陛下との挨拶（後書き）

後宮らしい展開が始まり、ワクワクします。

王太后のお茶会（前書き）

お茶会の始まりです

王太后のお茶会

お茶会が始まり、美味しい紅茶とアップルパイが出されました。

「ナターリアどの、公爵どののお加減はいかがですか？」

王太后が心配そうに話しかけます。

「お気遣い恐れ入ります。母がついておりますので、なんとか過ごしております。」

ナターリアが控えめに答えます。

それを聞いた王太后がピクツと眉をひそめて話しかけます。

「そうですか。心配していましたのよ。ご病気の父君がいるナターリアどのをお迎えすることになって申し訳なく思っておりますが……。」

「とんでもございません。どうぞお気になさいませぬように。」

ナターリアが控えめに答えます。

「気にすることはなかったようですね。」

急に機嫌の悪い様子で王太后が答えました。

実は若い頃のナターリアの父の公爵はハンサムで令嬢方の憧れの的でした。まだ独身だった王太后も憧れていました。

それが公爵家の侍女だったナターリアの母に奪われてしまいました。それがしゃくに触っているのです。

ナターリアは何か悪いことを言ったつもりはないのですが、王太后が機嫌を損ねた気がしてどうしてよいかわからず……

「あの、王太后さま、何か失礼なことを申しましたでしょうか…」
申し訳なさそうにナターリアが話しかけます。

「いいえ。どうぞナターリアどの、公爵のお見舞いに伺いたい折には遠慮なく申して下さいませね。」
ハツとして笑顔を取り繕って答えます。

「ありがとうございます。」
ナターリアはそれを聞いて、安心しました。

王太后は気を取り直し、オリガに話しかけます。

もちろん、オリガの母の王女に敬意を払ったことです。亡き夫の妹にあたる人ですから。

「オリガどの、久しぶりですね。お母さまはお健やかに過ごして
しょうか？」

「ありがとうございます。おかげさまで元気に過ごしております。
さすがに一番年上ですので落ち着きもあり、ゆったりと笑顔で答
えます。」

「それは何よりですね。お母さまとは、私が後宮に入ったころ仲良
くしていただきましたのよ。よろしくお伝えくださいませね。」

「ありがとうございます。母に伝えておきます。ふつつかではござ
いますが、これからよろしく願います。」

「まあ、ふつつかなんてとんでもない。あなたのような優雅でお血
筋のよろしいお方を後宮にお迎え出来て陛下もお幸せですね。」

機嫌良く王太后さまは話されます。

それを聞いたシャルロットは私のことを忘れると言わんばかりに

「本当に優雅でいらっしゃってお羨ましゅうございますわ。まだ私は16歳なものですから、いつかそうなれるといいのですけれど…」

「

「まあ、何を言われます？シャルロットどのは、愛らしくて そのままで十分陛下にふさわしいお方ですよ。」
王太后はいけないと思っ て笑顔で答えます。

ナターリアは後宮に入ると思っ てもいなかったものですから、どうしていいかわからずポツンとしながら、受け答えをします。こうしてお茶会は一見、和やかに過ぎていきました。

王太后のお茶会（後書き）

信じられないことに私の妄想のお話しにお気に入り登録して下さい
た方、ありがとうございます。

嬉しさのあまり調子に乗って書いてしまいました。

陛下と王太后の思い

ここ、王宮の執務室では若き陛下が執務に励んでおりました。

「陛下、そろそろ休憩をとられてはいかがですか？」

女官長がお茶を持って入ってきました。

「そうか、ではそろそろ休憩にするか。では、そちも下がって休憩するがよい。」

陛下は近くに控えていた書記官に命令しました。

「はっ、了解しました。では失礼致します。」

書記官が下がると、陛下がお茶を用意していた女官長に向かって話しかけました。

「女官長みずからお茶を持ってくるとは、何か話しがあつたのであるらう?。」

「アレクセイさまには隠せませんね。実は添い臥しの儀のことでございます。」

添い臥しの儀は16歳になった国王及び王太子が初めて女性とともに夜を過ごす儀式のことです。

一緒に夜を過ごした女性は王妃になることが多いと言われています。いわば、国王の初夜です。

陛下はドキツとして、女官長から視線を逸らし、お茶を飲みはじめました。

女官長は構わずに話しを続けました。

「後宮に側妃方も入られたことですし、儀式の準備をしなくてはなりません。」

陛下には、どのお方とを思し召しでございますか？」

陛下は、

「いや、それはあのお方に…。」
と口ごもって答えました。

「もしや、初恋のお方を選ばれますのか？それは、王妃にとお考えになったうえでのこととございますか…。」

女官長が心配そうに尋ねます。

「そうしたいと思っているのだが、マーヤは反対か…？」
俯いて、悲しそうに

女官長に言います。

「いいえ、陛下、反対など…。どの側妃を選ばれましても王妃にふさわしいお家柄の方でございますが。ただ、王太后さまのご意向を考えますと難しいかと存じますが。」

「母君は大臣の、何と申したか、あの令嬢を望んでおられるのはわかってはいるが…。余はあの人を王妃にしたいのだ。」

陛下ははつきりと女官長に言いました。

「アレクセイさま、かしこまりました。では、そのように手配致しますよう。ですが、王太后さまのご意向に逆らうことになることはお忘れなきように。」

ため息をつきながら女官長は陛下に言いました。

「ありがとう、マーヤ。よろしく頼むぞ。」

その後、そのことを聞きつけた王太后さまが女官長を呼びつけました。

「王太后さま、お呼びと伺いました。何用でございますしょう?」

「すまぬな、わざわざ来てもらって。忙しいそなたを呼んだを他でもない、添い臥しの儀のことじゃ。陛下にはかの初恋の君を選んだとの噂じゃが、まことか?」

なぜか王太后のそばには大臣の息女の側妃・シャルロッテが控えておりました。

女官長はきたかと思いながら答えました。

「さようでございます。陛下のご意向でございますれば、ただいまそのように準備しております。」

王太后はピクツと眉が上がり、機嫌が悪そうに

「女官長、どういふことかわかっておるのか?私かなぜこのシャルロッテどのを後宮にお迎えしたのかわかっていると思っていたが…。」

「女官長に言います。」

「はっ。ですが、これは陛下のご命令でございます。逆らうことなべ…。」

「黙れ。そなたは私に逆らつと申すか！もうよいわ。陛下には私から申し上げる。下がれ！」

王太后はシャルロッテの手前ということもあつたのか、女官長を怒鳴りつけました。

それを聞いたシャルロッテはわざとらしく、おずおずと王太后に伝えます。

「あの、王太后さま、私のことでしたらお気遣いなく。女官長どのがお気の毒にございます。」

「まあ、シャルロッテどの。あなたが気にされることではございませんのよ。陛下のことは私にお任せ下さいな。よいですね？」

王太后はやさしくシャルロッテに話しかけます。

シャルロッテはそれを聞いて、

「はい。王太后さま。」

と言つてはにかんで笑いました。

女官長は内心、
猫かぶりごと、
思いながら

「では、私はこれにて失礼いたします。」

と王太后に伝え、立ち去ろうとしたら、王太后が呼び止めました。

「女官長、待ちなさい。陛下に母が話しがあるゆえ、これから参ると伝えなさい。」

「かしこまりました。お伝えいたします。」
と言つて女官長は下がって行きました。

添臥の儀

えーん、えーん…

「泣いているの…」

「泣いてなんかいないぞ。誰だ！母君に言われてきたのか…」

「違うわ。あら、ケガをしているわ。」

「だいじょうぶ？」

きれいな菜の花畑で出逢った少女が話しかけてきました。

「平気だい。このくらい…」

泣きながらアレクセイが立ち上がります。

「そんな強がりと言えるなら、だいじょうぶね。でも、血が出てるから」

そう言つとその少女はポケットからハンカチを出すと、擦りむいた足をハンカチで結んでくれました。

「これでよしつと、あなたの名前は？私はナターリアっていうの」

「アレクセイだ…」

しぶしぶ名乗ります。

「アレクセイ、ねえ、もしかして家の人に黙って出てきたの？」

「悪いか！」

アレクセイはプイツ

と横を向いてしまいました。

「やっぱり…。家の人、心配してるんじゃないの」

「心配なんかしてないよ。うるさいだけだよ。」

「アレクセイ、何かあったのね…。」

よかったら私に話してみて！誰かに話すとスッキリするものよ、ね？」

少女は心配そうに話しかけます。

「母君がいつもうるさいんだ、あれはダメ、これをしてはいけない、こういうときはこうしろと息がつまりそうだよ…。」

「それで逃げ出しちゃったのね。私もね、お父さまにお小言を言われて一方的で嫌になっちゃったときがあるわ。」

「そういうときはどうするんだ？」

「それはね、お母さまがいつもおっしゃるの。相手の立場になって考えなさいって。心配をかけたたり迷惑をかけたのはあなたなのだから、まずは謝りなさい。それから、あなたの話をなさい。そうしたらうまくいくことがあるのよ、ってね。」

「それでうまくいくのか？」

半信半疑にアレクセイが尋ねます。

「うまくいかないときもあるけどね、でも私の話しも聞いてもらえるし、一方的に怒られるよりはいいわ。」

「そっか、そういう方法もあるんだな…」

「よかったら、試してみて。きっと上手くいくと思うわ。」
少女は笑顔でアレクセイの手を握ってきました。

アレクセイはちょっと顔を赤くして、

「おい、いきなり何すんだよ。」

「…下、陛下」

「ああ、女官長か。」

「どうなされました？何かお考えごとでも…」
心配そうに女官長が話しかけます。

「いや、ちょっと、幼い頃のことを思い出して…、それより何か用か？」

「はい、あの…、ご命令のとおり、例の儀式は今夜、お相手はシャルロッテさまにて準備を進めております。」

「そっか、ご苦労であったな」
ため息をつきながら

、陛下は椅子に座ります。

「本当によろしかったのですか？いくら王太后さまが強くお望みとはいえ…」

「仕方ないであろう。それだけが母君の願いであるのだから。それに、王妃に必ずしもなるとは限らぬしな…」

「陛下、やはり王妃をあの方にお考えで…。確かに陛下の亡き父君さまの王妃は王太后さまでしたが、儀式は別の妃が勤められました。が。」

「ま、そういう可能性があるということだ。」

その夜、後宮にて儀式が無事行われました。

添臥の儀（後書き）

次から女の戦いを始める予定かも？

儀式の翌日（前書き）

儀式の翌日のお話です。

儀式の翌日

添臥の儀式の翌日、王太后のもとにシャルロッテが挨拶に訪れていました。

「王太后さまにはご機嫌麗しくおめでとうございます。昨日、無事に儀式を終えましたことをご報告申し上げます。」

「ごぎげんよう、側妃どの。無事のごおつとめ、ご苦労でありました。」

「恐れ入ります。すべては王太后さまのお導きにございます。」

「さ、シャルロッテどの、儀式はこれで終わりじゃ。こちらへおいでなさい。」

王太后はそう言うつと侍女にお茶を用意をさせました。

「ありがとうございます、王太后さま。」
シャルロッテは礼を言うつと、用意された席につきました。

「今日はよい天気じゃ。儀式が終わり、疲れはしませんか？」
王太后はシャルロッテにやさしく話しかけます。

「いいえ、疲れたなどということはありません、王太后さま。大役を終えて、少しぼんやりしておりますが。」
俯いてシャルロッテが答えます。

王太后はちよつと笑って、

「それは疲れたということですよ。陛下はやさしくして下さいましたか？」

「はい。とてもおやさしい方でした。」

俯いたまま恥ずかしそうにシャルロッテが答えます。

「そうですね。陛下とよき夜を過ごされましたか？」

「はい…」

「それはなによりです。シャルロッテどの、もう側妃となられたゆえ申しますが、ここ後宮は公爵家とは違いますゆえ、しきたりも多く、勝手な振る舞いは許されませぬ。嫌なこともあるうが、陛下と仲睦まじく過ごされますように。」

それを聞いたシャルロッテは少し驚いて、初めて顔を上げて、王太后に抗議しました。

「えっ、でも、王太后さまは我が家のつもりでおいでなさいとおっしゃったではありませんか？」

「つもりでと申したでしょう。女は嫁いだ先が我が家になるのですからね。公爵夫人は何もあなたに伝えなかつたのですか？」

「いえ、お母さまは何も…。」

「後宮に入る娘に何も伝えぬとは…。まあ、これから私が教えましょう。」

シャルロッテは少し不満そうに、

「はい、よろしく願います。」

王太后は少し微笑んで、

「そう心配することはない。何かあったら私に申しなさい。私にできることはしましょう。いいですね？」

「はい。王太后さま、頼りにいたします。」

シャルロットは少し安心したように言います。

「あなたには私がついてますからね。さあ、お茶がさめてしまっわ。これは隣国から取り寄せた美味しいお茶なのよ。」
「
と言ってお茶を勧めます。」

「美味しい…。とても馨しい香りがしますわ、王太后さま」

「喜んでもらってうれしいわ。時々、お茶をいたしましょうね？」

「はい、楽しみにしております。」
シャルロットはそつなく答えます。

その頃、ナターリアのもとに同じく側妃となつたオリガが訪れていました。

「まあ、オリガさま。ようこそおいでくださいました。
ナターリアは戸惑いながらオリガを迎えました。」

「連絡もなく来てしまつて申し訳ございません、ナターリアさま。」
申し訳なさそうにオリガが話しかけます。

「いいえ、そのようなことは……。でも、おっしゃっていただければお伺いしましたのに。」

「そうおっしゃると思ってたんですよ。これはお近づきのしるしに……」

そう言うとオリガは侍女に持たせていた菓子折を手渡しました。

「まあ、恐れ入ります。アリス、すぐにお茶の用意を……」

儀式の翌日（後書き）

ここからワクワクの展開が…。陛下もいないのに。

オリガの訪れ

「ナターリアさま、突然訪れたのにこうして迎えて下さってありがとうございます。どうぞございます。」

オリガが遠慮がちにナターリアに話しかけます。

「いいえ、オリガさまをお迎え出来て嬉しく思います。」
戸惑いがちにナターリアが答えます。

「おやさしい方ね、ナターリアさまは。突然で申し訳なかったのだけれど、ナターリアさまと仲良くしたいと思って参りましたの。ご存知かしら、昨日の儀式の噂を？」

「噂でございますか？いえ、私は何も存じませんわ…。」
訝し気にナターリアが答えます。

「実は陛下は別の方をとお考えでしたのに、王太后さまに泣きつかれてシャルロッテさまになさったという話ですよ。」

「まあ、そのようなことが…。」
興味なさげにナターリアが答えます。

「あまり興味がありませんね。私、もしやそのお方はナターリアさまではないかと思っておりますのに…。」

ナターリアはちょっと驚いて、

「まさか、そのようなことがあるはずがありませんわ。」

「あら、ご病気の父君のいらっしやるナターリアさまを後宮に召し

出されたのですからそれなりの理由があると思いましたが。私の思い違いかしら？」

「私には分かりませんわ、オリガさま」
困ったようにナターリアが答えます。

「まあ、そのうち分かるでしょうけど。
ねえ、ナターリアさま、こうして時々はお茶でもいたしません？
きつと私たち、よいお友達になれると思いますのよ。」

「ええ、それは喜んで……」
戸惑ったようにナターリアが答えます。

「戸惑ってらっしゃいますね。率直に申しますと、王妃になられるのはおそらく大臣の息女で王太后の後押しもあるシャルロッテさまでしょう？それに比べて私は王女を母に持つとはいえ伯爵令嬢、ナターリアさまだって公爵令嬢とはいえ父君はご病気でいらっしゃいますからお互い後宮においての立場は弱いですわ。だから、この後宮で生きていくために仲良くいたしません？いがみ合うよりはその方がいいと思いますのよ。」

ナターリアは後宮に入ったものの、ここで生きていくことをあまり実感出来ていませんでした。
なので、オリガの言うことに感心して、
「オリガさまは、率直な方でいらっしゃるのですね。あの、後宮はそうして生きていくものなのですか……？」

オリガはそれを聞いてクスクスと笑い出し、
「ごめんなさい、笑ったりして……。ナターリアさまがあんまりのんびり構えていらっしゃるものだから。そうですわよ。それから噂も

気にしなくては、ナターリアさまが不利な立場になることだってあるのですから。」

ナターリアはさらに感心して、

「そういうものなんですね。いろいろありがとうございます。私、オリガさまが率直におっしゃっていただいたので申しますが、お父さまが病気になり、急に後宮に入ることになってしまって少し戸惑っておりますの。」

オリガは紅茶を一口飲んで、ふうーとため息をついて、

「そのようですね。分かりましたわ。私と仲良くなさりたいお気持ちになられたら、いつでもお越し下さいな。私ね、シャルロツテさまよりナターリアさまの方が仲良くなれそうな気がしますの。」

「まあ、シャルロツテさまよりだなんて…。私、そんなたいした人間ではありませんし。」

「ご謙遜を、ナターリアさま。母君に似てお綺麗ですわよ。では、私はこれで失礼します。私のところに来て下さることを願っておりますわ。」

そう言うとオリガは立ち上がりました。

「はい。必ずお訪ねしますわ、オリガさま」

ナターリアは笑ってオリガを見送りました。

その頃、王太后さまはシャルロツテが帰ったあと、儀式を担当した侍女を呼びつけておりました。

「お呼びでございますか、王太后さま。」

「わざわざすまぬな。昨日の儀式のことが気になりましたね。少し尋ねたいのです。」

侍女は少し身を堅くして、

「はい。どのようなことでもございませうか？」

「昨日、何もなかったのでしょうか？」

オリガの訪れ（後書き）

こんな妄想なお話しにお気に入り登録していただいた皆様、ありがとうございます。読んでくださる方がいると思うと頑張れそうです。

儀式の真実

王太后からいきなり言われて侍女はドキッとなりましたが、

「王太后さま、何をおっしゃっているのか分かりかねます。」

「隠さずともよい。私は陛下の母ゆえ、あの子の様子を見れば分かります。女官長にはそなたから聞いたとは申さぬゆえ、教えてもらえぬか？」

王太后は微笑みながら侍女に尋ねます。

侍女は困惑しながらも、

「王太后さま、申し訳ございません。恐れながら、そのようなことはお答えいたしかねます。」

王太后はしぶとい侍女だなど思いながら、強い口調で、

「そなたは何か思い違いをしておらぬか？王妃不在のいま、この後宮のあるじはこの私です。この後宮で起こったことを把握しておかねばならぬのです。さあ、申してみよ。今すぐに。」

侍女はもう仕方ないと思い、

「恐れながらお答え申しあげます。私も詳しくは存じ上げませんが、寢室にお印が残されておりませんでしたので、恐らくは何もなかったのではと思われまます。」

王太后はやっぱりそうだったか。シャルロツテが俯いていたのはこのせいかと思い、

「そうでしたか。ありがとうございます。よく話してくれましたね。もう下がりがよい。」

「かしこまりました。失礼いたします。」
侍女はそう言うと下がっていきました。

それから何週間かたった頃、シャルロッテが王太后とのお茶会から戻る途中、オリガとすれ違いました。

いいところで出逢ったとオリガは思い、

「ごきげんよう、シャルロッテさま。お散歩でございますか？」

「ごきげんよう、オリガさま。いいえ、王太后さまのお茶会からの帰りですの。」

王太后の招待を受けているのは私だけよと言わんばかりに自慢そうにシャルロッテは答えました。

オリガはやっぱりねと思いながら、

「まあ、それは羨ましいこと。私などには声もかかりませんわ。」

「まあ、そうでしたの？では、私から王太后さまにオリガさまを招待して下さるようお頼み致しますようか？」

いかにも気の毒そうにシャルロッテが話しかけます。

「あら、とんでもない。そんなつもりで申しあげたわけではございませんわ。どうぞお気遣いなく、シャルロッテさま。」

「遠慮なさないで。王太后さまは私から申しあげればきつと招待して下さいますわ。」

微笑みながらシャルロッテは自慢そうに言います。

「まあ、それはそれはさすがはシャルロツテさま。儀式をつとめられ方は違いますわね。いずれは王妃さまになられるのかしら?」

シャルロツテそれを聞いて満足そうに

「まあ、そんな恐れ多いことを。お決めになるのは陛下でいらっしやいます。」

「そんなご謙遜を。ところで陛下にはあれからお会いになりました?」

「いいえ。陛下はお忙しくていらっしやいますから。」

「そうでしたか。では、私はこれにて失礼いたします」

「オ리가さま、お茶会のこと、いつでも王太后さまに申しあげますから遠慮なさないで下さいませね。失礼いたします。」

オリガはシャルロツテを見送った後、

「ふふ、いい気なものね。陛下がいまどこにいるのか知りもしないで...。」

とニヤリと笑ってつぶやき、やがて自室へと戻って行きました。

儀式の真実（後書き）

これから楽しくなりそうです。次は陛下の登場です。たぶん…

陛下の訪れ（前書き）

陛下とナターリアの後宮での初対面です。

陛下の訪れ

昼下がりの後宮の一室、ナターリアの部屋に陛下が訪れていました。

「陛下、ようこそおいで下さいました。」

ナターリアは初めての陛下の訪問に少し緊張気味に迎えました。

陛下は少し微笑んで

「ナターリアどの、後宮に入られたとき以来ですね。これを…」

陛下が差し出したのは綺麗な菜の花の花束でした。

それを見たナターリアは少し緊張が緩み、笑顔で受け取り、

「まあ、綺麗な菜の花…。陛下、これを私に下さいますの？」

陛下は少し頬を赤くして、

「そなたのために持ってきたのだ。受け取ってくれ。」

ナターリアは嬉しくなって満面の笑顔でお礼を言いました。

「ありがとうございます、陛下。菜の花は私の大好きなお花でございます。お礼申しあげます。恐れながら陛下、お茶の用意が出来ておりますからこちらへ…」

陛下は席に着いたあと、少し照れながら、

「そんなに喜んでくれるとは思わなかった。もしかしたら、私のことを思い出してくれるかなと…」

ナターリアは何のことか分からずに、

「あの、思い出すとは…。私、以前に陛下にお目にかかったことが

「ございましたでしょうか？」

「わからないですか？私のはあの菜の花畑で出逢ったアレクセイですよ。」

陛下はニツコリ笑って答えます。

ナターリアはあつという顔をして、

「まあ！あのとき泣いていたアレクセイが陛下なんですの…。」

陛下はいたずらっ子のような顔をして、

「泣いていたとはご挨拶だなあ、ナターリアどの。」

ナターリアは急に恥ずかしそうに、

「あ、あの、その節は知らぬことは申せ、失礼の数々お許し下さいませ。誠に申し訳ございません。」

陛下はクツクツと笑いながら、

「いいよ。気にしてないから。余いやナターリアどのの前では僕でいいか。僕も言っただけだったしね。」

ナターリアは安心して、

「ありがとうございます。陛下の広いお心に感謝いたしますわ。」

「こうしてナターリアどのに逢えてうれしいよ。もう後宮は慣れたかい？ここは窮屈だろう？」

ゆったり笑って陛下が話しかけます。

「はい。いいえ、窮屈だなんて…。少しずつ慣れて来ております。」
戸惑いがちにナターリアが答えます。

「本当のことだよ。だから時々、逃げ出したくなるんだ。おっと、これは母君には内緒だよ。監視が厳しくなるからね。」

いたずらを見つけられたような少年のような笑顔で陛下が言います。

「はい、陛下。王太后さまには内緒でございますね。」

笑顔でナターリアが答えます。

「ありがとう。ナターリアどのなら、そう言ってくれると思ったよ。だからね、逃げ出したくなったとき、ここに来てもいいかな？ここなら安心出来そうだな。ね？」

陛下はいたずらっぽい表情でウインクしながらナターリアに言います。

「もちろんでございますわ。いつでもおいで下さいませ。私も安心しましたの。」

陛下がどのような方か分からずに不安になっておりましたの。」

「僕の名前でわからなかったの？」

陛下がおどけて話しかけます。

「急なお話でしたので……」

恥ずかしそうにナターリアが答えます。

「まあ、いいや。これから仲良くしていこうよ。」

そう言っつて陛下がナターリアの手を握ってきました。

ナターリアは少し顔を赤くしながら、

「はい、陛下。私も仲良くしていけそうな気がします。」

それから二人は女官長が迎えに来るまで、思い出話などで楽しい時

間を過ごしました。

陛下の訪れ（後書き）

他の方に比べて話しが短くてすみません。

頑張ってはいるのですが…。

素人が書くものなので多少のことはお許しを。

初めて結ばれた日（前書き）

読んでくださる方が増えてきて嬉しい限りです。また、調子に乗って書いてしまいました。

初めて結ばれた日

「陛下、お迎えに参りました。」

予定時間を過ぎて、しびれを切らした女官長がナターリアの部屋まで陛下を迎えにやってきました。

「あ、もうそんな時間か……。ナターリアどの、長居をしたようだ。残念そうに言っつて、陛下が席から立ち上がりました。」

「あ、いいえ、私の方こそ、気がつかなくて失礼をいたしました……。」

戸惑いがちにナターリアが言います。

「では陛下、参りましょう。」

女官長が陛下に帰りを促します。

「ナターリアどの、また来てもよいか？」

陛下が名残惜しそうにナターリアに尋ねます。

「はい。お待ちしております。」

ナターリアは微笑んで答えました。

「また来る、ナターリアどの。では、女官長、参ろうか。」

陛下はうれしそうに言っつて、女官長と部屋を後にしました。

「ナターリアさま、いつまでそちらにおいででございますか？」

ナターリアが陛下が去った後もしばらくそこに立っていたので、侍

女のマリアが見かねて声をかけました。

「え、ああ…、そうね。マリア、さきほど陛下が下さった菜の花はどうしたの？」

「花瓶に活けておきましたわ。ご覧下さい。綺麗ですわ。」
マリアがそう言ってテーブルまでナターリアを誘います。

「本当に綺麗な菜の花ね。幼い頃を思い出すわ。」
ナターリアは物憂げに呟きます。

「ナターリアさま、決心して後宮にいらしたのでしょう？陛下も良
いお方の方ですし…」
マリアが少し強い口調で諭します。

「そうだったわね。だめね、私は…」

それから数日後、王宮の執務室でご機嫌な陛下が執務に励んでお
りました。

「陛下、本日の執務はこれにて終了でございます。」
側に控えていた宰相が陛下に話しかけます。

陛下は微笑んで

「本当か。ではもう、今日は自由の身だな？」

「いえ、本日は隣国の大臣をお迎えしての晩餐会がございますれば、
お忘れで？」

宰相が冷静に陛下に答えます。

陛下は残念そうに、

「まだ、公務があったのか！すると、夕食までは自由だな？」

「はい、夕食までは自由でございます。それにしても最近の陛下は、ご機嫌でいらつしやいますな。妃をお迎えになると変わるもので。」
宰相は微笑みながら陛下に話しかけます。

「からかうな、宰相。では、もう部屋に戻るぞ。」

そう言つて陛下は執務室を出て、後宮のナターリアのもとへ向かいました。

「まあ、陛下。ようこそおいで下さいました。」
ナターリアが笑顔で迎えます。

「また来たよ。話しがたくてな。」
陛下がうれしそうにナターリアに話しかけます。

「あの、今日はお時間はよろしいのでございますか？」
ナターリアが遠慮がちに陛下に尋ねます。

「大丈夫だ。夕食までは自由の身だよ。きょうはゆっくり出来る。」
陛下はうれしそうに話します。

それから夕食までの時間二人でゆっくりと話しました。

その帰り際、陛下がナターリアに向かって恥ずかしそうに、
「今度は夜、訪ねてもよいか？」

「はい。どうぞ私でよろしければお越し下さいませ。」
ナターリアは陛下のことを弟のように思っていたので、話し相手をするつもりで答えました。

「本当にいいのだな……。ではまた近いうちに来るからな。」
陛下はそれを聞いてとても喜んで、鼻歌まじりに部屋を後にしました。

ナターリアは私と話しをするだけであのように陛下に喜んでもらえるなんて、後宮の生活も悪くないのかも知れないと思いはじめていました。

その夜は陛下は来れませんでした。翌日の夜、ナターリアの部屋に陛下が訪ねてきました。

「ナターリアどの、来たよ。」
陛下が頬を染めてナターリアに話しかけます。

「陛下、ようこそいらっしやいました。遅くまで執務をなされたのですね。お疲れさまでございます。」
ナターリアが微笑んで陛下を迎えます。

「ああ、今日は疲れたよ。慰めてくれるかい？」
陛下がナターリアにあまえて話しかけます。

「はい、陛下。いま、お茶の支度をさせますので……」

「いや、お茶はよい。寝室へ参ろう。」
そう言って陛下はナターリアの手を握ってきました。

ナターリアは驚いて、
「陛下、寝室とは…」

「ナターリアどの、いやナターリアは私の妃だ…。夜来るとはどういうことかわかるだろう？」

陛下はナターリアに熱い視線を向けて言いました。

「陛下、あの…」

戸惑いがちにナターリアが言います。

陛下が悲しそうに

「ナターリア、嫌なのか？」

「いえ、そういうわけでは…。今日は話し相手だと思っていたので驚いて…。」

「じゃあ、いいのだな…。」

陛下はそう言って、ナターリアの肩を抱き寄せて、その頬にキスをしました。

ナターリアは突然の出来事に恥ずかしそうに陛下に寄りかかりました。

「では、寝室に行こう。」

陛下は顔を上気させて、ナターリアの耳元に囁きました。

「はい…」

ナターリアは弟のように思っていた陛下に抱き寄せられ、ボーツと
なっていました。

そのまま二人は寝室に行き、その夜結ばれました。

初めて結ばれた日（後書き）

二人が結ばれました。ここからが後宮の恐ろしさの始まり始まり…

幸せな朝

夢のような出来事だった…。愛しい初恋の人を抱くことがやっと出来た。

窓のカーテンの隙間から朝日がこぼれている。

もう、朝なのか…。

今日は朝から公務がが目白押しだ。もう行かねばならない…。隣には愛しい人が寝息をたてて眠っているというのに。

「ナターリア、愛してる。」

陛下はそう言っ、ナターリアの額にキスをしました。

そのとき、ナターリアが身じろぎして、目を覚ましました。

「陛下…、おはようございます。」

恥ずかしそうにナターリアが話しかけます。

「おはよう、ナターリア。起こしてしまったか…。すまない。私は公務があるから、もう行かねばならない。」

ナターリアの髪をなでながら陛下が名残惜しそうに話しかけます。

「陛下、お支度を…」

ナターリアはそう言っ、陛下の身支度を手伝おうと体を起こしかけましたが、

体がだるく起き上がれそうにありません。

それを見た陛下が

「ナターリア、起きなくてもよい。ゆっくり過ごすといい。」
そう言っ、起き上がりました。

「でも、陛下……」

ナターリアも無理に体を起こしました。そして、陛下の身支度を整えました。

「ありがとうございます、ナターリア。」

陛下はそう言って、

ナターリアを抱きしめました。

「いってらっしゃいませ、陛下。」

ナターリアは抱きしめられたまま切なそうに話しかけました。

「また、来てもよいか？」

陛下はナターリアから体を離してから尋ねました。

「はい。お待ちしております……」

体をふらつかせながら、ナターリアが答えます。

「大丈夫か？また、来る。ゆっくり休んでくれ。行ってくる。」

陛下は心配そうに言って、部屋を後にしました。

ナターリアは陛下が部屋を後にするとベッドに横になり、日が高くなるまで眠っていました。

「……さま、ナターリアさま、お加減はいかがでございますか？」
侍女の MARIA が心配そうに話しかけます。

「MARIA、もう大丈夫よ。起きるわ。」

ナターリアはそう言って起き上がりました。

「大丈夫でございますか？ナターリアさま。ご昼食の支度が出来ておりますので。」

その夜も陛下が訪ねてきて、一緒に過ごしました。

そんな日々が続いたある日、陛下のもとに王太后が訪ねてきました。

「これは母君、いかがなされました？」

「陛下、こんなことを申したくないのですが、シャルロツテどのもとに行かれてないとか…？」

遠慮がちに王太后が言います。

それを聞いたアレクセイは、思わず眉をひそめて、

「公務が忙しいのですよ。」

「他の妃に行く暇はあるのに、ですか。陛下？」

陛下は王太后に痛いところを突かれて、動揺して

「どつしると言つのですか？」

「シャルロツテどのは大抵の息女です。大臣にはいろいろお世話になっていきますし、私の顔をたてて、行つてはもらえませんか？」

陛下が苦虫を潰したような顔をして、

「王太后が特定の妃を贖にされるようなことは控えられた方がよるしいのではないですか？」

王太后は困った顔をして、

「わかつてはおるが、そなたに頼むしかないのだ。母の頼みを聞い

てはもらえまいか？」

陛下はナターリアのもとに行くつもりで執務を頑張って時間を作っていたので、ため息をついて、

「仕方ありませんね。では、今日のお茶の時間に参りましょう。それでよろしいですね、母君？」

「ありがとうございます、陛下。そなたなら頼みを聞いてくれると思いましたよ。シャルロッテどのも喜びます。泣いて頼まれたのですよ。」
王太后がうれしそうに言いました。

そして、午後のお茶の時間となりました。
後宮のシャルロッテの部屋に陛下がやってきました。

「陛下、お待ちしておりました。」
シャルロッテが陛下を笑顔で迎えました。

幸せな朝（後書き）

これからの展開がうー、楽しくなりそうです。

シャルロツテのもとへ

「シャルロツテどの、久しぶりだな。」

陛下がぶっきらぼうに話しかけます。

「陛下、儀式の時以来でございますね。お逢いできなくて寂しかったですね。」

シャルロツテが可愛らしく小言を言います。

「すまない。何かと忙しかったものでな…。」

「そんなに忙しかったんです？お父さまに陛下をあんまり忙しくさせないように言っておきましょうか？」

「いや、いい。公務だからな。」

「遠慮なさらなくてもよろしいのに。お父さまは私の言うことなら聞いてくれますのよ。」

陛下に対しても自慢げにシャルロツテは言います。

それを聞いて陛下は

母君の頼みとはいえ、来るんじゃないかな…。

と思い、ひそかにため息をつきました。

そのころ、同じ後宮のナターリアの部屋では…。

「ナターリアさま、陛下が都合が悪くお茶の時間に来られなくなつたとのことでございます。」

使いを受けたマリアがナターリアに伝えます。

「そう、お忙しいのね…。」
ナターリアは寂しそうに呟きました。

「ナターリアさま、陛下はいらっしゃらないですけど、お茶の時間ですし、ご用意いたしますね。」
そう言っマリアがお茶の支度を始めました。

「なんだか、今日のお茶の時間は一人で寂しいわね、マリア？」
ため息をつきながらマリアに話しかけます。

マリアが首をかしげて、
「ナターリアさま、でも陛下がいらっしゃる前はずっとお一人でいらっしゃいましたでしょう?」

「そうなんだけど、陛下がいるのが当たり前になってしまってなんだか寂しいのよ…」

「もしかしてナターリアさま、もう陛下のことを好きになっ
しゃいますの?」

「私にもよくわからないの…。カールさまのことを好きな気持ちには変わりはないと思うのだけど、陛下がいらっしゃるんだか寂しいのよ…」
戸惑ったようにナターリアが答えます。

「そうですか。カールさまのことは残念ではございますが、ナターリアさまはもう王妃さまとなられておいでなのですよ。もうお忘れになりませんと…」

姉のような口調でマリアはナターリアを諭します。

「わかつてはいるのだけれど…。それにもう、カールさまも私のことなんて忘れてるわよね…。」

「ため息をついて呟きます。」

「ナターリアさま…」

「ごめんなさい。もう忘れるようにするから…。」

「ナターリアさま、何か気分転換なさったらいかがです？後宮に入ってからずっと部屋に閉じこもりですし、気分も変わりますわ。」

ナターリアを元気づけるようにマリアが言います。

「そうね。あ、そうだね、以前オリガさまが訪ねていらっしやっただけど、まだお返事してなかったわね。」

明日にでも、オリガさまを訪ねてみようかしら？」

「そういえば、そうでしたわね。陛下がよくいらっしやっるようになったのでそのままになってましたわね。オリガさまのもとに明日お伺いしますと使いをだしておきますわ。」

そして翌日のお茶の時間にナターリアはオリガの部屋を訪ねていました。

「オリガさま、ごきげんよう。お訪ねするのが、遅くなりまして申し訳ございません。」

遠慮がちにナターリアは挨拶をします。

「ごきげんよう、ナターリアさま。いいですよ。陛下がいらっしやるので、お暇がなかったのでしょうか？」
微笑みながらオリガが言います。

「ま、ご存知でしたの…」
恥ずかしそうにナターリアが答えます。

「噂ですわよ、ナターリアさま。でも、シャルロットさまはご存知ないようですけど…」
と言って、含み笑いをしました。

「まあ、そんな噂がありましたの…」

「ええ…。ナターリアさま、今日は来てくださって嬉しいですね。仲良くして下さいということなんですもの。お茶の用意をしておりますからこちらへどうぞ。」

王太后と大臣の話し合い

それから数日たったある日の午後のことです。

いつものように後宮の王太后の部屋にシャルロツテがやってきてお茶会が行われておりました。

「ごきげんよう、王太后さま。」

いつものように可愛らしい笑顔でシャルロツテが挨拶をします。

「ごきげんよう、シャルロツテどの。」

笑顔で王太后も迎えます。

「あの、今日は父と一緒に参りましたの。お茶会にご一緒してもよろしいでしょうか？」

上目遣いにシャルロツテが王太后に尋ねます。

王太后はえっと、いう顔をしましたが、

「大臣が…。それはもちろんかまいませんよ。」

「ありがとうございます、王太后さま。きっとそうおっしゃって下さると思いますわ。」

シャルロツテはホッと一安心して王太后に話しかけます。

「王太后さまにはご機嫌麗しくおめでとうございます。突然参りまして、申し訳ございません。側妃さまに誘われまして、厚かましくも参った次第でございます。」

大臣が遠慮がちに挨拶をしました。

「これは大臣、よく参られました。ご丁寧なご挨拶恐れ入ります。」

困惑しながらも、笑顔で王太后が迎えます。

「ねえ、お父さま、大丈夫でしたでしょう？」

シャルロットが恐縮している父に笑って話しかけます。

その様子を見た大臣がため息をつきながら、シャルロットに小言を言います。

「お前という子は……。ここは屋敷とは違うのだぞ。王太后さまに失礼のないように致さねばならぬというに……。」

「お父さま、何もこんなところでおっしやらなくても……。」
シャルロットは不満げに言います。

「大臣、もうそのくらいでよいではないか。」

しかし、シャルロットなどの、突然参っては侍女たちがお茶の支度に困るゆえ、次からは連絡してから来るように。いいですね？」

王太后は大臣にとりなしながら、シャルロットに釘を刺します。

「はい、王太后さま。次から気をつけます。」
しおらしくにシャルロットが答えます。

「王太后さま、しつけがなっておりますようで誠に恐れ入ります。」
大臣が恥ずかしそうに王太后に伝えます。

「まあ、よいよい。お茶の支度が整ったようだ。二人ともお茶会を始めるゆえ、こちらへおいでなさい。」

王太后がそう言って二人を誘い、お茶会が始まりました。

楽しいお茶会が終わり、お開きの時間となりました。

「ではお父さま、そろそろ失礼しましょうか？」
シャルロツテが大臣に帰りを促します。

大臣は言いくそくに

「それがシャルロツテいや側妃さま、父は王太后さまに少しお話ししたいことがありますので、お先に部屋にお戻り下さいませようようにお願いいたします。」

「そうですね？じゃあ、仕方ありませんわね。それでは、王太后さま失礼いたします。」

満げにシャルロツテは言つて、自分の部屋に戻って行きました。

シャルロツテが帰った後、大臣が王太后に話しかけます。

「恐れ入ります。王太后さま、少しお時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

「かまいませんよ、大臣。話しとはもしや、シャルロツテどのに係することでしょうか？」

恐縮しながら大臣が答えます。

「王太后さまにはかないませんな。お察しのとおり、側妃さまのことでございます。至らぬ娘ではございますが、いずれは王妃にと後宮に上げた娘でございます。」

「やはりそうでしたか。私も気にはなっではいるのですが…」
王太后は言葉を少し濁します。

苦笑いしながら大臣が、

「聞いたところによりますと、陛下にはシャルロツテさまではなく別の側妃さまをご寵愛されておられることですが…。」

王太后が困ったように、

「そうなのです。儀式はシャルロツテどのがつとめました、陛下には別の妃のもとに通っております。私もシャルロツテどののもとに行くように陛下には申しあげましたが…」

「それで、陛下はシャルロツテさまのもとにお越しに？」
大臣が窺うように尋ねます。

「数日前に行ったようですが、どうもそれきりのようなのです。」
弱り切った様子で王太后が答えます。

「それは、困りましたな。万一、その妃に先に王子でも出来ては…。
何が手を打ちませんと。」
苦々しく大臣が言います。

「そうですね。何か考えては見ますが、シャルロツテどのも陛下のご寵愛を得られるように少し努力をしていただきませんと。」

「よく申しておきますので、王太后さま、何卒よろしく願ひします。」

「分かりました。悪いが大臣、もうさがってはくれぬか？何か手を考えますゆえ…。」

少し王太后は考え込みながら、大臣に伝えます。

「ははっ。何か私に出来ることがありましたらお申しつけを下さいますように。では、失礼いたします。」

大臣はそう言っ、王太后をもとをさがっていきました。

後日、王太后は何を考えたのか、ナターリアを呼びつけます。

突然の里帰り

ナターリアはいきなり王太后から呼ばれて何事かしらと、何か失礼でもあったのかと少し怯えながら王太后のもとにやってきました。

「王太后さまにはご機嫌麗しくおめでとうございます。ナターリア、お呼びにより参りました。」
緊張しながら王太后にナターリアは挨拶をしました。

「ごきげんよう、ナターリアどの。突然呼ばれて驚かれたでしょう？悪いとは思ったのですが、気になることがありませんね。」
笑顔で王太后が迎えました。

ナターリアはえっという顔をして、
「気になることございますか…？」

王太后は後宮に入って以来何ヶ月かぶりに見るナターリアが以前も美しいとは思っていたのですが、
陛下に愛されているせいかさらに美しくなっていました。これでは可愛いかわがままなシャルロットのものにもとに来る気になれないなとひそかに王太后はため息をつきました。

「ええ。さあ、お茶の用意がしてありますので、こちらへおいでなさい。」

そういつて王太后はナターリアを誘いました。

「恐れ入ります、王太后さま。」
ナターリアは恐縮しつつ席につきました。

「それにしても、ナターリアどのはお綺麗になられたこと。間違えましたわ。」

微笑んで王太后はナターリアに話しかけます。

「いえ、そのようなことは…」

ナターリアは思いもかけないことを言われて、恥ずかしそうに答えます。

「本当のことですよ。他にも妃がいるのに、そなたのばかりに行く陛下のおかげかしら？」

棘を含むように王太后が言います。

ナターリアは、

他にも妃がいることは分かってはいましたが陛下が自分のところにはかり来るのせいで他の妃が自分のことをどう思っているか考えもできませんでした。

それというのも、急に後宮に入ることになったので何の勉強も覚悟も出来ていないからでした。

他の妃の立場を考えなかつたことを指摘されたと思つて、すっかり畏れいつてしまい、

「恐れ入ります…。」

王太后はその様子を見て、ほくそ笑み、

「それで、気になることというのはロプーヒナ公爵のことです。」
窺うように王太后が言います。

「お父さまの…、どのようなことでしょうか？」

いきなり父のことを言われてナターリアは戸惑いがちに答えます。

「ええ。父君がご病気なのに後宮にお迎えして申し訳なく思つてお

りましてね。それで、一度、お見舞いに実家に帰られて はいか
かと思えますね。どうかしら、ナターリアどの？」
微笑みながら王太后 が尋ねます。

ナターリアは父のことを忘れていたわけではないのですが、後宮で
の生活や陛下がよく来るようになってそのことを実家にいたときよ
り考えなくなっていました。なので、そのことを言われたとき、は
つとして、お父さまに悪いことをしてしまったと思い、遠慮がちに
「王太后さま、でも、私、後宮に入りましたのに、実家に帰らせて
いただいてもよろしいのですか？」

「遠慮なさらなくてもよろしいのよ。陛下には私から伝えておきま
すから、すぐに実家にお帰りなさい。」

王太后は親切そうにナターリアに語気を強めて言います。

「本当にいいのでございますか…？」

「もちろんですよ。」

「お気遣いありがとうございます。あ、でも、実家に使いを出しま
すので、また日にちが決まりましたら、ご挨拶に伺います。」
少し嬉しそうにナターリアが言います。

王太后はうまくいきそうだと含み笑いをしながら、

「その必要はありませんよ。すでに使いを出し、馬車も用意出来て
おります。」

あまりに手際よいの良い王太后にびっくりして、戸惑いがちに、
「そんなことまでしていただいては…。」

王太后はイライラして強い口調で、

「遠慮はいらぬと申しているであろう。誰かおらぬか！」

側に控えていた侍女が駆け寄り、

「王太后さま、お呼びでございますか？」

「ナターリアどのが父君の見舞いに実家に帰られる。陛下にそのことを伝え、ナターリアどのを実家にお送り申し上げなさい。」

侍女は王太后が機嫌が悪くなっているので素早く行動し、

「ナターリアさま、ご実家までお送り申し上げます。さあ参りましよう。」

あつという間にナターリアと一緒に王太后の部屋にやってきていた侍女のマリアは馬車に乗せられて実家のロプーヒナ公爵家に帰されました。

その様子を眺めて王太后は

「悪く思わないでね、ナターリアどの。憎いわけではないけれど、こうでもしないとアレクセイはシャルロツテどののもとに行かないでしょうから。」

と小さく呟きました。

それから数時間もしないうちにあわてふためいた陛下が、王太后のもとにやって来ました。

王太后の驚き

ここは後宮でも奥まったところにある王太后の居室で、広い庭園のある場所でございます。

数時間前、強引に側妃ナターリアを実家に帰した後、王太后は陛下はいつやって来るかなと思いつながら、今日はシャルロッテをお茶に誘うことなく、一人優雅に午後のお茶を楽しんでおりました。

「王太后さま、陛下のお越しでございます。」
侍女が陛下の訪れを告げます。

王太后は
案外来るのが早いわね。
と思いつながら、陛下を迎えました。

「母君！どういうことですか…！」
血相を変えた陛下が女官長とともに王太后の部屋に飛び込んできました。

「ごきげんよう、陛下。それに女官長も。突然、何事でございますか？」

王太后はとぼけて、微笑んで二人を迎えます。

「王太后さま、突然失礼いたします。至急お伺いしたいことがございまして、陛下と参った次第でございます。」

女官長は、
全くこの古狸が…。
と思いつながら王太后に挨拶をします。

「至急とはどのようなことですか？ちようどよいところへ来ましたね。いまお茶を飲んでいたところですから、一緒に飲みながら話をしましょう。」
さらに王太后はとぼけます。

その様子を見た陛下はイライラして、叫びます。

「母君、とぼけるのもいい加減にして下さい！ナターリアを突然お帰しになったでしょう…。」

「ああ、そのことですか。ナターリアどのは父君のお見舞いに帰られたのですよ。」

突然叫んだ息子の様子に少し驚きながら王太后が答えます。

「帰したのは母君でしょう！私に何の断りもなくっ！」
語気強く陛下が王太后に迫ります。

「王太后さま、恐れながら、後宮におられるお妃が外出されるにはどのような用件であろうとも事前に私を通して陛下の許可が必要でございます。」
穏やかに女官長は陛下に続いて王太后に迫ります。

「何ですか、二人とも…。ただ、私は、父が病気のナターリアどのを気の毒に思っで見舞いに実家に帰して上げただけではありませんか！」
わなわなとふるえながら王太后は言い返します。

「母君、本当にそれだけですか…。」
疑わしそくに陛下が王太后に尋ねます。

「それだけとは、この母の言うことが信じられぬと申すのか…！」

王太后は痛いところをつかれて、動揺しながらも言い返します。

「それならばそれでよろしいですが、側妃が後宮を出るにはそれなりの手続きが必要でしょう。長く後宮にお暮らしの母君ならおわかりのはず。」

冷やかに陛下が王太后を諭します。

王太后はこれまで何でも言うことを聞いてくれていた息子にこんなことを言われるとは思わなかったので、呆然としてしまいました。

「アレクセイ、どうしてなのです…」

すっかり意気消沈した表情で王太后は陛下に尋ねます。

「どうしてとは？」シヨックを受けている王太后に少し言い過ぎたかなと思いつつ陛下が尋ねます。

「どうして母にそのようなことを言うのですか…。父君が早く亡くなってから頑張つてそなたを育ててきたというのに…。」
震える声で王太后は陛下に尋ねます。

「そのことには感謝しておりますが、このことはまた別のことにさせていただきます。」

「別だと申すのか…」

「そうです。今回、母君は国王である私が許可を出すべきものを勝手にしておしまいになったのです。後宮を仕切るはずの女官長の立場もありますまい。」

夫を早くに亡くして頑張ってきた母を少し哀れに思いながら言わねばならないことだからと勇気を振り絞って陛下は言います。

王太后は消え入るような声で、
「母にどうしろと申すのかじゃ。そなたのためによかれと思ってしてきたと言つのに……。」

その様子を見た陛下が母のことがかわいそうになり、
「母君、今回のことは見逃しますが、次はこのようなことのないようにして下さい。」

そう言うと陛下は女官長に向かって、

「では女官長、早速にもロプーヒナ公爵家にナターリアを迎える使者を手配してくれ。」

「かしこまりました、陛下。」

王太后を気遣いながら女官長は答えます。

「それから母君、女官長の顔も潰さぬように今後はご配慮下さい。今日のところはこれで失礼いたします。では、女官長、参ろうか。」
陛下は王太后に挨拶をした後、女官長とともに帰りを促します。

呆然とする王太后に女官長は何と言っていいかわかりませんでした
が、言わねばならないことだからと思い、王太后に告げました。

「王太后さま、今後はよろしくお願いいたします。御前、失礼いたします。」

こうして二人は呆然と立ちつくす王太后を置いて去って行きました。

残された王太后は、なぜ可愛がってきた息子があんなに変わってしまったのか理解することが出来ませんでした。

ただ、変わってしまったのがナターリアのせいだと思っしかなかっ

たの
です。

ナターリアの里帰り

そのころ、ナターリアと侍女アリスは、王太后の手配した馬車によりロプーヒナ公爵家に到着しておりました。

「お帰りなさいませ、側妃さま…。」
ナターリアを迎える母の公爵夫人も連絡があつたとはいえ、後宮に入ったはずの娘が突然帰ってくるのですから戸惑いがちに挨拶をしました。

「お母さま、あの…、ただいま戻りました。」
ナターリアも見舞いとはいえ突然帰されたのですからこちらも戸惑っていました。

お互いしばらくの沈黙ののち、公爵夫人が心配そうに、

「あの、ナターリアさま、何かあつたのですか？側妃になられた方が父君の見舞いとはいえ実家に帰られるとは…。」

「私にもよくわからないのです。実は今日、王太后さまに呼ばれて参りましたの。そうしましたら、父君のお見舞いに実家に帰りなさいと突然仰せられて、あつという間に馬車に乗せられてアリスと一緒にここに帰りましたの。」

困惑した表情でナターリアが答えます。

「どうして急にそんなことに…」
それを聞いた公爵夫人は後宮はいろいろなことがあると聞いていましたが娘がづらい目にあっているのではないかと心配になり、絶句してしまいました。

「奥さま…、申し訳ございません。」
ナターリアと一緒に帰ってきた侍女のアリスがおずおずと公爵夫人に言います。

「アリス、あなたのせいではないわ。気にしないで。」
公爵夫人は泣きそうなアリスを気遣うように話しかけます。

「ありがとうございます、奥さま。何の役にも立てずに申し訳ございません。」
アリスは任せて下さい、とこの屋敷を出て王宮に行ったのにこんなことになり情けない気持ちでいっぱいになりました。

「そうだわ。公爵さまがナターリアさまが帰ってくると聞いて心配していましたの。逢いに行きましょう。」
公爵夫人は暗くなった雰囲気を振り払うように、病気療養中の公爵のもとに二人を連れていきました。それというのも、いまは公爵夫人とはいえナターリアの母は商家の娘で公爵家の侍女に過ぎませんでしたから、後宮のことは分かりません。夫の公爵なら何か解決策があるのではないかと考えたのです。

コンコン…

「エレナか？」

「はい、公爵さま。側妃さまがお見舞いに参られました。」

「そうか。恐れおおいが、ここに通してくれ。」

ナターリアはなつかしい父の声に家に帰ってきたと実感していました。

「かしこまりました。さあ、ナターリアさまどうぞ。」
母はそう言くと、ドアを開けて父に引き合わせてくれました。

久しぶりに見るベッドに横たわる父は以前に比べて少し健康を取り戻したように見えました。

「久しぶりです、お父さま。ご気分はいかがですか？」
ナターリアはおずおずと父に話しかけます。

「側妃さま、わざわざのお見舞い有り難く存じます。おかげさまで、今日は気分が良いようでございます。」
突然帰ってきた久しぶりに見る娘は以前より綺麗になったようでした。

「それはよろしゅうございました。」
ナターリアは少し元気になった父の姿を見て安心しました。

公爵は綺麗になった娘の姿を見て、これは陛下のご寵愛を受けて何かあつて、帰されたのかと感じました。そこで、ナターリアに探るよう尋ねました。

「ところで側妃さまには、いつ王宮にお戻りになられるご予定にございますか？」

聞かれたナターリアも突然帰されたのですから、いつと聞かれてもどう返事をしていいかわからず、

「あの、お父さま、私……。」

そばで聞いていた母のエレナが公爵に見かねて話しかけます。

「あの、公爵さま。今回のことは王太后さまの『意向のよ』で『ギル』います。」

「王太后さまの？それでは、大臣の指しがねやも知れるな…。」
少し考え込むように公爵が呟きました。

「あの、お父さま、私、今日突然お見舞いにと帰されたのでいつ帰っていいのか分かりませんの…。」
戸惑った表情で父に助けを求めるようにナターリアは言います。

その様子を見た公爵は、娘に重荷を背負わせて悪かったと思いつつ、詳しい話しを聞かなければならないなと思いました。

「ナターリアさま、ご苦労をおかけして申し訳ない。至らぬ父ではあるが、あなたさまのためにお力になれることもあるかも知れぬから、後宮に入ってからこのことを話してはもらえぬか？」

それを聞いたナターリアは父に話すのは恥ずかしいとは思いましたが、どうしてよいか分からなかったので後宮であつたことを話しました。

それを聞いた公爵はやはり大臣の指しがねだと確信しました。

そして、娘のナターリアに語りかけました。

「ナターリアさま、これから父の申すことをよく聞いて下さい。」

「はい、お父さま。」

話そうとしたそのとき、侍女が王宮からナターリアの迎えの使者が来たと伝えてきました。

「何？迎えの使者が……。では、ここにお連れするように。ナターリアさま、父が話しますから、ご自分の部屋にてお待ち下さいませよう。お願いしてもよろしいか。」

ナターリアは父の言うことだからと頷き、以前暮らしていた部屋に行くことにしました。

そして、迎えの使者が公爵の部屋に入ってきました。

「お使者どの、わざわざのお越し恐れ入ります。」

迎いの使者

「お久しぶりでございます。公爵さま。お加減はいかがでいらっしやっていますか？」

迎いの使者が公爵に挨拶をしました。

その姿を見た公爵があつと思いました。
使者は何と女官長でした。

「これは女官長さま…！お久しぶりでございます。まさか女官長さまみずからがおいでとは、恐れ入ります。おかげさまにて少し加減が良いようでございます。」

公爵は驚きながらもお辞儀をして挨拶をしました。

公爵のそばに控えていた公爵夫人も驚いた様子でしたが、

「女官長さま、ようこそおいで下さいました。」

と言って会釈をしました。

あるうことか、自分より身分の高い公爵にさま付けをされた女官長は戸惑いましたが、遠慮がちに受け答えしました。

「それはよろしゅうございました。公爵夫人のご看病やこのたびの側妃さまのお見舞いの賜物でございましょう。」

「どつやらそのようにございます。突然の側妃さまのお見舞いにはいささか驚きました…。」

公爵は少し皮肉るように答えました。

「このたびのことは私の不手際にて、申し訳ないことでございます。」
女官長は少し困りながらも、公爵にはごまかしはきかないなと思い、謝罪しました。

「いえ、女官長さまのせいではございますまい。王太后さまのご意向のように伺いました。女官長さまもご苦勞の多いことで…。」
女官長を氣遣うように公爵が言います。

「恐れ入ります、公爵さま。あの、ところで側妃さまはいずれにおいででございますか?」
言いにくそうに女官長がそばにいないナターリアのことを公爵に尋ねます。

「側妃さまは別室においででございます。女官長さまに迎えに来ていただいたのに申し訳ないが、父として今日のところは側妃さまに王宮にお戻りいただくことは賛成出来かねます。」

俯き加減で話しをしていた女官長がはつと顔を上げて、

「それでは公爵さまには、側妃さまをこのままお手元に置かれるおつもりでございますか…!」

「女官長さま、勘違いされますな。今日のところはと申しましたでしょう。いま困惑しておられるナターリアさまのお気持ちが落ち着くまでのことです。このたびのことは、恐れながら陛下のご寵愛が側妃さまばかりに過ぎたことが原因のように思いますが、いかが思われる?」

はつきりと女官長を顔を見て、きっぱりと公爵は言います。

「それは…、否定は致しませんが、あまり長くこちらにおいでにな

りますと側妃さまが王宮に戻りにくくなるつかと存じます。」
困惑しながらも女官長も言い返します。

「それはそうだが、このままお戻りいただいては同じことの繰り返しになりましょう。違いますか？」
女官長を窺うように公爵が尋ねます。

「ごもつともにございます。」
女官長は痛いところをつかれて返す言葉もないようでした。

「女官長さま、私も急なお話だったとはいえ後宮のことを娘にあまり教えられず送り出したことを悔いております。こちらにおいての間にそのことを教えたく思います。他の妃への気遣いも出来るように致しますゆえ、二、三日こちらでお預かり致したく存じます。よろしいか？」

公爵は女官長に尋ねる形をとっていますが、有無を言わさぬ口調でした。

「公爵のお気持ちはお察し致しますが、今日というわけには参りませんでしょうか？」

女官長は陛下に頼まれてここまで来た手前、手ぶらでは帰れませんので必死で言い募ります。

公爵は女官長の立場も察しながらも、
「申し訳ないが、それは出来かねます。陛下に私から手紙を書きますゆえ、それでお許しをいただきたく存じます。」

「かしこまりました。よろしく願います。」
女官長はがっくりと肩を落として答えました。

「エレナ、すまないが女官長さまを応接間にご案内して、お茶をお出ししておくね。女官長さま、おくつろぎの間に手紙をお書き致しますので。」

公爵はそう言うと、そばで手紙を書き始めました。

公爵夫人は

「では女官長さま、ご案内致しますのでこちらへどうぞ。」
と女官長を促します。

女官長は公爵夫人の案内で部屋を出て、応接間に向かいました。

二人が部屋を出て公爵一人だけになったときでした。
公爵が隣の部屋に向かって声をかけました。

「カール、もうよいぞ。こちらに来なさい。」

隣の部屋から現れたのはナターリアの初恋の人カールでした。

「公爵さま、失礼致します。」

カールは公爵のお見舞いに来ていたのですが、ナターリアが突然見舞いに戻ってきたので遠慮して別室に控えていたのでした。

「カール、幼なじみなのだから遠慮することなくナターリアさまにお逢いすればよかったのに……。」

「いえ、公爵さま。私は男爵家の跡継ぎに過ぎない身にごぞいます。」

側妃さまにお逢いすることなど恐れ多いことでございます。」
遠慮がちにカールが答えます。

公爵はため息をついて、
「そんなに遠慮することはないのに。私はそなたを息子のように思っているのだから…。」

「ありがたきお言葉でございます。しかし、身分違いでございますゆえ…。」
俯き加減でカールは公爵に答えます。

「すまないな、カール。私の本当の息子にしたいと思っていたのだが…。」
申し訳なさそうに公爵がカールに言います。

「いいえ、公爵さま。もう終わったお話しにございます。もともと私には過ぎたお話しでしたから。」顔を上げて、公爵にきっぱりとカールは言います。

「そう遠慮ばかりするな。そなたの悪い癖だぞ。さて、手紙が書き終わった。すまないがカール、これを応接間まで届けてきてくれまいか？」
そう言つて公爵はカールに手紙をことづけます。

「私でよろしいのですか？」
ここでもカールは遠慮します。

「カール、いまここにはそなたしかおらぬではないか。頼みを聞いてくれまいか？」
公爵はカールの手をとって頼みます。

「かしこまりました。では、お届けして参ります。」
仕方なくカールは部屋を出て、応接間に向かいました。

女官長の帰り（前書き）

サブタイトルを分かりやすく名前をつけました。読みやすくなったかと思えます。

女官長の帰り

はあ…

女官長は困っていました。陛下の使者として、せつかく公爵家まで来たというのに側妃ナターリアを連れて帰ることが出来ないのです。た。

ここ応接間で出された公爵夫人手作りのアップルパイも紅茶も味がまるでないのです。

それに気づいた公爵夫人も、気の毒に思いましたが、このままナターリアを帰すことも出来ないのです。

そんな雰囲気の中、カールがやってきました。

「失礼します。公爵さまの手紙をお持ちいたしました。」

カールはそう言って、応接間に入って来ました。

カールの姿に驚いた公爵夫人は、

「まあ、カールどの。どうしてあなたが公爵さまの手紙を…。」

「公爵さまのお見舞いに伺いましたら、こちらに手紙をお持ちするようにとのことでしたので。」

遠慮がちにカールが公爵夫人に答えます。

「まあ、公爵さまはカールどのに小間使いのようなことをさせて…。ありがとうございます。お手をわずわらせて申し訳ありません。」

手紙を受け取りながら公爵夫人はすまそうにカールに詫びます。

「いえ、どうぞお気になさいませんように。」
カールは微笑んで公爵夫人に答えます。

そのやり取りを眺めていた女官長は、怪訝そうに、
「あの、公爵夫人、こちらの方はどちらの…？」

「失礼致しました、女官長さま。こちらはフレデリカ男爵家のカールどです。公爵さまが息子のように思っておられる方です。今日もお見舞いに来て下さいましたのよ。」
「こやかに公爵夫人は言つて、カールを女官長に紹介します。」

それを聞いた女官長は、
「そうでしたか。フレデリカ男爵家の…。初めまして、カールどの。」
「
と言つてカールに挨拶をします。」

「カールどの、こちらは王宮の女官長さまであられます。」
公爵夫人はカールに女官長を紹介します。

カールは少し緊張気味に挨拶を交わします。
「初めまして、女官長さま。カール・フレデリカでございます。お逢い出来て光栄でございます。」

「こちらこそ、公爵さまの息子同様の方にお逢い出来るなんて光栄ですわ。」

「いえ、この身には過ぎたことです。」
遠慮がちにカールは答えます。

公爵夫人はため息をついて、
「カールどの、またそんなことを……。遠慮はいらないと申している
でしょう？」

そう言われてカールは困った顔をしながら、

「申し訳ありません、公爵夫人。なかなか慣れないものですから……。
あの、それでは私はこれにて失礼させていただきます。」
そう言つてカールは帰つて行きました。

カールが帰つた後、女官長は公爵夫人に尋ねました。

「なかなかの好青年ですね、カールどの。ナターリアさまとも
面識がおりなのですか？」

「いい青年でしょう。私も気に入っておりますの。ナターリアさま
とも幼い頃、兄弟のように仲良くしておりましたのよ。」

公爵夫人はカールのことを褒められて嬉しいのか、機嫌良く答えま
す。

「そうでしたか。さて、それでは私も、長く王宮を離れてはいただけ
ませんからそろそろ失礼いたします。」
女官長はそう言つて立ち上がりました。

公爵夫人はあわてて手紙を女官長に渡して、

「これは長居をおさせ致しまして、申し訳ございません。くれぐれ
も陛下によしなにお伝え下さいますようお願い申し上げます。」
そう言つて帰つて行く女官長を見送りました。

そのころ、王宮の執務室では陛下が執務も上の空でそわそわとしながらナターリアの帰りを待ちわびていました。

そして、迎えに行った女官長が帰ってきたと聞くと、うれしそうにここに女官長を連れてくるように指示をしました。

そして、報告に現れた女官長からナターリアを連れて帰れなかったと聞くと、陛下の顔は笑顔からあつという間に悲しいひきつった顔になりました。

「どうしてなんだ…」

今にも泣きそうな顔で陛下が尋ねます。

「申し訳ございません、陛下。ただ、ロプーヒナ公爵さまより陛下にお手紙をことづかって参りました。」

そう言って女官長は公爵からの手紙を陛下に手渡しました。

女官長の帰り（後書き）

いつナターリアは戻ってくるのかこつこつ期待です。

うゝ、腕が震える。後宮らしい展開が始まるぞ！

陛下の嘆き

さて、ここは王宮の執務室、どんよりした空気に包まれております。王太后によつて数時間前に実家に帰された側妃ナターリアを 迎へに行つたはずの女官長が手ぶらで帰つてきたからです。

いや、ナターリアの父のロプーヒナ公爵の手紙を携えて戻りましたが…。

報告を聞いた陛下はがっくりと肩を落としながらも公爵からの手紙を震える手で読んでいます。

「陛下、公爵さまは何と書かれておられましたの？」
心配そうに女官長は陛下に尋ねます。

泣きそうな顔を上げて陛下は、
「公爵は、ナターリアばかり寵愛しては他の妃の嫉妬を買つて今回のようなことになるから、他の妃にも配慮しろと…。」

うつうつ…、

最後は涙まじりに答えます。

女官長は心の中で、さすがは公爵さまだこと。後宮を良くわかつてらっしゃると思いました。

「どうしてなんだ…。私はナターリアがいてくれるだけでいいのに。他の妃などいらぬのに…。もしや、公爵は私を恨んでいるのかな、

女官長？」

さきほどまで執務を威厳ある態度でこなしていた別人のように情けない態度で陛下は女官長に尋ねます。

「まあ、何をおっしゃるかと思えば…。」

公爵さまが陛下をお恨み申すなど有り得ませんよ。」

含み笑いをしながら、幼い子供をなだめるように女官長は陛下に話しかけます。

「だってマールヤ、ナターリアを後宮に迎えたいと何年も前から頼んでいたのにずっと断ってきたじゃないか。公爵が病気になったとき、弱みにつけこむようで悪いとは思ったけど頼んだら、ようやく承知してくれた。そのことを恨んでるんじゃない？」

うつつ…

子供のように涙を流してグズグズと言う陛下はもはや威厳も何もありませんでした。

女官長は、若くても威厳のある立派な陛下にお育て出来たと自負していたのに…。この情けない姿。

どこで育て方を間違えたのかしらと思ひ、ため息をつきつつ、

「公爵さまはそのような方ではありませんよ、陛下。ずっとお断りなされたのはきつと何かわけがおりになったのでしょう。」

「わけって、どんなわけ？」

俯いていた陛下が顔を上げて女官長に尋ねます。

陛下に聞かれて、女官長はちよつとつまり、

「それは分かりませんが、まあ、でもよいではありませんか？今は

側妃さまにお迎え出来ているのですから。」

陛下をなだめながら女官長は、なぜ公爵さまは断ってきたのかしらと思いました。側妃の実家には王宮からの援助もあるし、王妃になれるかも知れないのに…。もしかして、ナターリアさまに結婚させたい人が…。いや、まさかそんな話しは聞いたことがないし。

「確かにそうだけど…。」
「うっうっ…、陛下は
さらに涙ぐみます。」

女官長は、仕方ない陛下だなと思いつつながら、
「気にされることはありませんよ。それから、お妃は何人もおられたら、それぞれに気遣いをするのも国王陛下の勤めでございますよ。」

冷静に女官長は陛下を諭します。

陛下を諭しながら、女官長は考えていました。誰かしら？ナターリアさまのお相手は…。噂にもならない相手なんて。

「分かってるけど、どうしてもダメなの？マアヤ。」
上目遣いに陛下が尋ねます。

「はい。ナターリアさまのお為でございます。万一のことがないようにと、公爵さまは涙をのんでご助言なされたのでございますよ。」

「分かった。努力するよ。でも、今日は自分の部屋で寝るからね。」
陛下はそう言つと肩を落としてトボトボと自分の部屋へ侍従を連れて歩いて行きました。

その小さくなっていく後ろ姿を眺めていた女官長は、
気の毒だけど仕方ないわね。だけど、相手は誰だったのかしら、噂
にもならない相手なんて。

確か公爵さまは公爵家の侍女だったいまの公爵夫人と結婚されたか
ら…。

もしかして、あの、公爵家で逢ったカールとかいう青年かしら？
うん、でも、いまさら何も起こらないわね。
きつと…。

それから2日後、ナターリアは侍女のアリスと共に王宮に戻ってき
ました。

父の公爵に後宮の心得を十分にたたきこまれて。

ナターリア戻る（前書き）

たくさんの方にお気に入り登録していただきましてありがとうございます。
います。

励みになります。

ナターリア戻る

「ナターリアさま、もうご出発の時間ではないのですか？」
病床の父のロプーヒナ公爵が側に控えていた娘のナターリアに話しかけました。

「でも、お父さま、私、お父さまのことが心配です。もうしばらくここにいてはいけませんか？」
俯いたままナターリアが父に頼み込みます。

それを聞いたロプーヒナ公爵は少し困った顔をして、
「何をおっしゃいますか。一度決心して、王宮に入られて側妃となられたはず。この父をだしになさいますな。ゴホッ、ゴホッ……」
そう言うつと公爵は苦しそうに咳き込みました。

「お父さま、しつかりなさって……。」

ナターリアが心配そうに父の背中をさすります。

「大事ありません。それよりも、王宮に戻られますように。」

「お父さま……、私、不安なのです。」

ナターリアが戸惑ったように父にすがりつきます。

そんな娘の髪を撫でながらロプーヒナ公爵は娘に語りかけます。
「よく聞きなさい、ナターリアさま。父はもう長いことはない。後ろ盾のない後宮での生活はつらいものになるであろう。しかし、だからこそ陛下にとってそなたの存在は安らぎとなるであろう。私にとってのエレナのようにな。」

「お母さまのように…。」

「そうですね。私には結婚前は公爵家の跡継ぎとして縁談がいくつもあった。だが、どれも家のための愛のない政略結婚だ。私は両親のように冷ややかな結婚生活は送りたくなかった。だからエレナとどんなに反対されても結婚したのだ。幸せだった。エレナやナターリアさまには苦勞をかけてしまったが…。」

「お父さま、そのようなことは…」

「気をつかわなくてもよい。だから申すのだ。後宮におられる他の側妃方はおそらく政略的なもの。陛下には安らぎになるのはナターリアさまだけであろう。だからそのおつもりでお仕えなさい。」

「お父さまはそれで私に後宮に入れとおっしゃいましたの？」

「そうだ。カールと結婚させてやりたいのはやまやまだったが、公爵家を支えていく後ろ盾がない以上致し方ない選択だった。しかし、ナターリアさまは陛下の安らぎとなって生きていければ幸せになれるのではと思っただのだ。許してくれ。」

そう言っつてロプーヒナ公爵はナターリアに頭を下げます。

「お父さま、私、公爵家のために後宮に入ったと思っていたのに、私の幸せのことも考えて下さっていたのですね。」

不安そうだったナターリアが希望が出てきたように笑顔で父に答えます。

「まあ、幸せになれるかどうかはナターリアさま次第ですが…。」

ウインクしながらロプーヒナ公爵はナターリアにおどけて話しかけます。

「お父さまつたら…。分かりましたわ。私、幸せになれるよう頑張りますわ。じゃあ、そろそろ行きますわね。」

ナターリアは最後には笑って父に別れを告げます。

そのとき、侍女がやってきました。

「失礼します。旦那さま、王宮よりナターリアさまのお迎えが参られました。」

「どうやら、お迎えが参ったようだな。行っておいで。」

少し寂しそうに笑ってロプーヒナ公爵が送り出します。

「はい、お父さま。行って参ります。私、きつと幸せになりますわ。だから、お父さまもお大事になさって下さいね。」

ナターリアはそう行って公爵の部屋を出て迎えの馬車に乗りました。

そして、ナターリアは侍女のアリスとともに後宮に戻りました。最初に迎えに出たのは女官長でした。

「ナターリアさま、お戻りなさいませ。」

笑顔で女官長はナターリアを迎えます。

「ごきげんよう、女官長。お忙しい中わざわざの迎え、感謝いたします。」

ナターリアは遠慮がちに女官長に話しかけます。

女官長は以前と違って気遣いの出来るナターリアにハッとさせられ

ました。

「いえ、ナターリアさま。私の役目にございますれば、お気遣い下さいますな。それでは、お部屋でおくつろぎ下さいませ。」

「ありがとうございます、女官長。そうさせてもらいますわ。それから、落ち着きましたら、王太后さまにご挨拶をさせていただきたいのですが……。」

少しはにかんだ笑顔で女官長に話しかけます。

「それは私からお願いしようと思っておりましたのに……。では、早速手配いたします。」

女官長はうれしそうに言っていていそいそと手配に動きました。

そして、善は急げとばかりにその日のうちに王太后との面会の運びとなりました。

「王太后さま、ナターリアさまが女官長とともに参られました。」

それを聞いた王太后は、数日前に帰したナターリアのことで陛下と言い争いをしたので、逢いたくなかったのですが立場上致し方ないので逢うことにしました。

「王太后さま、失礼いたします。本日はナターリアさまが戻られましたので、ご挨拶に参りました。」
女官長は静かに挨拶をします。

「王太后さまにはご機嫌麗しくおめでとうございます。ただいま実

家から戻りましてございます。このたびはおかげさまにて父のお見舞いに行くことが出来ましてお礼申し上げます。」

それを聞いた王太后は完璧な挨拶なのに、嫌味を言われたように感じて眉をひそめて、

「麗しくなどないわ。」

「王太后さま、おとなげないお言葉でございますよ。」
女官長が思わずとがめます。

それを聞いた王太后は不満げに、
「分かつておるわ。ナターリアどの、よう戻られましたな。」

ナターリアは少し怪訝そうに王太后に答えます。

「恐れ入ります、王太后さま。」

王太后は仕方ないと思つて、

「ナターリアどの、公爵はお加減はいかがでしたか？」

ナターリアは王太后の機嫌が悪いので遠慮がちに、

「おかげさまにて少し良くなったようにございます。王太后さま、久しぶりに父に逢えてうれしゅうございました。お礼申し上げます。」

それを聞いた王太后は気をよくして、

「それはなによりでしたね。公爵もナターリアどのに逢えて喜ばれましたでしょう。」

「恐れ入ります、王皇太后さま。」

ナターリアは笑顔で王太后に答えます。

その様子を見た王太后は、少し憎らしく思っていたナターリアをかわいらしく思い、

「ナターリアどの、さきほど戻られたばかりで疲れておられるでしょう？今日はゆっくりお休みなさいなさい。また、おいでなさい。」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えまして、これにて失礼いたします。」

ナターリアはそう言うと女官長とともに王太后の居室を下がっていききました。

王太后はナターリアの様子を見るにつけても、シャルロッテとの違いを見せつけられたようのため息をつきました。

アレクセイはすぐにもナターリアどのの部屋に行くだろうけど、ナターリアどのの言葉の意味が分かってくれるかしら…。

王太后はナターリアが去った後、心の中で呟きました。

そのころ、王宮の執務室にいる陛下はナターリアが戻ってきたと聞いて、大喜びでした。

ナターリアがいない間は後宮に足を向けることはなかったのに、早速その夜にナターリアの部屋を訪れました。

母の気持ちは知らずに…。

ナターリア戻る（後書き）

陛下ははたして公爵の気持ちができるのでしょうか…。

ナターリアとの再会

ナターリアが戻ったと聞いた陛下は、執務を早々に切り上げていそいそとナターリアの部屋に向かいました。

「ナターリアさま、陛下が早速、お越し下さいましたよ。」
侍女のマリアがうれしそうに陛下の訪れを告げます。

それを聞いたナターリアは、
これから本当の後宮生活が始まるのだわと思って、深呼吸をしました。

そして、少し緊張気味に陛下を迎えました。

「陛下、ようこそおいで下さいました。」

陛下は愛しい人に何日かぶりに逢えたのでうれしくて、

「ナターリア、逢いたかったよ。元気だった？」

ナターリアは少し微笑んで、

「はい、少し疲れておりますが元気でございます。陛下もお元気そうですねによりと存じます。」

陛下は少し他人行儀な言い方にひっかかりましたが、気にせず、

「疲れてるの、ナターリア？」

「今日、実家から戻ったばかりなので。」
遠慮がちにナターリアが言います。

「そつえば、母君から聞いたけど公爵のお見舞いに行ってたんだよね。」

苦々しい表情で陛下がナターリアに尋ねます。

「はい。王太后さまのご配慮により父の見舞いに実家に帰らせていただいております。」

突然でびつくりした出来事を思いながら不安そうに答えます。

「ナターリア、聞いて欲しいことがあるんだ。もし、またこういうことがあったときは女官長を通じて余に言ってくれないかな？母君にはなくてね。」

アレクセイが言いにくそうにナターリアに言います。

「は、はい。かしこまりました。」

ナターリアが戸惑ったように答えます。

「ありがとうございます、ナターリア。」

そう言うと陛下はナターリアを両手で引き寄せて抱きしめました。

「陛下……」

ナターリアはいきなり抱きしめられて戸惑ったように上目遣いに陛下を見つめます。

「ナターリア、陛下じゃないよ。アレクセイだよ。」

ナターリアの髪を撫でながら話しかけます。

「アレクセイさま？」

「そう。二人だけのときはそう呼んでね。」

そう言うとアレクセイはナターリアと口づけを交わしました。

アレクセイと口づけを交わしたナターリアは腕をアレクセイの背中

に回した後、

愛おしそうに小さな声で、

「はい。アレクセイさま……。」

それを聞いたアレクセイはたまらなくなり、

「ナターリア、寢室に行こう。」

とナターリアの耳にささやきます。

「陛下、いえアレクセイさま、あの……。」

少し戸惑ったように

言って、アレクセイの体から腕を少し離します。

「ナターリア、どうしたの？」

少し不満そうにアレクセイが尋ねます。

「いえ、あの……、私、ちょっと疲れておりますので、今日はこれで

失礼させていただいてよろしいですか？」

ナターリアは申し訳なさそうに答えます。

アレクセイは離れていくナターリアの腕をつかんで、心配そうに、

「疲れているの？ごめんね。僕、すぐ逢いたかったから。」

「いえ、そのようなことは……。」

少し俯いてナターリアが答えます。

「じゃあ、僕、今日は何もしないから。側に寝ているだけだから。

それならいいでしょ？」

窺うようにアレクセイが尋ねます。

「いえ、それでは、アレクセイさまに申し訳ございませんから。」

困ったようにナターリアが答えます。

「誰かに何か言われたの？もしかして、母君が…。」
疑わしそうにアレクセイがナターリアに聞きます。

「いえ、疲れているだけでございます。お許しを…。」
ナターリアは気まずそうに答えます。

ある意味そうだけど、とても言えないわとナターリアは心の中で思いました。

その様子を見たアレクセイは仕方ないと思って、

「じゃあ、今日は帰るよ。大事にしてね。」
残念そうに言っ、ナターリアの額にキスをして帰って行きました。

陛下が帰った後、侍女のアリスがナターリアを咎めるように

「ナターリアさま、どうしてでございますの？そんなに疲れのようではないようですが…。」

「仕方ないのよ、アリス。王太后さまにご挨拶に伺ったときに、お疲れでしょうから今日は休みなさい。と言われたから。」
苦しそうにナターリアが答えます。

「そうでしたか…。」

「それにお父さまにも言われたしね。私には他の妃と違って後ろ盾が弱い。アリス、あなたもつもりで仕えてちょうだい。」
すまなそうにナターリアが言います。

「ナターリアさま、そこまで気にされなくても…。」
アリスはナターリアの決意を戸惑ったように答えます。

「大事なことなの。分かってちょうだい。」
真剣な表情でナターリアが頼みます。

「分かりましたわ。そのつもりでお仕えいたします。」
マリアはナターリアの真剣さに打たれて、何が起きてもしっかり仕えようと心に決めました。

そのころ、陛下は自分の部屋に戻りながら考えていました。

なぜナターリアは、私を拒んだのだろう。そんなに疲れているように見えなかったが…。

やはり、誰かに言われたのだろうか、それとも他に理由が…。

今日は眠れそうにないな…。

はあ…。

陛下の朝食

朝日が眩しい…。

もう、朝なのか。結局、あまり眠れなかった…。

「おはようございます。陛下、お目覚めでございますか？」
女官のアンナが寝室に入ってきました。

「ああ、アンナか。おはよう。起きている。
ぼんやりした声でアレクセイが答えます。」

ナターリアはもう起きているのだろうか。朝はいつもナターリアがそばにいたのに、今日は…。

「どうしたの？ ございます？ ぼんやりなさって…。さあさあ、今日もスケジュールが一杯詰め込まれておりますから、お支度なさってくださいませね。」
アンナがキビキビと言って、侍女たちに陛下の支度をさせるように指示をします。

「ああ…。」

アレクセイは言われても、ぼんやりしたままでした。

ナターリア、逢いたいな…。今日は逢えるかな。

そんなことを考えているアレクセイにかまわず、何人もの侍女に囲まれて支度をさせられてしまいました。

そして、朝食の時間となりました。
陛下の朝食は王宮に住む王族とすることになっていました。

朝食の席に支度をさせられたアレクセイがたどり着くと、すでに王族が待つていました。

その王族は、母の王太后と妹のテオドラ王女です。

テオドラ王女は亡き父の寵妃の生んだ王女です。王太后は寵妃が早くに亡くなったので王女を引き取って育てていました。

「おはようございます。陛下。」
王太后が微笑んで挨拶をします。

「お兄さま、おはようございます。」
テオドラ王女も続いて挨拶をします。

「おはようございます、母君。それにテオデラもおはよう。二人とも早いですね。」
アレクセイはそう言うと言いつきました。

「お兄さまが遅すぎるのよ。」
テオドラ王女が笑いながら話しかけます。

「そんなに遅かったか？」
アレクセイがぼんやりとテオドラ王女に尋ねます。

それを聞いた王太后がテオドラ王女をたしなめます。
「テオドラ、陛下に対して失礼ですよ。」

テオドラ王女は不満そうに、

「は〜い、お母さま。でも、遅いでしょ？もう、私お腹ペコペコで…」

「悪かったな、テオドラ。さあ、早く食べようか。」
アレクセイがそう言うのと朝食が始まりました。

朝食には焼きたてのパンやベーコンエッグ、料理長自慢の野菜スープなどが並んでいました。

テオドラ王女のお目当ては隣国から献上された最高級のマンゴーで作られたゼリーでした。

「ん〜、最高だわ。」

テオドラ王女は満足そうに次々と朝食をたいらげます。

その様子を見たアレクセイは、からかうように、

「テオドラ、そんなに食べると太るぞ。」

「このくらいじゃ太らないわよ。お兄さま、乙女の楽しみを奪わないで欲しいわ。ねえ、お母さま？」

テオドラ王女は隣にいる養母の王太后に同意を求めます。

王太后は笑って、

「そうね、テオドラ。陛下いえアレクセイ、かわいい妹にそんなことを言っではいけませんよ。」

「母君に言われたら仕方ありませんね。許してくれ、テオドラ。」
アレクセイはテオドラ王女に詫びます。

テオドラ王女は機嫌をなおして、

「分かったわ。ねえ、ところでお兄さまの側妃のナターリアのついで、綺麗な方ね。」

アレクセイは飲んでいたコーヒーを思わず吹き出して、

「ぶっ、テ、テオドラ、ナターリアをどこで見たんだ？」その反応を見たテオドラ王女はおもしろそうに、

「えへへっ、昨日、お母さまに挨拶にいらしたからカーテンに隠れて見てたの。」

それを聞いた王太后は飲んでいた野菜スープを吹き出しかけて、

「ゴホッ、ゴホッ、テオドラ！覗き見るなんて、王女の品位に欠けますわよ。」

「ごめんなさい。だって、お兄さまが夢中になってる方って言うから、見てみたかったんですもの。お茶会にはシャルロットのしか来ないし……。」

テオドラ王女は首をすくめて答えます。

それを聞いたアレクセイはため息をついて、

「母君、特定の妃を鼻屑になさるとは、王太后として相応しくありませんよ。テオドラのことは申せますまい。」

王太后は気まずそうに、

「ごめんなさい、アレクセイ。でも、あなただって、ナターリアどのところばかり行くではありませんか。」

「母君、それはそうですが……。でも、昨日は自分の部屋で寝ましたよ。」

アレクセイは痛いところをつかれながらも答えました。

「あら、そうでしたの？てっきり行かれたものと思ってましたが。」

「ナターリアが疲れてるようでしたから。」
不満そうにアレクセイが答えます。

その様子を見た王太后が、
まあ、ナターリアどのは私の気持ちを察して下さいたのね。
と思い、機嫌が良くなり、

「昨日、戻られたばかりでしたからね。」

「ねえ、お兄さま、お母さま。私もナターリアどのお逢いしたいわ。逢いに行ってもいいかしら？」

テオドラ王女は甘えるように二人に尋ねます。

「そうですね。いきなり王女が逢いに行ったらナターリアどのが驚かれるでしょうから、私が今日のお茶会に招待しましょう。」
王太后がテオドラ王女に提案しました。

「本当ですよ、お母さま。」
テオドラ王女が嬉しそうに答えました。

「ええ、ナターリアどのは18歳で、テオドラは15歳だからきつと話しも合うでしょう。」

王太后は微笑んで話しを決めてしまいました。

その様子を見たアレクセイは、
今日のお茶の時間はナターリアと過ごせないのか
と思い、不満そうに

「待つてください、母君。今日は僕と一緒に過ごすからダメです。」

「じゃあ、お兄さまもお茶会に来ればいいじゃない。ねえ、お母さま？」

テオドラ王女は兄に不満そうに提案します。

「そうですね。みんなで仲良くお茶をいたしましょう。兄なら妹の頼みを聞きなさいな。」

王太后がアレクセイにたたみかけます。

「仕方ありませんね。絶対行きますからね。」
二人を睨んでアレクセイが不満げに答えます。

こうして、王太后のお茶会にナターリアが招待されることになりました。

ただし、このお茶会にはシャルロッテは招待されていませんでした。いつもは招待されているのですが…。

王女のお茶会？

ナターリアは困惑していました。
いきなり王太后のお茶会に招待されたからです。

正直、あまり好かれてないとは感じていたので尚更です。

「ねえ、アリス。王太后さまはどうして私をお茶会に誘って下さったのかしら？」

側に控えていた侍女のアリスに尋ねます。

「私などには分かりかねます。でも、昨日、恐れおおくも陛下を帰されたことを感謝されておられるのではと思いますが。」
「おずおずとアリスが答えます。」

「そうかしら。はあ…。なんだか気が重いわ。」

ナターリアがため息をつきながら言います。

「ナターリアさま、そろそろお時間ですわ。参りませんと。」
「マリアが急かすように言います。」

「もう、そんな時間なの？じゃあ、行きましようか。」
「そう言うとナターリアは立ち上がり、アリスとともに王太后の居室へ向かいました。」

そのころ、王太后のもとではテオドラ王女がナターリアがいつ来るかいまかいままかと待っていました。

「申し上げます。側妃ナターリアさま、お越しでございます。」
そのとき、侍女がナターリアの訪れを告げました。

「ナターリアどの」

陛下に良く似たかわいらしい少女が王太后の居室に入ってきたナターリアの前に現れました。

ナターリアは突然現れた少女に少し驚いたものの、

「あの、ごきげんよう。どうして、私の名前をご存知なの？」
ナターリアは突然現れた少女に尋ねます。

そこへ王太后が現れて、

「テオドラ、おてんばが過ぎますよ。」
と王女をたしなめます。

「お母さま、ごめんなさい。」

テオドラ王女が恥ずかしそうに言います。

「ごきげんよう、ナターリアどの。ごめんなさいね、しつげがなくてなくて…。この娘はテオドラ。陛下の妹なのよ。さあ、ご挨拶なさい。」

王太后はすまなそうにナターリアに話しかけます。

「いえ、そのようなことは…。あの、王太后さま、ご機嫌麗しく存じます。本日はお茶会にご招待ありがとうございます。」
王女と聞いてびっくりしながらも、あわてて、ナターリアが挨拶をします。

「はじめまして、ナターリアどの。テオドラです。よろしくね。」

にっこり笑ってテオドラ王女は挨拶をしました。

「はじめまして、王女さま。お目にかかれてうれしゅうございます。」
「ドキマギしながらナターリアも挨拶します。
どおりで陛下に似てると思ったわ。びつくりした…。」

「ナターリアどの、私、お兄さまが夢中になってる方だと聞いてお逢いしたくてお母さまにお願いしましたのよ。」
笑ってテオドラ王女は話しかけてきました。

王太后は苦笑しながら、
「そうなのよ、ナターリアどの。突然でごめんなさいね。王女が逢いたいと言つものだから、お茶会にお誘いしましたの。さあ、こちらにおいでなさい。お茶会をはじめましょう。」
そう言うと、王太后はナターリアと王女を庭園に準備されているテーブルに案内しました。

そこには美味しい紅茶と焼き菓子を用意されていました。

少し緊張気味にナターリアが席に着くとおすおすと、
「あの、私が作りましたアップルパイを持ってまいりました。よろしければ、お召し上がり下さいませ。」
言って、お菓子の入った箱を差し出しました。

それを見た王太后は、
シャルロットどのは持つてきたことがなかったけど気が利くわね。
「まあ、ありがとう。これをナターリアどのが作られたの？」

「はい。実家でよく作っておりますので…。」
恥ずかしそうにナターリアが答えます。

「陛下が来たらきつと喜びますわね。」
王太后は微笑んで答えます。

「陛下もおいでになられますの？」
ちよつと驚いたナターリアが王太后に尋ねます。

「ええ、来ると言ってたわ。」

「ナターリアどのは、綺麗なだけじゃなくてこんな美味しいものも作れるんですね。すごいです。早速いただきますしよっよ、お母さま？」

テオドラ王女は感心しながら、話しかけます。

王太后は仕方ないなと思い、

「じゃあナターリアどの、王女もこう言ってることですし、早速いただいてもいいかしら？」

「もちろんでございます。どうぞお召し上がり下さいませ。」
ナターリアは、

喜んでいただいで良かったわ。
と思い、安心したように答えます。

それを聞いたテオドラ王女は喜んで、
「いただきます。うっん、美味しいです。」
早速食べはじめました。

その姿を見たナターリアは実家にいる妹のことを思い出しました。
いま、どうしているかしら…。

「…どの、ナターリアどの？」

王太后に話しかけられていることに気づいたナターリアは、ハッと
して、

「失礼しました。何でございませうか、王太后さま？」

「昨日、私の言ったこと分かって下さったのね。ナターリアどの、
ありがとうございます。」

王太后は遠慮がちに話しかけます。

ナターリアはどう返事していいか困って、

「いえ、その、私、昨日は疲れておりましたもので…。」

その様子を見た王太后は微笑んで、

「やさしい方ね、ナターリアどの…。一人の妃に寵愛が集中して
しまつと後宮の秩序は保てないの。それぞれ後ろ盾もありますから
ね。理解してくれて有り難いわ。」

ナターリアはそれを聞いて、

「恐れいります。気をつけます。」

「さあ、いただきましょう。せっかく作っていたいだいたんですから
ね。」

王太后はそう言うとナターリアの作ったアップルパイを食べはじめ
ました。

そして女三人での楽しいお茶の時間を過ごしました。
王太后も最初のお茶会と違って、王女がいるせいかリラックスして
いるようでした。

そしてお茶会も終わりに近づいた頃、アレクセイがあわてて飛び込
んできました。

「ナターリア、まだいるか？」
庭園に飛び込んで来るなり開口一番、アレクセイが叫びました。

その声に驚いたナターリアが思わず振り向いて、
「陛下、まだおります。」

その息子の様子を見た王太后は苦笑しながら、
「陛下、ここは私の部屋ですよ。私に挨拶はないんですの？」

母の存在に気づいたアレクセイが気まずそうに、
「あ、すみません。母君、いま来ました。間に合いましたね。」

「ぎりぎり間に合いましたよ。ナターリアどのがアップルパイを作
ってきてくれましたね。」

王太后はそう言うと、アレクセイのために紅茶を用意させました。
アレクセイはナターリア手作りのアップルパイが食べれると聞いて
嬉しそうに待っていました。

しかし、時すでに遅し、テオドラ王女が最後の一つを食べてしまっ
た後でした。

王女のお茶会？

「あら、アップルケーキがないわ…。」

王太后がテーブルの上の菓子箱の中を探しますが、見当たりません。

「お母さま、私がいま食べてるから。」

そう言っつて、テオドラ王女が美味そうに最後の一つをたいらげました。

それを聞いたアレクセイが、不機嫌そうに、

「なんで食べたんだ、テオドラ！」

「だつて、お兄さまがもう来ないと思っただんですもの…。」
テオドラ王女が不満げに答えます。

ナターリアが助け舟を出すように、遠慮がちに、

「あの、こんなものでよろしければまた作って参りますから…。」

「本当？今度は僕だけのために作ってよ〜」

アレクセイが甘えるようにナターリアに話しかけました。

「はい。お気に入るかどうかわかりませんが…。」
ナターリアがちょっと笑って答えます。

「ううん。ナターリアの作るものなら何でも気に入るから、作ってね。」

アレクセイがナターリアの手を握って頼んできました。

「はい…。」

ナターリアが周りの目を気にしてか、恥ずかしそうに答えます。

「ゴホン、ゴホン…。」

王太后がわざとらしく咳をしました。

それに気づいたアレクセイが、

「母君、どうされました？」

王太后が苦々しく、

「どうされたじゃありませんよ。アレクセイ、未婚のテオドラの前ですよ。少し、慎みなさい。」

アレクセイは

いいところだったのに、と不満げに妹を見て、

「テオドラ、いたのか？」

「さつきからいるじゃない、お兄さま。」

膨れっ面でテオドラが答えます。

「そうだったか。悪い悪い…。」

頭をかきながら、アレクセイがばつがわるそうに答えます。

「悪いじゃありませんわ、お兄さま。乙女の目の毒なこととはなさらないで下さいませね。」

テオドラがアレクセイにたたみかけます。

「乙女って…。だいたい、テオドラがケーキを食べ過ぎるのが原因じゃないか。」

アレクセイが負けずにテオドラに言い返します。

見かねた王太后が

「もういい加減になさい、二人とも。ナターリアどのが不安そうにしているじゃありませんか！」

二人がナターリアを見ると、不安そうな顔で俯いています。

「ナターリア、大丈夫だよ。君のせいじゃないから。」

アレクセイがやさしくナターリアに話しかけます。

「ナターリアどの、ごめんなさい。あんまり美味しかったから。テオドラも悪いと思って謝りました。」

その時でした。

宰相が息を切らしてやって来ました。

「王太后さま、突然失礼いたします。もしや、こちらに陛下がおいでではございませんか…。」

「お兄さま、いかがなされました？アレクセイならこちらにおりますよ。」

王太后がゆつたりと答えます。

宰相の姿を見たアレクセイはまずいと思いながら、気まずそうに、
「宰相、よくここが分かったな…。」

「陛下、お捜ししましたぞ！執務を放り出して、どちらにおいでかと思えば…。」

陛下を睨みつけるように宰相が言い放ちます。

「ちょっと息抜きにお茶を飲みに来ただけだ。許せ。」いたずらっぽく陛下が宰相に許しを請うように言います。

「陛下、執務を放り出して来られたのですか！まあ、なんてことでしょう。」

王太后がきつい口調にアレクセイを問い詰めます。

「母君、ちょっと抜け出ただけですよ。お許しを…。」
「気まずそうにアレクセイが答えます。」

王太后がため息をついて、

「ナターリアどのが心配だったのでしよう。まったく、この子は…。いじめるでも思ったの？」

アレクセイは頭をかきながら、

「いや、そういうわけではありませんが。ちょっと心配だったもので…。」

王太后は仕方なさそうに、

「この子はまったく…。ナターリアどのの立場も考えなさい。お兄さまいえ、宰相どの、連れていってちょうだい。」

宰相はそれを聞いて、やれやれと思いつながら、

「ありがとございます、王太后さま。では、陛下参りましょう。」

アレクセイは、

「もう少しだけ…。だめか？」

「ダメです。執務は目白押しでございますぞ、陛下。王太后さまが仰せられたでしょう？ナターリアさまのお立場もお考えなさいませ。」

「
宰相は陛下を追い詰めるように話しかけます。

アレクセイはがっくりと肩を落として、

「ナターリア、またね…。」

そう言って、宰相に連れられて部屋を去って行きました。

二人が去った後、ナターリアがポツリと王太后に話しかけました。

「あの、本日は、申し訳ないことでございました…。」

「ナターリアどののせいではないですよ。でも、もう少し慎重に行動なさい。ここはそういうところですからね。」

王太后はしんみりと話しかけます。

「はい、王太后さま。ご教授感謝いたします。
しみじみとナターリアは答えます。」

「お兄さま、よっぽどナターリアどののことが好きなんですね。
なんか、寂しいですわ、お母さま。」

テオドラが王太后にポツリと話しかけます。

「そのうちテオドラにも分かる 때가来るから。好きな人が出来たらね。」

王太后がテオドラを慰めるように言います。

「来るのかなあ、そういう時が…。」
分かったようなわからないような顔つきでテオドラが答えます。

「来るわよ、きつと。ナターリアどの、今日はありがとう。
また、おいでなさい。何も持って来なくてもいいですからね。」
王太后がにっこり笑ってナターリアに言います。

ナターリアはちよつと緊張気味に、

「ありがとうございます。また、伺います。」

「ナターリアどの、またね。」

テオドラは笑って手を振って挨拶をしてきました。

「王女さま、楽しゅうございました。これで、失礼いたします。」
そう言つてナターリアは王太后の居室を出て、自分の部屋に帰つて
行きました。

数日後、その噂を聞き付けたシャルロットが王太后のもとを訪れて
いました。

シャルロットとお茶

「えっ、シャルロットどのが？」

朝食会からテオドラ王女とともに後宮に戻った王太后は、侍女から突然のシャルロットの訪問を告げられます。

何かしら、突然…。

もしかこの間のことを聞きつけたのかしら。

「そう、突然なにかしらね。で、お待ちいただいでるの？」
王太后が侍女に尋ねます。

「恐れ入ります、王太后さま。お話ししたいことがあるそうです、お待ちしますとのことでしたので。」
侍女が遠慮がちに王太后に答えます。

「分かりました。すぐ参りましょう。」
王太后は微笑んで答えます。

それを聞いた侍女はホッとして、
「かしこまりました。すぐお伝えしてまいります。」
そう言っつて、シャルロットの待つ部屋に向かいました。

そばにいたテオドラ王女が不安そうに、
「あの、お母さま…。」

その様子を見た王太后が、仕方なさそうに、
「テオドラ、大丈夫ですよ。そなたは部屋に戻りなさい。」

「いいんですの？ありがとうございます、お母さま。私、あの方苦手で…。」

テオドラは明らかに安心した表情で自分の部屋に戻って行きました。

テオドラ王女は、王女の前でも養母の王太后にあまえて、わがままに振る舞うシャルロッテが苦手でした。

王太后も大臣の娘であるシャルロッテに遠慮しているようで、なんだか母を取られたような気がするのです。

「王太后さま、突然お伺いしまして申し訳ございません。」
微笑んでシャルロッテが挨拶をします。

「かまいませんよ、シャルロッテどの。さあ、お茶をどうぞ召し上がれ。」
王太后が笑顔で対応します。

「ありがとうございます、王太后さま。そうおっしゃって下さると思いましたわ。」
につこり笑ってシャルロッテが答えます。

「ところで、何かお話しがあると伺いましたが？」
ちよつとあまやかせ過ぎたかなと思いつつ、王太后が話しを切り出します。

「はい。先日、ナターリアさまをお茶会に招待なされたと伺いました。」

シャルロツテが少し不満そうに言います。

「ええ、王女が逢って見たいと言うものですからね。」
王太后が、
やはりこの話しだったのか、
と思いつつ答えます。

「しかも陛下までおいでになられたとか…。なぜ、私を招待して下さいませでしたの？」
シャルロツテが恨み言を言います。

それを聞いた王太后が、
まさか王女が嫌ってるからなどとは言えないので取り繕うように、
「ごめんなさいね。ついうっかりしましてね。陛下も息抜きに突然来られて…。それにしても、シャルロツテどのはよくご存知なこと。」

シャルロツテは、
まさか王太后の侍女に袖の下を渡して、情報をもらっているとも言えずにさりげなく、
「そうでしたの。私も陛下にお逢いしたかったですわ。でも、その場になくて幸いでした。」
皮肉そうに微笑みながら言います。

「それはどうということですか？」
シャルロツテを問い詰めるように王太后が尋ねます。

「まあ、怖いですね。王太后さま、ナターリアさまが執務のある陛下を無理矢理お茶会に誘い出したともっぱらの噂でございますのよ。」

それを聞いた王太后が、

「まあ、そんな噂が出てましたの…。」

「ええ。王太后さまも巻き込まれて、お気の毒でございますわ。ナターリアさまではなく、私をお誘い下さいましたらこんなことになりませんでしたのに。」

シャルロツテがいかにも気の毒そうに皮肉まじりに話しかけます。

王太后はそれを聞いて、

ここの中での出来事が外に洩れるとは…。やはり、誰か洩らしているのか、油断がならないわね。

「お気遣いありがとうございます。心配して来て下さったのね、シャルロツテどの。」

「いいえ、とんでもございません。他ならぬ王太后さまですもの。それより、ナターリアさまには気をつけられた方がよろしいのではないかと思ひまして。」

シャルロツテが王太后を窺うように話しかけます。

「そうですね。シャルロツテどののお気持ちは嬉しく思います。言いながら王太后は、

油断のならないのはシャルロツテどのかも知れないわね。

噂ももしや…。

と考えていました。

シャルロツテは、

さすがはタヌキ婆ね。まあ、いいわ。

「分かっていただいで嬉しいですね。王太后さま、たまにはお茶会にお誘い下さいませね。最近、お声がかからなくて寂しゅうございます。」

あまえるように話しかけます。

王太后はそれを聞いて気まずそうに、

「それは悪かったわね。王太后としての立場もあるから許してね。また、招待するわ。」

「まあ、そうでしたか。また、ご一緒にお茶が出来るのを楽しみにしておりますわ。では、私はこれにて失礼いたします。」
シャルロツテは微笑んで答えると、用がすんだとばかりに立ち上がりました。

「あら、そう。じゃあ、またおいでなさい。」

王太后はそう言って、シャルロツテを見送りました。

さて、そのころ噂の主であるナターリアは流れている噂に心を痛めておりました。

そのため、アレクセイから午後のお茶の時間に来たいと知らせがきても、体の調子が悪いのでと断っております。

いや、実際ふさぎ込んで気分がすぐれませんでした。

その知らせを聞いたアレクセイは悲しく、がっかりしました。

仕方ないので、ナターリアの立場を良くするために気が進みませんでした。が、シャルロットの部屋に行くことにしました。

そして午後のお茶の時間にシャルロットの部屋にアレクセイが訪れました。

「まあ、陛下。ようこそおいで下さいました。お逢いしようございましたわ。」

満面の笑顔でシャルロットがアレクセイを迎えました。

その様子を見たアレクセイは悪かったなという思いにかられて、「しばらく来られなくてすまなかったな。いろいろ忙しくてな。」

「いいえ、陛下。こうして来て下さっただけでうれしいですわ。さあ、お茶をどうぞ。」

そう言って、シャルロットはアレクセイにお茶を勧めます。

「陛下、こちらは隣国から取り寄せました紅茶でございますのよ。陛下に召し上がっていただきたくて用意しましたの。」
「自慢そうに陛下に勧めます。」

それを聞いたアレクセイは、少し嫌な気持ちでしたが、「そうか。せっかくだから、いただこう。」

飲むととても香ばしい香りがして美味しい紅茶でした。
アレクセイは、ナターリアにも飲ませてやりたいと思ひ、

「美味しい紅茶だな。少し分けてはもらえぬか？」

それを聞いたシャルロットは喜んでもらえたと思つて、
「もちろんでございますわ。侍女に用意させますわ。」

「ありがとう。すまぬな。」

アレクセイは微笑んで礼を言います。

「いいえ、他ならぬ陛下のおためですもの。」
シャルロットはにっこり笑つて答えます。

そんな話しをしているうちにアレクセイが執務に戻る時間となりました。

シャルロットの失態

シャルロットはホッと一安心していました。

王妃候補に相応しい後宮でも勢力のある妃に与えられる豪華な部屋を賜っているのに、なぜか肝心の陛下があまり部屋を訪れてくれません。

大臣の娘で王太后のお気に入りであるはずの私がなぜ…？

やっと訪ねてくれて、紅茶も美味しいと陛下に褒めてもらえたのでシャルロットは、一安心で、幸せな心地でした。

そんなときでした。

ぼんやりとお茶を飲んでいたアレクセイが、

「もう、戻らなければならぬ。」

それを聞いたシャルロットが顔色を変えて、

「陛下、まだいいではありませんか？」

「いや、そういうわけにもいかないから。」

そっけなくアレクセイは言って、立ち上がりました。

「そんな、久しぶりにお逢いできましたのに…。」

残念そうにシャルロットが言って、アレクセイの手をとります。

その様子を見たアレクセイは思いました。

ナターリアは一度もこんなことを言わなかったな。

言ってくれば少しぐらい居るのにな…。

「陛下、いいでしょう…。」

シャルロツテがあまえて話しかけてきました。

アレクセイはハツとして、握ってきた手を離して、

「すまない。もう時間なんだ。」

「陛下、お迎えに参りました。」

陛下付きの女官アンナが迎えにやってきました。

陛下はシャルロツテに悪いと思いながら、

「ああ、いま行く。」

そう言って立ち去ろうとしました。

そのとき、シャルロツテがさつとアレクセイの前に立ちはだかり、

「陛下、お待ち下さいませ！もう少しだけこちらにいらして下さい。」

その姿にアレクセイも少し驚き、苦虫を潰したような顔で、

「無礼だぞ、シャルロツテどの。いまから会議があるのだ。許せ。」

「それなら、お父さまに言えば時間などどうにでもなりますでしょう？アンナとやら、お父さまに会議の時間を遅らせるようシャルロツテが申していると伝えてきてちょうだい。お願い。」

シャルロツテがアレクセイとアンナに哀願します。

アンナは、女官になってから妃からこんなことを言われたのは初めてのことなので、どうしてよいか分からず、アレクセイの方を向いて、

「陛下、あの…。」

アレクセイはさすがに腹をたてて、強い口調で、

「シャルロツテどの、無礼と申しているであろう！行くぞ、アンナ。

」

そう言つて部屋を後にしました。

アンナもあわてて、

「シャルロツテさま、失礼いたします。」

と言つと部屋を出て行きました。

残されたシャルロツテは何が起こつたかすぐに理解出来ませんでした。

これまで大臣の娘として生まれ、叶わないことは何一つありませんでした。

それがいま、起きてしまったのです。

どうして…。

陛下はなぜ居て下さらなかったの？

お父さまなら何でも私の望みを叶えてくれたのに…

シャルロツテは呆然と立ち尽くしてしばらくその場を動くことが出来ませんでした。

会議があるために後宮から会議室に向かったアレクセイは、会議の前に女官長を呼び出しました。

「陛下、お呼びと伺いましたが、何用でございますよう？」

アレクセイは不機嫌そうに、シャルロッテの部屋であった出来事を話しました。

「まっ、そのようなことが…。」

女官長はさすがに驚いて絶句してしまいました。

「まったく母君といい、シャルロッテどのといい…。無礼にもほどがある。女官長、注意をしておくように。」

ため息をつきながら、アレクセイは女官長に指示をしました。

「かしこまりました。そのようにいたします。」

女官長は、困ったことになったなと思いながら答えました。

そして、陛下の命令でもあり仕方なくシャルロッテの部屋に行き、注意をしてみました。

そして、案の定、シャルロッテは王太后に泣きつきました。

「王太后さま、私、くやしゅうございます。陛下に少しだけ居てほしかっただけでございますのに…。」

涙まじりにシャルロッテが王太后に訴えます。

女官長から一部始終を報告を受けていた王太后は困った顔をして、「シャルロッテどのの気持ちも分かりますが、それは陛下に対して無礼ではありませんか？」

「王太后さままでそんなことをおっしゃるのでございますか！どうしてナターリアさまだと何も言われなくて、私が言われなくてはならないのでございます?」

シャルロッテはくやしそうに王太后に尋ねます。

それを聞いた王太后がハツとして、

「シャルロッテどの、何を言ってるのですか?」

「とぼけないで下さい。ナターリアさまが執務のある陛下をお茶会に連れ出したではありませんか?それなのに、何のお咎めもないのになぜ私だけが…。」

プリプリと怒りながら、シャルロッテが訴えます。

王太后はため息をついて、

「シャルロッテどの、違うのですよ。あれは陛下が勝手にお茶会に来ただけなのです。ナターリアどのはその場にいただけで…。」

「ごまかさないで下さいませ。ナターリアどのに逢いにきたのなら、同じことでしょう!」

シャルロッテはかまわず応戦します。

王太后はさすがにあきれて、

「それならもう何も言いませんよ。けれど、陛下の機嫌を損ねることのないように気をつけて下さいね。陛下には私から執り成しておきますから。」

それを聞いたシャルロッテはホツとして、

「ありがとうございます。気をつけますので、執り成し、よろしく願います。」

その様子を見た王太后は、私も亡き陛下に居てほしかったけどそこまでしたことはなかったわ。嫌われたくなかったし、妃にあるまじきこと。これでは王妃は務まらないかも知れないわね。寵妃のところに通ってもドンと構えていないといけないのに…。

数日後、王太后のお茶会に三人の側妃が揃って参加していました。

シャルロツテはなぜ二人も参加するのかと不満でしたが、王太后の意向ですから仕方ありません。

「王太后さま、ご招待ありがとうございます。」

「よう参られました、側妃方。さあ、こちらへおいでなさいませ。」
王太后が笑顔で迎えます。

「いかがですか、後宮での生活は？もう慣れましたでしょう。」
王太后が三人に問いかけます。

ナターリア倒れる(前書き)

ちょっと、いじめが始まります。

ナターリア倒れる

午後のひだまりの中、後宮の庭園にしつらえたテーブルで王太后主催のお茶会が行われておりました。

美しい三人の側妃が後宮に入って以来、一同に会しておりました。

「はい。王太后さまのお導きで慣れてきたようでございます。一番先に口を開いたのは誰あるうシャルロットでした。失態を演じたとはいえ、王妃候補としての自負がありました。」

「それはなによりです。ナターリアどの、オリガどのはいかがですか？」

王太后はにこやかに尋ねます。

「おかげさまにて、少しずつ慣れてきたようでございます。オリガがシャルロットをちらっと見て、微笑みながら答えます。」

「私も少しずつですが、慣れてきたようでございます。先日のお茶会の陛下の来訪のことを気にしてか、ナターリアが遠慮がちに答えます。」

「それはそれは…。後宮は実家とは違い、勝手の許されぬところですが、慣れると快適なところですよ。そうであるう、女官長？」

そばに控えていた女官長に王太后は尋ねます。

「仰せのとおりでございます、王太后さま。」

女官長は微笑んで答えます。

それを聞いたシャルロッテは自分に対する当てつけかと思い、カチンときて、不機嫌そうに紅茶を飲みました。

その様子を見ていたオリガは、ニヤツと笑い、

「まことにさようございますね。妃として規則は守らねばなりません。そういえば、過日は王太后さまもナターリアさまの手作りのケーキを召し上げられたとか？」

「ええ。とても美味しかったですわ。でも、王女が食べてしまって陛下が召し上げられなくて残念そうで。」

クスクスと笑いながら、王太后が答えました。

「まあ、そうでしたか。私もいただきましたのよ、ナターリアさまがお訪ねいただいた折りにお持ちいただきましたものですから。」
微笑んでオリガが答えます。

それを聞いたシャルロッテが、
いつの間にオリガはナターリアと仲良くなったのかしら。私の誘いはのらずに…。

と思い、憎らしくなり思わず、

「ナターリアさまはケーキをお作りになりますの？」

「はい。母とよく父のために作りましたものですから。」
ナターリアは俯いて恥ずかしそうに答えます。

「それはそれは、公爵夫人は以前はお屋敷に仕える侍女でいらしたとか。その名残で作られておられたのかしら？ ナターリアさまともねえ…。」

意地悪そうにシャルロッテはナターリアに尋ねます。

ナターリアは、母を侮辱された気がして唇を噛み締めながら、
「そのようなことはありません。母と私は父に喜んでもらいたくて
作っただけでございます。」

「いずれにしても妃としての振る舞いではございませんわね。いつ
そのこと侍女におなりになってはいかがかしら？」

鼻で笑いながらシャルロットがナターリアに尋ねます。

さすがにそばに控えていた女官長が、

「シャルロットさま、お言葉が過ぎるようでございます。お慎み下
さいませ。」

「何を申しておる？菓子を作るのは侍女や料理人の仕事であろう。
妃に相應しい振る舞いではないから申したまでのこと。そうではご
ざいせんか、王太后さま？」

シャルロットがそう言って、王太后に同意を求めます。

「まあ、確かに料理人などの仕事ですからね。しかし、シャルロッ
テどの、そのことは先日、ナターリアどのに注意しておりますゆえ
…。」

苦笑いしながら王太后が答えます。

それを聞いたシャルロットは勝ち誇ったように、

「まあ、そうでしたか。ナターリアどの、お気をつけにならないと
いけませんわね。」

ナターリアはそれを聞いて落ち込んでしまい、

「はい。申し訳ございません。以後気をつけます。」

「あら、いやだ。ナターリアどの、これでは私がいじめているみた

いじゃない。私は妃に相応しい振る舞いをして欲しいだけですからね。」

楽しそうにシャルロツテがナターリアに話しかけます。

「はい。お気遣いありがとうございます。」

ナターリアが俯いたまま答えます。

それを見ていたオリガが、いかにも心配そうに、

「大丈夫でございますか、ナターリアさま？」

「はい…。」

ナターリアが顔を上げて少しはにかんで答えます。

「さきほどから、紅茶もお菓子も手をつけておられませんけど…。」

よほどお気に病んでおられますの？」

オリガがちらつとシャルロツテを見ながらナターリアに話しかけます。

「いえ、ちよつと体調がすぐれないものですから…。」

ナターリアがオリガに顔を曇らせて答えます。

「ナターリアどの、いくら体調が悪くても王太后さまがせっかくご用意されたものを手もつけられないなんて失礼じゃありません？」

シャルロツテが微笑んで尋ねます。

それを聞いたナターリアはどうしてよいか分からず俯いたまま押し黙ってしまいました。

「いいのよ。ナターリアどの、気になさらなくてもいいのですよ。」
王太后がナターリアを気遣うように話しかけます。

そう言われると食べないわけにはいきませんので、ナターリアは、「いえ、大丈夫でございます。せつかくですからいただきます。」そう言っただけで食べはじめました。

しかし、食べはじめた途端、ナターリアは吐き気がしてきました。

ナターリアは口にしたケーキを吐き出すように手を口で押さえてしまいました。

その様子を見たオリガがシャルロッテをちらつと見ながら、

「まあ、大丈夫でございますか？シャルロッテさまのことなど気になさなくてもよろしかったのに……。」

「ちょっと、聞き捨てなりませんわね。私のせいだとおっしゃるの？」

シャルロッテが刺々しくオリガに詰め寄ります。

「他にどなたかいたかしら？」

薄笑いを浮かべながらオリガが答えます。

「お二方ともおやめ下さいませ！王太后さまの御前ですよ。」
女官長があわてて止めに入りました。

「うっ、うっ……。苦しい……。」

ナターリアはそう言うのと倒れてしまいました。

「ナターリアさま、いかがなされました！」

「ナターリアさま……！」

「誰か、寢室にナターリアどのお連れしなさい！それから医者へすぐに呼びなさい！」

王太后がすぐに侍女に指示を出しました。

そして、こんな状況ですからお茶会はお開きとなりました。

「それで、ナターリアどのの容態はどうなのでしょう？」
王太后がナターリアを診た医者に見尋ねます。

「いえ、ナターリアさまはご病気ではございません。」
医者がニコニコと笑って答えます。

「病気ではないと？しかし、あのようになられて…。それにそなた、なぜ笑っておる？」

王太后が咎めるように医者に見尋ねます。

「おめでとうございます。側妃ナターリアさま、ご懐妊でございます。王太后さまには初めてのお孫さまにございますな。」
医者が笑顔で答えます。

それを聞いた王太后と女官長が思わず顔を見合わせました。

「女官長…。」

「王太后さま…。」

そのときでした。

ナターリアが倒れたと聞いたアレクセイが駆け込んできました。

「ナターリアは大丈夫なのですか！」

入ってくるなりアレクセイはナターリアのことを尋ねます。

その様子を見た王太后はため息をついて、

「陛下、入ってくるなりなんです。母に挨拶もなしで……。」

「あ、すみません。母君、心配だったものですから。それで、ナターリアは何の病気なのですか？」

アレクセイは恥ずかしそうに王太后に尋ねます。

「まったく……。ナターリアなどは、陛下のせいで倒れたんですよ。」

王太后はアレクセイに冗談めかして答えます。

「私のせいとはいったいどういうことなんです？ 医者は何と……。」「
顔面蒼白になったアレクセイは王太后に尋ねます。

「クスクス……。アレクセイ、ナターリアなどはお子が出来たのですよ。」

王太后は笑ってアレクセイに伝えます。

王子の誕生（前書き）

いじめがじわじわと始まります。苦手な方はご注意ください。

王子の誕生

「本当なのですか、母君…。」
心なしか震えた声でアレクセイが王太后に尋ねます。

「嘘は申しませんよ。なにしろ王宮お抱えの医師の診たてですよ。さあ、ラウル卿、陛下にご報告なさい。」
王太后が笑顔でそばに控えていた医師に報告を促します。

王宮お抱え医師ラウル卿が進み出て、微笑みながら報告しました。
「陛下にご報告申し上げます。さきほど、側妃ナターリアさまをご診察いたしましたところ、ご懐妊なされておられます。おめでたきことにて、お祝い申し上げます。」

それを聞いたアレクセイは、うれしさのあまり絶句してしまいました。
た。

「何と…。ナターリアと私の子が出来たと…！」

「おめでとうございます、陛下。こんなに早く陛下のお子に恵まれるなんて、マーマもうれしゅうございます。」
女官長も笑顔でアレクセイに話しかけます。

アレクセイは満面の笑顔で顔を硬直させて、
「ナターリアと私の子供が…。」

その様子を見た王太后が、
「陛下、どうなさいました？」
話しかけますが、上の空です。

王太后がアレクセイに近づき、その肩を叩き、

「陛下、陛下！どうしました？」

そうするとアレクセイはハッと我に返り、

「あ、母君。あまりのうれしさにほんやりしてしまっ…。」

ところで、ナターリアはどちらに？

王太后はやれやれと思いながら、

「隣の寝室で休んでいますよ。ラウル卿、よろしいですか？」

尋ねられたラウル卿は、

「はい。落ち着かれましたので、大丈夫でございます。陛下が参られましたら、側妃さまもお喜びでございます。初産は不安なものにございますからな。」

「そうか。では、行ってまいりますぞ。」

そう言うとアレクセイは、笑顔でスキップをせんばかりに寝室に入って行きました。

その後ろ姿を見た王太后が不安そうに、

「大丈夫かしら？あの子…。」

「おそらく大丈夫だと思いますが…。でしたら、すまないけれどアンナ、陛下のそばについてもらえませんか？」

女官長がアレクセイに付き添ってきた娘の女官アンナに話しかけます。

「かしこまりました、女官長さま。」

アンナはそう言うと陛下について寝室へと入って行きました。

陛下が部屋からいなくなったとき、ラウル卿がおずおずと王太后と女官長に話しかけます。

「王太后さま、女官長さま、恐れながらナターリアさまのことでお話ししたいことがございます。」

「ナターリアどののことで…？それはどのような…」
王太后がラウル卿に尋ねます。

「はっ、それは…。」

ラウル卿は俯いて何かを訴えるように女官長の方へ視線を送ります。

それに気づいた女官長が、

「王太后さま、恐れながら人払いを願います。」

それを聞いた王太后が周りにいた侍女に目配せをすると、侍女たちは下がっていきました。

「これでよろしいか？それでどのようなことですか？」

王太后はラウル卿に改めて尋ねます。

「恐れ入ります、王太后さま。実は…」

ラウル卿は陛下に内密でと念を押しながら話し始めました。

そののち、表向きは女官長の指示、本当は王太后の指示でナターリアの部屋の警護に護衛がつくようになりました。

侍女も陛下付きの女官アンナが臨時で仕えるようになりました。

それから時は流れて、ナターリアは難産でしたが元気な男の子を出産しました。

第一王子の誕生です。

アレクセイ17歳、ナターリア19歳のときです。

第一王子の誕生に国中が喜びで沸き立ちました。

ナターリアの実家も王子の誕生に貴族たちが我も先にとお祝いの品々を贈ってきました。

傾きかけた家に見向きもしなかったのに、貴族たちの手の平を返したような振る舞いに公爵夫人エレナも戸惑いを隠せません。

159

そんな中、後宮の一室でオリガが報告を受けていました。

「そう、生まれたの？王子とは見事ね。それで、公爵の様子は…。」

「あまり芳しくないようです。いよいよかと…。」
密使がニヤリと笑って報告します。

「いい仕事をしたようね。お父さまに公爵家との縁談を進めるように伝えてちょうだい。確か、ナターリアさまに妹がいたはずだから…。」
薄笑いを浮かべながらオリガが密使に言います。

「かしこまりました、お嬢さま、いえ側妃さま。そのようにお伝え

します。では、私はこれにて…。」
そう言うと密使は去って行きました。

去ったあと、オリガはゆっくりと紅茶を飲み干しました。
そして立ち上がり、

「さて、そろそろおめでたいナターリアさまのお祝いに参りましようか。」

さて、ここはナターリアの部屋です。

難産で生まれたせいかナターリアは体調を崩し、寝室で横になっていました。

生まれたばかりの王子は乳母とともに王太后の居室にありました。
そのとき、オリガの訪れを知らされました。

「オリガさまが？すぐに迎えに出なくては…。起こしてちょうだい。」
「
そう言うとナターリアは体を起こし始めました。

そばに控えていた侍女アリスがあわてて、

「まだご無理でございますよ。オリガさまには申し訳ございませんが、お帰りいただければよろしいではございませんか？」

「そういうわけには参りません。側妃さまがここまで参られたのに、追いついたとあっては…、ゴホッ、ゴホッ」
「
ナターリアは話していると咳込んでしまいました。

「マリアがそばに寄って、ナターリアの背中をさすりながら、
「やはり」無理でございませよ、ナターリアさま。アンナさんもそ
う思っでしよっ？」

一緒にそばに控えていた女官アンナにマリアが同意を求めます。

「そうですね。でも、側妃を追い返したという噂がたつても困りま
すし…。ナターリアさま、こちらでご対面になっては いかがでこ
ざいませう？」

マリアがナターリアに寝室での対面を提案します。

「でも、失礼ではなくて？」

不安そうにナターリアがマリアに尋ねます。

「大丈夫でございませよ。体調の悪いことはお伝えしますし、私が
ついておりますから。陛下付きの女官の私の前で妙なことはなさ
らないでしよっ。」

マリアが不安を吹き飛ばすように答えます。

ナターリアがマリアの最後の一言が気にかかり、

「妙なことは…？」

マリアはしまったと思いつつながら、笑顔をとり繕い、

「何でもございませんよ。さあ、お迎えのご用意をいたしますので。

「
そう言っ準備のため部屋を出て行きました。」

「ナターリアさま、このたびは王子さま御誕生おめでとっございま

す。」

オリガが微笑んでナターリアに挨拶をします。

ナターリアは寢室で体を起こした状態で、申し訳なさそうに、

「オリガさま、わざわざおいでいただきましたのにこのような状態で申し訳ございません。」

「かまいませんよ。体調がお悪いのでしょうか？出産で亡くなる例もあるのですから、どうぞ大事になさって下さいませ。」
眉をひそめて、オリガがナターリアを気遣います。

「お気遣いありがとうございます、オリガさま。良くなりましたら、改めてご挨拶にお伺いいたしますのでご容赦下さいませ。」
弱々しい声でナターリアが答えます。

「ところで、王子さまはどちらにおいでなのですか？」
オリガが窺うようにナターリアに尋ねます。

王子の誕生（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

今年も引き続き頑張っ更新して行きます。皆さまがお読みいただいているのでそれを励みに頑張っています。

20話くらいで終わるつもりが長くなってしまっ。まだ半分もきてないのに。

陛下の密談

「オリガさま、恐れながら王子さまは王太后さまのもとにおいてでございます。」

そばに控えていたマリヤがナターリアに代わって答えます。

「あら、そう。ところでそなたは見かけぬ顔だが？」
オリガが不審そうにマリヤに尋ねます。

「申し遅れました、オリガさま。私は陛下付きの女官マリヤでございます。陛下のご指示によりお仕えしております。」
微笑んでマリヤが答えます。

「まあ、陛下のご指示で…。よほど、ナターリアさまがご心配なのですね。」
オリガがマリヤを一瞥して答えます。

そして、ナターリアに向かって残念そうに、
「王子さまにお逢いしたかったのに残念ですわ。王太后さまもひどいのですわね。王子さまを引き離すなんて、そう思われません、ナターリアさま？」

「いえ、そのようなことは…。王太后さまは、体の具合が良くなるまで面倒を見て下さっているだけですわ。申し訳ないことでございます。」

弱々しいながらもきっぱりとナターリアが答えます。

オリガはそれを聞いて、
用心深いわね。足を引っ張ることもできやしない…。

「そうでしたか。では、私はこれにて失礼いたします。お大事になさってくださいませね。」

そう言うとオリガは部屋を下がって行きました。

「オリガさま、ありがとうございます。」

ナターリアが軽くお辞儀をして見送りました。

「オリガさま、本日はありがとうございました。」

見送りに出た侍女アリスがオリガに挨拶をしますと、

「確か、アリスでしたね？」

オリガが微笑んでアリスに尋ねます。

「はい。覚えていただいでうれしく存じます。」

パツと笑顔になったアリスが答えます。

「やはりそうでしたか。こちらに何うといつもそばにいらした侍女

だと思いましたがよ。今日はそばにはいなかったんですね。」

オリガが気の毒そうに尋ねます。

「はい……。陛下から派遣された女官方がおいでですから。」

俯いてアリスが答えます。

「そう。よく仕えてましたのね、残念ね。ねえ、お見舞いの品を

渡すのを忘れてしまいましたの。アリスから渡して下さい？」

そう言うとふところから小さな包みをアリスに手渡しました。

「かしこまりました。確かにお渡しいたします。オリガさまのお気

遣いにナターリアさまもお喜びになれますわ。ありがとうございます。」

アリスはうれしそうに包みを受け取った後、お礼を伝えました。

その様子を見たオリガは、

「あ、ねえ、アリス。思いついたのだけど、これは私からでなく、あなたからだと言って渡してはいいかがしら？」

「えっ、そんな…。オリガさまからの贈り物でございますのに。」
戸惑うようにアリスが答えます。

「いいのですよ。ずっとナターリアさまに親身に仕えていたのですからこのくらいのごことは…。お近づきのしるしよ。女官たちと一緒に仕えるなんて大変でしょう？頑張ってね。」
しんみりとオリガがアリスに語りかけます。

それを聞いたアリスは、最近ナターリアのそばで仕えられなかったせいもあって、うれしくなって、

「ありがとうございます、オリガさま。このご恩は忘れません。」

「そんな大袈裟な…。でも、これは人のいない時に渡した方がよしいわよ。これは隣国の有名な紅茶で貴重なものですから、誰かに取られるかも知れないですから、ね。では、私はこれで。」
オリガがアリスに囁くように伝えます。

「はい、お気遣い恐れ入ります。そのようにいたします。これにて失礼いたします。」

アリスが微笑んで答え、オリガを見送りました。

部屋に戻りながらオリガは、

単純ね。うまくナターリアの手元に届くといいけれど…。

ニヤリと黒い笑みを浮かべました。

「アリスさん、どうしたの？」

見送りに行ったはずのアリスが戻ってこないのがアンナが探しにきました。

アリスは、アンナに見られてはまずいと思い、オリガから受け取った包みをあわててふところに隠し、

「何でもありません。ちよっとぼんやりしていただけです。」

「そうなの。ねえ、ちよっと聞いてみるけど、もしかして、オリガさまから何か渡されなかった？」

アンナは周りを気にしながらアリスに尋ねます。

アリスはドキッとなりましたが、

「いいえ、何もなかったですわ。でも、どうしてそんなことを？」

アンナは声をひそめて囁くように、

「そう、それならいいけど。実は、ナターリアさまの体調が悪いのはご出産のほかにはわけがありそうなの。あ、これは内密だから口外しないで下さいね、絶対にね。」

「そんな、ナターリアさまが…。」

アリスは驚いて絶句してしまいました。

「しい〜。まだはつきりしないことだから、だから私たちがここにいるのよ。アリスさんも用心してね。さ、中に入りましょう。」
アンナはそう言うのと部屋の中に入りました。

アリスも続いて部屋の中に入りつつも、オリガさまのあの包みは渡しても大丈夫かしら…。
ふと不安がよぎりました。

さて、ここ陛下の執務室において、アレクセイが宰相と女官長の報告を受けておりました。

「それで犯人の目星はついたのか？」
アレクセイが暗い顔をして尋ねます。

「いえ、残念ながらまだ分かっておりません。ただ、護衛や女官がついてからナターリアさまのご体調が良くなりましたことを考えますと、それ以前の出来事かと…。」
女官長が申し訳なさそうな様子で報告します。

「そうか、引き続き調査を続けよ。して、宰相の方はいかがか？」
アレクセイが宰相にも尋ねます。

「はい。噂ではございますが、ハリス伯爵がかの国と密貿易を行っているとのこと。かの国の貿易で得られる薬の症状がナターリアさまのものと酷似しているとラウル卿の返答を得ております。」
宰相が苦々しく報告します。

それを聞いたアレクセイが体を震わせて怒り、椅子から立ち上がり、叫びました。

「すぐにハリス伯爵を呼べ！真偽のほどを確かめるのだ！」

「お待ち下さい、陛下。これは噂の段階にすぎません。もし、違った場合はいかなされます？お気持ちはお察ししますが、ご自重なされませ。」

宰相があわててアレクセイを押し止めます。

「しかし、ナターリアだけでなく、王子に危険が迫っているのかも知れないのだぞ。国王としても許してはおけぬ…。」

そう叫びながら握った手が震えておりました。

「そうですね、アレクセイ。慎重に行わなくてはなりませんよ。」

そう言いながら入ってきたのは王太后でした。

「母君、なにゆえこちらに？まさか、王子に何か…。」

アレクセイが突然入ってきた王太后に驚きます。

「いえ、王子は無事です。王太后たる私のそばにいて、手を出せるものではございませんよ。」

にこやかに王太后が答えます。

「王太后さま、ご機嫌うるわしゅうございます。」

女官長と宰相が王太后に挨拶をします。

「挨拶はいいわ。それより本題に移りましょう。」

王太后はそう言って陛下の向かいの席に座りました。

「それでうまくいきましたか、王太后さま？」

宰相が王太后に尋ねます。

「ええ、お兄さま。アレクセイ、よく聞いてちょうだい。ナターリ

アどのがこのようになったのは、後ろ盾がないせいよ。それは分かってるわね？」

王太后が話しを切り出しました。

「それは分かりますが…。母君、ご心配には及びません。ナターリアのことは私が守ります。絶対に！」

アレクセイが力強く宣言しました。

それを聞いた王太后が、眉をひそめて言い返しました。

「おだまりなさい！いま、守れてないではありませんか！国王だからと言ってすべてを掌握出来ないのですよ。後宮を甘く見ないでください。」

アレクセイはかつこよく決めつつもりが母に一蹴されてしまいました。

一緒にいた宰相も女官長も同意するように頷きます。

アレクセイはすっかりうなだれて、

「ではどうしろと…。」

「だから母の申すことを聞くのですよ。ロプーヒナ公爵どのはまだ長くはありますまい。亡くなった後、跡継ぎもまだ幼いゆえナターリアどのの妹君に婿養子を迎えてはどうかと思いましたがね。お相手は宰相どのの次男レオンのです。これで後ろ盾も出来ます。いい話しでしょう？」

王太后は自分の手腕に満足そうにアレクセイに話しかけます。

王太后の提案

この国の主であるはずのアレクセイは母の迫力にすっかりまいってしまいながらも、

「し、しかし、お考えは分かりますが。母君はシャルロットを推しておられたのではありませんか？大臣が承知するわけが…。」

それを聞いた王太后は宰相に目配せをしながら、

「おほほ…。アレクセイ、母に感謝なさいな。この母が大臣の了解を取り付けましたの。宰相の長男の夫人はシャルロットどのの姉君ですよ。縁続きになるのですからね。ロプーヒナ公爵どのもよい選択をなされました。ねえ、お兄さま？」

「はい。レオンも幸せ者にございます。ロプーヒナ公爵家の跡継ぎになれるだけでなく、美しいナターリアさまの妹君と結婚出来るとは…。」

宰相もニコニコと笑って答えます。

その様子を見たアレクセイは、
母君も宰相も、恩を売ると見せかけてナターリアを権力争いに利用するつもりだな…。

と思いましたが、いかんせん17歳の若き国王には抵抗したところでいい方法があるわけではありません。

女官長が心配そうにアレクセイの様子を窺いますが、口を挟めるものではありません。

しばらく考えたアレクセイでしたが、いまはこの案を飲むしかあるまいと思って、ため息をつきながら、

「分かりました。ではそのように進めて下さい、叔父君。ナターリアの良き後ろ盾になることを信じていますよ。」

「お任せ下さい、陛下。この叔父が必ずナターリアさまをお守り申し上げます。」

宰相がうれしさを隠し切れない様子で笑顔で答えます。

「感謝します。では、調査も引き続きよろしく頼みます。」
苦々しくアレクセイが言います。

宰相は、アレクセイの表情の堅さが気になりましたが、第一王子の母であるナターリアの後ろ盾になれたことに浮かれて、まあ、気にするほどのことではないかと思い、

「かしこまりました。最善を尽くします。では、これで失礼いたします。」

そう言うと、執務室を後にしました。

宰相が出て行くとアレクセイは王太后にも、

「母君も、後宮におもどりにならなければ、王子のことが案じられますゆえ。」

「そうでしたね。これで一安心ですよ、アレクセイ。では失礼します。」

王太后もそう言うと、後宮に戻って行きました。

二人が出て行き、執務室にはアレクセイと女官長の二人だけになりました。

「陛下、よろしいのですか？」
女官長が心配そうに陛下に話しかけます。

ダンッ！

アレクセイは、悔しさのあまり、握り拳を机にたたきつけました。
「クソッ。いいもなにもないだろ？何も出来ないんだから…。妻一人守れないなんて、なんて無力なんだ…。」

「陛下、お気持ちはお察ししますが、いまは仕方ありませんわ。ですが、これでナターリアさまも後ろ盾を得たのですから。」
女官長は仕方なさそうに答えます。

「ま、確かに…。女官長、今夜はナターリアの部屋に参るぞ。手配してくれ。」
アレクセイが女官長が指示を出します。

「かしこまりました。あの、陛下、差し出がましいようですが、たまには他の側妃さまのもとにも参られませ。ナターリアさまへの恨みを買つもとになります。」
遠慮がちに女官長がアレクセイに進言します。

それを聞いたアレクセイは苦虫をつぶしたような顔をして、
「分かつてはいるが、ナターリアが心配だし、逢いたいんだ。少身体調が良くなつたら他の妃のところにも顔を出すようにする。しばらく大目に見てくれ、マアヤ。」
そう言つてアレクセイはため息をつきました。

そんなアレクセイを見ると女官長は何も言えなくなり、
「分かりました。そのお言葉、お忘れなきように。では失礼いたします。」

そう言うと女官長も執務室を出て行きました。

一人になったアレクセイは、

「国王とは何と不自由な身の上なのだ…。父君のようにには出来ぬな。」

「

そして夜になり、他の皇妃をよそにナターリアの部屋にアレクセイがやってきました。

「ナターリアさま、陛下のお越しでございます。」

「陛下が？気分がすぐれぬと申し上げたのに…。」
「寝室で起き上がって食事をしていたナターリアが言います。」

「はい、申し上げております。でもナターリアさまのことを案じておいでですから…。」
「女官アンナが遠慮がちに答えます。」

「そう言わないでくれ、ナターリア。気分がすぐれぬなら、見舞いぐらいさせてくれ。」
「そう言いながら、侍女の案内も待たずにアレクセイが寝室に入ってきました。」

ナターリアはアレクセイの姿を見ると、戸惑いがちに、
「陛下、ようこそおいで下さいました。ですが、今夜は…。」

「ナターリア、追いつかないでくれ。見舞いに来ただけだ。具合は

「どうだ？」

そう言つてアレクセイはナターリアの寝ているベッドのそばに用意されている椅子に座ります。

「はい。皆がよくしてくれそうですゆえ、良くなつてきているようです。」「
ざいます。」

ナターリアが弱々しく微笑んで、答えます。

「そうか、それは良かった。王子も元気に育っているようだぞ。」「
アレクセイはナターリアの髪を撫でながら言います。

「王子に逢いたい。どんなに大きくなつたことか…。」「
ナターリアがポツリと呟きました。

「そのためにはしっかりと食べて、元気になつてくれ。王子のお披露
目もせねばならぬし、な」

アレクセイはそう言つとナターリアを抱き寄せました。

すると元気だつたところに比べると体がやつれて細く感じ、アレクセイはたまらなくなりました。

「アレクセイさま、いかがなされました？」

ナターリアがアレクセイの様子がおかしいので尋ねてきました。

「いや、なんでもない。あまり、長居しては体にさわるゆえ、もう
行くぞ。しっかりと治すがよい。」

アレクセイはそう言つと、ナターリアのおでこにキスをしました。

ナターリアは恥ずかしくなり、頬を赤らめながらアレクセイのシャ
ツをつかんで、

「アレクセイさま、まだ侍女がおりますのに…」

その姿を見たアレクセイは年上のナターリアがとてもかわいらしく思えて、

「すまぬ。つい、な…。名残惜しいが、また、来る。お休み。」
そう言うとナターリアの頬にキスをしてから、立ち上がりました。

「もうっ！アレクセイさま…。」
ナターリアは恥ずかしいやら、急に体を離されて寂しいやらでプイツと顔を横に向けてしまいました。

「悪かった、ナターリア。機嫌をなおしてくれ。もう侍女の前ではしないから。」

アレクセイが頭をかきながら、謝ります。

「本当ですよ、アレクセイさま。」

ナターリアは、上目遣いにアレクセイに訴えます。

「分かった。それから、いや、また来たときに話そう。」

アレクセイが言葉を濁して立ち去ろうとします。

ナターリアは今までそんなことがなかったので、気になり、

「アレクセイさま、何でございます？」

「いや、たいした話してはないからまた話そう。しっかり頼むぞ、アンナ。」

アレクセイはそう言うと寝室をさっていきました。

残されたナターリアはそれが何なのか、気になりましたがまた話して下さると言われたからいいかと、思いなおして食事を始めました。

それがたいした話したと分かるのは数日後のことです。

ナターリアの部屋を出た陛下は、外で待っていた女官長に、

「女官長、オリガどのの部屋に行くぞ。」

女官長は、アレクセイは私室にもどるものと思っていたので、意外
そうに、

「おもどりではなく、オリガさまのところにてございますか？」

「そつだ。確かめたいことがあるのだ。」

アレクセイは暗い顔をしながら歩き始めました。

陛下、オリガのもとへ（前書き）

オリガは実は可哀相な人かも知れません。ナターリアも愛されすぎて…。

陛下、オリガのもとへ

「陛下、お待ち下さいませ。」

女官長が、足早に歩くアレクセイの後を追いかけます。

「恐れ入りますが、くれぐれもご慎重になさいませ。取り返しのつかぬことになっては一大事にございます。」

「そんなことは分かっている。」

アレクセイは不機嫌そうに女官長に言い返します。

「あ、陛下。忘れておりましたが、ナターリアさまが父君のロプーヒナ公爵さまの見舞いに侍女を遣わしたいとのご希望でございますが、いかがいたしましたでしょうか？」

女官長が思い出したように言いますと、アレクセイが足を止めます。

「何、ナターリアが……。さきほどは何も言っておらなかったが？」
思わず振り向いたアレクセイは、怪訝そうに女官長に尋ねます。

女官長は微笑みながら、

「ナターリアさまは真面目な方ですから、後宮の規則を守っておられるのです。要望のあるときは陛下ではなく、女官長を通じて伝えることになっておりますゆえ。誰かとは大違い、とつ、失礼しました。」

「そうか、ナターリアは体調がすぐれぬのに、父君の心配までしておるのか……。」

アレクセイはため息をついて答えます。

そして、ふっと頭を上げて、

「よい、許す。ナターリアが遣わす侍女とともに女官長、そなたも医師を連れて参れ。」

「私もで、ございますが…。」
女官長が戸惑ったように尋ねます。

「そつだ。第一王子の母の実家に行くのだ。出来るだけのことはしてやりたい。」

「されど陛下、ナターリアさまは王子の母君とはいえ側妃の一人に過ぎません。そのようなことをしてはまた、お立場が危うくなります。いかがでございますよう、私の代わりにアンナを遣わしては？」
女官長はナターリアを気遣ってアレクセイに提案します。

「しかし、それでは…。公爵にナターリアを大事にしているという私の気持ちが伝わらぬではないか？」
アレクセイは不満そうに言います。

「それより特別扱いをしては、ロプーヒナ公爵さまがナターリアさまをお案じになられます。以前、ご指摘になられましたでしょうか？」
それを聞いたアレクセイは、
痛いところをつかれて言葉を失ってしまいました。

「それなら、それでよろしゅうございますね。医師はラウル卿にお願ひしますゆえ。」

ラウル卿は王宮お抱え医師の中でも身分が高く、ナターリアの担当医でもあります。

女官長にそう言われては、アレクセイも仕方なく頷きました。そうしているうちに、オリガの部屋にたどり着きました。

「陛下、ここでお待ち下さいませ。先触れをしておりますので。女官長はそう言って、陛下の訪れを告げようとしたら誰かが部屋から出てきました。」

「あら、あれは…。確かどこかで見たような…？」
女官長は不審そうに呟きました。

アレクセイはそばにいた護衛の一人に声をかけて、
「さきほどの者の後をつけて調べよ。」
と指示を出しました。

陛下に気づいた侍女が慌てて知らせ、オリガがやってきました。

「陛下、ようこそお越し下さいました。」
オリガが笑顔で出迎えました。

「突然すまぬな、オリガどの。」
アレクセイが声をかけました。

「とんでもございません、陛下。おいでいただきつれしゅうございますわ。」

「オリガさま、ごきげんうるわしゅうございます。さきほど誰が来ておられたようですが？」

女官長がさりげなくオリガに尋ねます。

聞かれたオリガはきまずそうに、

「ああ、実家からの使いの者でございますよ。」

「ご実家からの？このようなお時間にでございますか…。」
女官長が咎めるように尋ねます。

後宮では外部からの訪問は夕方までと定められています。

オリガは陛下の前で余計なことを言つと思ひながら、

「つい、長居をしてしまっただけです。お許し下さいませ。」

「オリガどの、以後気をつけるように。ナターリアは規則を守つておるぞ。女官長、このたびは大目に見よ。」

アレクセイはそう言つて女官長に目配せをしました。

「かしこまりました。では、私はこれにて失礼いたします。」

女官長はちらつとオリガを見てから立ち去つて行きました。

オリガは、

女官長め、王女の娘である私に陛下の前で恥をかかせて、このままですむと思わないですよ、

と思ひながら唇を噛み締めました。

アレクセイはそれに気づかないふりをして、

「オリガどの、参ろうか？」

オリガはアレクセイに声をかけられて、はつとして、

「申し訳ございません、陛下。どうぞお入り下さいませ。」

二人は部屋に入ると侍女がお茶を持ってきました。

「女官長は仕事熱心でございますね。」
「オ리가が窺うように話しかけます。」

「そうだな。あれの仕事だ、女官長をあまり困らせるでないぞ。王妃がいればまた違うのかも知れぬが…。」
アレクセイはため息をつきながら、答えます。

オリガは、うまくごまかせたようねと思いながら、
「はい、以後気をつけます。ところで陛下には、そろそろ王妃を決められるおつもりでございますの?」

「まあ、そろそろとは思ってはいるが、特には決めているわけではない。ナターリアの体調もすぐれぬし…。」
アレクセイは紅茶を飲みながら答えます。

オリガはそれを聞いて、やはりナターリアさまを、ふふっ、王妃になるまで命があるかしら…。

「そうですね、ナターリアさまのこと、ご心配ですね。早く良くなつて下さればよろしいのですけれどね。先日、お見舞いにも伺いましたのよ、陛下。」

「そうか、確かオリガどのはナターリアと親しかったな?」

オリガは微笑んで、

「はい。以前にナターリアさまに手作りのケーキをいただいたこともございますの。」

「手作りの…。オリガどのは食べたのか？」
アレクセイは身を乗り出してオリガに尋ねます。

オリガはちよつと驚いて、

「ええ。ナターリアさまに手土産にいただいて、一緒に食べましたの。それが、何か陛下？」

「羨ましいな…。私は妹のテオドラに食べられて食べてないのだ。」
残念そうにアレクセイが答えます。

「まあ、それは…。お元気になられたらナターリアさまにお頼みなさいませ。」

オリガは答えながら、いつまでナターリアさまの話をするつもりかしら…。
と思いました。

「そうだな。ナターリアが手土産を持っていくのなら、そなたも手土産に何か持って行ったのであるっ？」
アレクセイが尋ねてきました。

「さあ、どうでしたかしら？よく覚えておりませんわ。なぜそのようなことをお聞きになりますの？」
オリガが不審そうに尋ねます。

アレクセイは緊張気味に、
「いや、オリガどのも何か作られたのかと思ってな…。」

オリガはアレクセイが照れてるのかと思いきって、

「いいえ。私はあいにく作れませんのよ。確か、お菓子か何かお持ちしたかと思えますわ。私が作ったものをご所望ですか？」

アレクセイは、

ふう〜。気づかれなかった。良かった。

と思いながら、

「もしかしたらと思ったただけだ。気にしないでくれ。」

オリガはその様子を見て、かわいいと思って、

「でしたら、私も作りますわ。他ならぬ陛下のおためですもの。楽しみになさって下さいませ。」

そう言つてオリガはアレクセイにあまえるようによりかかりました。

そのとき、侍女がやってきて、

「寝室のお支度が整いましてございます。」

「そう、分かったわ。もう、さがっていいわ。」

オリガがそう言つて、侍女を下がらせませす。

「陛下、今日はお泊り下さいますの？」

オリガはアレクセイにあまえるように尋ねます。

尋ねられたアレクセイは、困りながら、

疑われてはまずいし、

「そうだな。ここで休むとしよう。」

それを聞いたオリガはうれしそうに、

「うれしゅうございます、陛下。またすぐお帰りになられるのではないかと不安でしたの。いつも寂しゅうございました。今日は一緒にいられるんですね。」

その様子を見たアレクセイはなんだか悪いことをしたような気がして、

「すまなかつたな、オリガどの。では、参ろうか？」

「はい、陛下…。」

オリガは顔を赤らめて、答えます。

その夜はアレクセイはオリガの部屋で過ごしました。

次の朝、オリガが目覚めたときにはアレクセイの姿はすでにありませんでした。

目覚めたオリガは、隣のシーツを探りましたが、すでに冷たくなっていました。

いつ、帰られたのです。陛下…。

抱きしめては下さるけど、何もして下さらないのですね。

ナターリアさまにはお子がいるのに…。

でも、きつといつかは…。

陛下、オリガのもとへ（後書き）

たくさんの方にお読みいただき、ありがとうございます。
これからナターリアは大変な思いをしますが、応援して下さい。

公爵の病状

翌日、女官アンナと侍女アリスがロプーヒナ公爵家に見舞いに行くことになりました。

寝室から起き上がったナターリアが、アリスだけを呼んで、

「お父さまにくれぐれもよろしく伝えてちょうだいね。」

「はい。旦那さまにお伝えいたします。でも、ナターリアさまを残して行くのは心配でございますわ。」

遠慮がちに微笑んでアリスが答えます。

「心配というわりに顔が笑っているわよ、アリス。」

軽くアリスを睨んでナターリアが言います。

「ごめんなさい、ナターリアさま。お屋敷に帰れるので、嬉しくて

ここはなんだか窮屈で……。」

アリスは首をすくめて答えます。

「冗談よ、アリス。確かにここは窮屈よね。それに王子が出来たあたりから護衛や女官が仕えるようになって……。わけを知っている？」
ナターリアがため息をつきながらアリスに尋ねます。

アリスは、ドキッとしましたが、女官長から強く口止めされているので、

「いえ、私は何も存じません……。やはり王子さまの母君であられると待遇も違うのでは？」

「アリスも他の者と同じことを言うのね。やはり、そうなのかしら。」

あの、アリスにお願いがあるの。」
ナターリアが俯いて言います。

「なんでございますか？ もしや、カールさまのことで…？」

「違うの、アリス。あの、ただ、カールさまがどうしておられるか聞いて欲しいの。ここでは何も分からないし、私も王子が出来て、カールさまにはお幸せになってほしいから…。お願い。」
ナターリアが俯いたままアリスに頼みます。

アリスは、ため息をついて、

「どうしておられるか確認するだけでございますね？ よもや、お伝えしたいことがあるのではないですね？」

「もちろんよ。もう、私には手の届かない人だもの…。でも、お幸せかどうか知りたいの。お願い。」

ナターリアが顔を上げてアリスに頼みこみます。

「ナターリアさま、そういうことでしたらお引き受けいたします。ただし、このたびだけでございますよ。」

「ありがとうございます。」

そして、ナターリアの実家・ロプーヒナ公爵家にアリスたちが着きました。

公爵夫人エレナが出迎えました。

「ようこそおいで下さいました。」

「わざわざのお出迎え恐れ入ります。側妃ナターリアさまに代わり公爵さまのお見舞いに伺いました。女官のアンナでございます。アンナが微笑んで挨拶をします。」

「はじめまして、アンナどの。皇妃さまにお仕えいただいているとか、お世話になります。また、側妃さまにお気遣いいただき、恐れおおいことでございます。」

「とんでもございません。公爵さまの様子はいかがでございますか？本日は陛下のご指示で医師のラウル卿も参りましてございます。」

「はじめてお目にかかります、公爵夫人。ラウル卿でございます。早速、公爵さまの診察をさせていただきたく存じます。ご様子はいかがで…。」

エレナは恐れ入っているのか、歯切れが悪く、
「はい。それは、恐れ入ります。まずはこちらへ…。」
そう言っ、ラウル卿を公爵の寝室まで案内しました。

そして、診察が終わり、ラウル卿が寝室から応接間に青ざめた顔で入ってきました。

「公爵夫人、これはいったいどういことなのですか…。公爵さまのご様子はただことではございませんぞ。」

尋ねられたエレナは、沈痛な様子で、

「私にもわからないのです。いったいどうしてこうなったのか…。あの、ラウル卿、あっていたただきたい人がおります。カールどの、こちらへ…。」

エレナがそう言うと隣室からカールが入ってきました。

「はじめまして、フレデリカ男爵家のカールでございます。」

「カールどの、こちらへお座り下さいませ。ラウル卿、こちらは旦那さまが息子同様に可愛がっている者でございます。この者の話し、聞いてはいただけませんか？」

エレナが真剣な表情でラウル卿に言います。

「はい。どのようなことでございます？」

話しを聞いたラウル卿は言葉を失ってしまいました。

公爵家のお抱え医師がハリス公爵に弱みを握られて、ハリス公爵の指示で公爵に毒を混ぜた薬を飲ませていたということです。

「それは事実なのですか…。大変なことですぞ。しかし、あの症状はかの国の薬・銀の毒に現れるもの…。誰もが手に入れられるものではないのですぞ。」

ラウル卿はカールに尋ねます。

「はい。私の調べましたところ、ハリス公爵さまはかの国との密貿易をしているようでございます。それからこれが証拠の書類、薬でございます。」

カールが驚くべき事実を伝え、薬も出してきました。

「聞いてもよろしいか、カールどの？ここまで調べておきながら、

なぜ訴えでないのだ？」

ラウル卿は不思議に思っただけ尋ねます。

「それは、握り潰されることを恐れたからでございます。お優しい皇妃さまのことでございますゆえ、使いを寄越して下されるときを待っております。」

カールは顔を上げてきっぱりと答えました。

「それから、私は罪を犯してしまいました。かの毒の解毒剤をさきほど手に入れました。それは闇のルートで…。許されぬことでございます。」

「何を言うのです、カールどの！旦那さまのためにしたことで…。」

エレナが慌てて庇います。

「カールどの、その解毒剤はどちらに？」

ラウル卿は驚きながらも尋ねます。

「はい。こちらにございます。」

カールはそう言ってふところから解毒剤の入った瓶を出しました。

「では早速、公爵さまに差し上げなくては。手遅れになっては一大事でございます。」

ラウル卿はそう言って、解毒剤を公爵に飲ませました。

するとどうでしょう。今にも危うかったロプーヒナ公爵がみるみる回復して、血色も良くなっていきました。

「間に合ったようですね、カールどの。お気になさるな。罪は罪だ

けれど、公爵さまのお命を救われたのですからたいした罪にはなりませんまい。これでナターリアさまも救われます。」

ラウル卿もどる(前書き)

お待たせしました。

ラウル卿もどる

公爵の寝室で衝撃の事実を知ったカールと公爵夫人エレナは驚きのあまり声も出ませんでした。

「それはどういうことで…。側妃さま、いえナターリアさまの御身に何があったのでございます?」

公爵の枕元に立っていたエレナが震える声でラウル卿に尋ねます。

「それは、その…。これは内密のお話なので申し上げてよいものか…。」

ラウル卿は、しまったという顔で答えます。

カールは、震えるエレナを支えながら、

「ラウル卿さま、恐れながら公爵夫人には聞く権利がございます。内密のことゆえ、口外はいたしませぬゆえ、どうかお話しいただきたく存じます。」

ラウル卿は仕方なく困惑しながらも話し始めました。

ナターリアが銀の毒によって体を病んでいることを。

「そんな、ナターリアまでそんなことになってしまっていたなんて…。」

エレナは絶句すると、ショックのあまり気を失ってしまいました。

「公爵夫人!」

「奥さま！」

エレナは隣室に運ばれました。

その一部始終を見ていたナターリアの妹のメアリーは憤慨するよう
に尋ねます。

「どうしてなのですか？お父さまだけでなく、お姉さままで…。」

「確か、メアリー嬢でございましたな。申し上げにくいことながら、
後宮においてはこのたびのことは行き過ぎではございますが、国王
陛下の寵愛をめぐって争いごとは起きるのはよくあることなのでい
ざいます。」

ラウル卿は言いにくそうに答えます。

「それは私にも分かりますけど、毒殺なんて…。お姉さまは我が家
を立て直すために後宮に入っただけで、陛下のご寵愛なんて望んで
もおりません。」

メアリーは興奮して尋ねます。

ラウル卿はため息をつきながら、

「ご事情はお察しいたしますが、姉君のナターリアさまは陛下のご
寵愛を独占されて第一王子をお産みになられました。その存在自体、
他のお妃にとっては脅威にございます。」

メアリーは怒りに震えながら、

「だからお姉さまのために私が宰相さまのご次男を婿養子に迎える
決心をしましたの。陛下はお姉さまのために何もして下さらないの
ですか？カールどの方がよっぽど…」

遠慮して部屋の片隅にいたカールがおもむろにメアリーに近づいて、
「メアリーさま、それは国王陛下にもお立場がございますゆえ、致
し方ないこともございます。」

「分かっているわ、そんなこと……。」
メアリーは唇を噛み締めてつぶやきます。

「でも、ラウル卿、この解毒剤があればお姉さまは助かるんでしょ
うっ？」

「もちろんでございます。早速、王宮に戻りましてナターリアさま
に捧げなくてはなりません。カールどの、恐れいりますがこのこと
陛下にご報告する必要上、一緒においでいただけますかな？」

ラウル卿は立ち上がって、カールに頼みます。

カールは緊張しながらも、

「はい。罰は覚悟しておりますゆえ、どうぞお連れ下さい。」

メアリーはそれを聞いて、

「それなら私も行きます。ラウル卿、カールどのに罪はありません
わ。すべては我が家のためにしたことです。」

ラウル卿はやれやれという顔をしながら、

「その心配はご無用にございますよ。公爵さま、皇妃さまをお救い
するためですから、たいした罪にはなりません。私からも陛下に
とりかなしましう。メアリー嬢、ご心配なさいませんように。」

「そうですね。でも、お姉さまのお見舞いに伺いたいし、私もお連
れ下さいまし。」

メアリーはなおもラウル卿に頼み込みます。

「仕方ありませんな。ご一緒に参りましょう。ただ、公爵さまのことが気がかりですから私の助手を残させていただきます。よろしいですか？」

ラウル卿は微笑んで提案します。

「ありがとうございます。ラウル卿、お父さまにもお気遣いいただき感謝いたします。」

メアリーはそう言つと淑女の礼をラウル卿に捧げました。

「おやおや、さきほどまで憤慨しておられたのに現金なお方ですな。さあ、参りましょう。」

ラウル卿は笑つて答えます。

「ラウル卿、そんないじわるおっしゃらないで下さいまし。」
メアリーは少し拗ねたように言います。

「冗談でございますよ。失礼をいたしました。」
ラウル卿はお辞儀をして答えました。

こうして公爵家を辞して、ラウル卿や女官アンナたちは王宮へと戻りました。

大変なお土産とともに…。

王宮にもどるとアレクセイはナターリアのもとにいました。

女官アンナとラウル卿はナターリアの部屋に向かいました。

「ただいまもどりました。陛下、ナターリアさま。」
アンナが代表して挨拶をしました。

「もどったか？ご苦勞であった。して、公爵のご様子はいかがであった？」

アレクセイはラウル卿に尋ねます。

そばにいたナターリアは具合が悪いのか、顔色が悪く、横になったまま心配そうにしています。

「恐れながらお答え申し上げます。ご心配には及びません、陛下、ナターリアさま。公爵さまのおかげんは快方に向かつておられます。念のため、助手を残してまいりましたが。」
ラウル卿は少し緊張しながら答えます。

「それは何よりだ。よかったな、ナターリア。」

アレクセイはナターリアの髪を撫でながら答えます。

ナターリアはそれを聞いて微笑んで弱々しい声で、

「はい、陛下。安心しました。ありがとう、ラウル卿。」

「恐れ入ります。ところで、ナターリアさまのお体に良いお薬を手に入れました。どうぞお試し下さいますよう。」

ラウル卿はそう言ってあの解毒剤をナターリアに捧げました。

アレクセイはナターリアのためになるならと、その薬を飲ませますと、公爵のときと同じようにみるみるうちに顔色が良くなっていきましました。

アレクセイもこれには驚き、

「これは、なんと…。」

「効いたようでございますな。ナターリアさま、どうぞゆっくりおやすみなさいませ。」

ラウル卿は微笑んでナターリアに話しかけます。

「ありがとうございます、効いたみたいだわ。」

ナターリアはそう言うのと寝息をたてて眠りはじめました。

「陛下、内密で逢っていただきたい方がございます。お時間をいただけますでしょうか？」

ラウル卿は真剣な表情でアレクセイに頼み込みます。

ラウル卿もどる（後書き）

次はオリガの真実が明らかになるかも知れません。

アリスの告白

「内密で、か……。それはどのような者なのだ？」
アレクセイは怪訝そうに尋ねます。

「恐れながら陛下、ロプーヒナ公爵さまならびにナターリアさまに関わることにございますれば何卒お目通りを願ひ上げます。」
ラウル卿は声をひそめて窺うように答えます。

「公爵とナターリアに関わる……！それは公爵家で何か起きてたということか？」
アレクセイは思わず椅子から立ち上がって尋ねます。

「はい。ここでは申し上げかねますが、お逢いいただければすべて分かります。」
ラウル卿が平伏してアレクセイに答えます。

「分かった。内密の話ならば、私室で聞こう。アンナ、女官長と宰相を呼んでくれ。」
アレクセイはそう言うとナターリアの部屋から出て行くこととしました。

そのとき、それまで黙って部屋の片隅で控えていた侍女アリスが、平伏しながら思いつめた表情でアレクセイに話しかけます。

「恐れながら、ご無礼を承知で申し上げます。」

それを見たアンナが慌てて咎めます。

「アリスさん、ご下問もないのに陛下に申し上げるなんて……。」

「いや、よい。何か話があるのではろう。申してみよ。」
アレクセイは最愛の妃ナターリアの侍女だからと大目に見ます。

「感謝申し上げます、陛下。実は、先日皇妃オリガさまより紅茶をいただきました。」

アリスは緊張しながら話し始めました。

「何、紅茶を？それはいつの話しだ…。」

「はい。先日、オリガさまがナターリアさまのお見舞いにおいていただいたときでございます。」

「アンナ、このこと報告を受けておらぬが？」

アレクセイは怪訝そうな顔で、そばに控えていたアンナに尋ねます。

聞かれたアンナもわけがわからない顔で、

「いえ、オリガさまからは何も受け取ってはおりません。アリスさん、どうということなんです？」

「申し訳ございません、マリアさま。お見送りのときにいただきましたので、私しか知らないことなんです。」

申し訳なさそうな様子でアリスが答えます。

「ではあのときに…。でも、どうして何も言ってくれないのです？」
アンナは咎めるように尋ねます。

「あの、オリガさまがナターリアさまのそばでお仕え出来ない私を氣遣って下さったからです。お見舞いに持ってきたけど、あなたからだと言ってナターリアさまに差し上げなさいとおっしゃって下さって、でも、私、ナターリアさまがこんな状態だとアンナさまから

伺って、渡してよいかどうか分からないので…。」「
アリスは最後にはくちごもってしまいました。」

それまで黙って聞いていたアレクセイが、

「いい判断だ、アリス！して、その紅茶はどこにある？」

「こちらにございます。どうぞ陛下。」

アリスはおもむろにふところから包みを取り出しました。

「この紅茶、もらっていくぞ。よいな？」

アレクセイはそう言つとアリスから包みを受け取るとラウル卿に目配せしながら手渡ししました。

「ラウル卿、分かっているな？その紅茶の成分を調べるのだ。では行くぞ。」

「かしこまりました、陛下。」

ラウル卿は受け取ると、陛下とともに部屋を出て陛下の私室に向かいました。

陛下の私室に着くとまもなく女官長と宰相が入ってきました。

「陛下、お呼びと伺いましたが何用でございますか？」

「ああ、呼び出してすまない。実はロプーヒナ公爵の見舞いに遣わしたラウル卿が内密で話があるというのでな。そなたたちにも聞いてもらった方がよいと思つてな。」

アレクセイがそう言って二人を迎えます。

二人は顔を見合わせてあと、女官長が、

「ラウル卿が…！公爵さまに何かあったのですか？」

コンコン

「ラウル卿でございます。お連れして参りましたので、お目通りを願ひ上げます。」

「来たようだ。入るがよい。」

アレクセイはそう言って入室を許可します。

「失礼いたします、陛下。こちらは、ナターリアさまの妹のメアリー嬢、そしてフレデリカ男爵家のカールどのにございます。」

「お目通り感謝いたします。陛下におかれましては、ご機嫌麗しく恐悦至極に存じます。カール・フレデリカでございます。」
カールは緊張しながらアレクセイに挨拶をします。

「はじめにお目にかかります。ナターリー・ロプーヒナでございます。」
ナターリーも少し緊張しながらもアレクセイを真つすぐ見つめます。

アレクセイは意外な人物が現れたので戸惑いがちに、

「よく参った。さあ、こちらに座りなさい。ところでラウル卿、この者たちをひきあわせたわけを聞きたいのだが？」

「恐れ入りますが、まずはこちらをごらんいただきたく存じます。」
ラウル卿が差し出したのはカールが苦勞して手に入れたハリス伯爵

に関する資料でした。

そしてハリス伯爵がかの国と密貿易をしている事実と公爵がかの国の銀の毒に侵されたことを伝えました。そして解毒剤をカールが密貿易にて手に入れたことも…。

「何ということだ…！やはりハリス伯爵の仕業だったのか？宰相、すぐにハリス伯爵を捕らえるのだ！罪状は密貿易のと公爵の毒殺未遂だ。」

アレクセイは怒りを抑え切れずに宰相に叫びながら命令を出しました。

メアリーの怒り

「陛下、落ち着いて下さい。密貿易の証拠はここにありますが、ロプーヒナ公爵どのに関する事については確証がありませんぞ。」
宰相は驚きながらも陛下をなだめます。

「いや、証拠ならある。先日、オリガどののもとを訪ねていた者を護衛につけさせた。その者はハリス公爵に金をもらってロプーヒナ公爵家に入りしていた医者だ。分かったか、宰相？」
アレクセイは宰相にたたみかけます。

「では、オリガさまもこの件に関わっているのですか？もしや、ナターリアさまのことも…。何と言つことだ！」
宰相は愕然とします。

「残念ながらそういうことだ。ラウル卿、さきほどの紅茶はいかがであった？」

アレクセイは厳しい表情で尋ねます。

「恐れながら、さきほどの紅茶には銀の毒が入っております。オリガさまの関与は間違いないかと思われます。」
ラウル卿は汗をかきながら答えます。

それを聞いていたメアリーはわなわなと震え、怒りを抑え切れずに
「陛下、そこまで分かっているがなぜお姉さまを助けて下さいませんでしたの？」

アレクセイは最愛の妃ナターリアそっくりの妹に責められて、動揺を隠し切れず、苦しそうに、

「すまない。はっきりとした確証がなく動けなかったのだ。決して、ナターリアを助けなかったわけではないのだ。」

「そんな言い訳聞きたくありませんわ!」

メアリーはそう言つと、アレクセイを睨みつけます。

女官長は慌てて、

「メアリー嬢、あまりに陛下に対して無礼でございますよ。許されないことですよ。また、陛下にはお立場もございますゆえお察し下さいませ。」

「いや、よい。メアリー嬢の言うことも一理ある。しかし、なぜこちらメアリー嬢まで来る必要が?」

アレクセイはふと疑問に思つて尋ねます。

「恐れながら私から申し上げてもよろしいでしょうか?」
遠慮がちにカールが口を開きます。

「よい、許す。申してみよ。」

アレクセイは発言を許しました。

「感謝申し上げます、陛下。実は公爵さまをお救いするために解毒剤を手に入れるため、私も密貿易をいたしました。許されぬことで、罰は覚悟しております。メアリーさまは私を庇つておいでになりました。申し訳ないことでございます。」
カールは平伏したまま、苦しげに話します。

ラウル卿は慌てて平伏しながら、

「陛下、そのおかげでロプーヒナ公爵さまだけでなくナターリアさまも助かったのでございます。どうか寛大な処置をお願い申し上げます。」

ます。」

続いてメアリーも、なおも陛下に厳しい視線をぶつけながら平伏します。

「そうなのです。この罪は我が家のためにしたことです。カールどのを厳罰にされるのは納得いきませんわ。その罪はわたしが請け負います陛下。お願いいたします。」

それまで黙って聞いていたアレクセイは、微笑んでカールの手を取り、

「そんなことか…。心配いたすな。公爵や皇妃の命を救ったのだ。罪どころか礼をしたいところだ。ありがとう。感謝する。そうであるう宰相？」

聞かれた宰相は苦々しい表情で、

「はっ。恐れ入りますが陛下、罪は罪でございます。そういうわけには参りません。公爵どの、皇妃さまをお救いしたことで、良くて謹慎ぐらいはしていただきませんと。周りに示しがつきません。よろしいかな、カールどの？」

それを聞いた陛下は眉をひそめて、

「なんとかならぬのか、宰相？」

「なりません、陛下。本来ならば、懲役刑や男爵家の浮沈に関わる罪にございますぞ。」

宰相が厳しい表情で言います。

陛下はため息をついて、

「仕方ないか…。すまぬな、カールどの。」

それを聞いていたカールは、平伏して、
「とんでもないことでございます。陛下におかれましては、寛容な
ご配慮をいただき感謝申し上げます。」

「よろしゅうございましたね、カールどの。それにナタリー嬢もわ
ざわざいらした甲斐がございましたな。」
女官長は安心したように二人に話しかけます。

「ありがとうございます、女官長さま。」
カールは安心したようにふうくと、息を吐いて答えます。

「ありがとうございます。女官長さま、お父さまもお姉さまも安心
しますわ。」

ナタリーはさきほどの怒りとは違ってかわって微笑んで答えます。
それを聞いていたアレクセイは不審そうな顔をして、
「ひとつ聞いてもよいか、カールどの。なぜそこまでして助けてく
れたのだ？わが家のことではなく、他家のことであるう？」

カールは平伏したまま遠慮がちに、
「恐れながら申し上げます。ロプーヒナ公爵さまは至らない私を、
幼いころより息子のようにかわいがって下さいました。そのご恩に
報いるためにございます。」

「そうであったか。それにしてもなかなかそこまでできないが……。
どちらにしても礼を申すぞ。ところで、幼い頃からはナターリア
とも仲が良かったのか？」
アレクセイはまだ不思議そうな顔をして尋ねます。

「恐れながら、何もわからない幼い頃の話でございます。皇妃になられたいま、親しいなどおこがましいことでございます。」
カールは恐縮しながら体を震わせて答えます。

「そう、かしこまるな。カールどのはおかしな人だな。皇妃と親しくなりたいとツテを頼って繋がりを求める人が多いというのに、そのようなことを…。公爵がかわいがるのも分かる気がするな。」
アレクセイがそうカールに言って、ポンと肩を叩きました。

それを見ていたナタリーは、

「陛下、カールどのをいじめないで下さい。カールどのは私たちを助けて下さった恩人でございます。陛下よりもよっぽど頼りになります。お姉さまもカールどのと結婚なされば、あ…。」

周りの視線を感じたメアリーは
しまった！言い過ぎたかしら
と、気まずそうに、

「も、申し訳ございません。少し言い過ぎました。お許し下さいませ。」

しばらくの沈黙のあと、宰相が笑い出しました。

「クツ、クツ…。メアリー嬢はお気の強いお方であられるな。陛下にここまで言えるとは。頼もしい令嬢だ。レオンはいささか頼りないところがありますから、よろしく頼みますぞ。」

オリガの処罰

そう言うと宰相は、手を差し出して来たのでメアリーは遠慮がちに握手をしました。

「お、恐れ入ります。宰相さま……。お恥ずかしゆうございます。」
メアリーは急に恥ずかしくなり、冷や汗が出てきて俯いてしまいました。

「おや、かわいらしいところもおありのようですね。」
宰相は微笑んで答えます。そして、陛下の方へ向き直り、
「ところで陛下、オリガさまのことはいかがなされるおつもりですか？側妃とはいえ、ここまでのことをなされたお方です。」

「それは、こうなっては仕方ですから……。女官長、オリガどのをナターリアを害した罪で拘束せよ。ただちにに行え。」
アレクセイは苦々しい表情で、躊躇しながらもそう命令を出しました。

「承りました、陛下。ただちに兵士を引き連れて拘束して参ります。では、これにて失礼いたします。」
女官長は、お辞儀をして命令を受けると、部屋を辞すると兵士を連れて後宮に向かいました。

続いて宰相も部屋を出てオリガの父のハリス伯爵を捕らえました。

そこに残されたメアリーは、アレクセイに向かい、

「さきほどはご無礼をいたしました、陛下。お詫び申し上げます。お辞儀をして謝罪しました。」

「いや、気にしておらぬゆえ。それより、せっかく来たのだ。ナタリーアを見舞ってくれ。しばらくは王宮も騒がしいだろうから…。」アレクセイはため息をついて、遠い目をしながらメアリーに話しかけます。

メアリーは頭を上げると遠慮がちに、

「一つお聞きしてもよろしいですか、陛下？」

「何かな、メアリー嬢？」

アレクセイは微笑んで尋ねます。

「さきほど女官長に命令を出されるとき、躊躇されておられるようでしたが、なぜでございますか？」

メアリーはアレクセイの目を見据えて尋ねます。

「それは、このような不祥事は表にいたくなくかつたからだ。まして、オリガどのは、私が即位するにあたって協力したくれた数少ない王族だからな。」

アレクセイは苦々しそくに答えます。

「たとえ、お姉さまやお父さまの命を危うくすることをされてですか…？」

メアリーは眉をひそめて尋ねます。

「それは、さすがに許しておけぬことゆえ、命令を出したのだ。わかってくれ、メアリー嬢。私には、国王としての立場がある。けれど、ナタリーアを大切に思う気持ちは嘘ではない…。」

アレクセイは困った顔をしながら答えます。

「そんなことは、私には分かりません。私はお姉さまのために婿養子のことを了承したのですよ。それなのに、陛下がこのさき、お姉さまを不幸にすることは許しません…。」

メアリーは最後には涙ぐみながら陛下に訴えます。

これにはアレクセイも驚き、

「分かった。約束するから、安心してくれ。」そう言うと、メアリーの肩をポンと叩きました。

「本当でございますよ。お姉さまを幸せにして下さいませ。お願い申し上げます。」

メアリーは涙を拭いながら、そう言うとお辞儀をしました。

メアリーも部屋から去っていき、アレクセイは私室で一人になりました。

「幸せに、か。肝心のナターリアは私を愛しているのか分からぬにな…。」

アレクセイは寂しそうに呟きました。

後日、拘束されたハリス伯爵一家は罪を問われて爵位を失いました。オリガも側妃の位を剥奪されました。

ただ、王族ゆえ命は助けられ、遠く監獄に送られることになりました。

た。

オリガの処罰（後書き）

文才のない私の話しをたくさんの方に、お読みいただきありがとうございます。
ございます。

お気に入り登録もありがとうございます。

これから妹のメアリーも活躍します。

早くハッピーエンドにしたいです！

ナターリアの驚き（前書き）

お待たせしました。

ナターリアの驚き

「お姉さま、具合はいかがでございますか？」
メアリーがベッドで休んでいた姉のナターリアに優しく話しかけます。

それに気づいたナターリアが、
「メアリー、どうしてここに居るの？これは夢なの？」
ぼんやりと尋ねます。

メアリーは姉の側にそっと近づいて、
「夢ではございませんわ、お姉さま。お見舞いに伺いましたのよ。」
そう言つて微笑みます。

「王宮までお見舞いに来てくれたの…。誰が起こしてちょうだい。」
ナターリアは、側に控えていた侍女に体を起こしてもらいます。

侍女はそれまで弱々しく微笑むだけだったナターリアが満面の笑顔で起き上がってきたのでとてもうれしくなつて、

「ナターリアさま、ご無理をなさいませんように。よろしければ、お茶をご用意して参りましょうか？」
ナターリアに尋ねます。

「ええ。お願いするわ。」
ナターリアは上着を羽織つてベッドから起きると微笑んで答えました。

控えていた侍女たちがお茶の用意をするために寝室から出て行くと、ナターリアとメアリーの二人が残されました。

「それにしてもよく来てくれたわね、メアリー。みんなは元気なの？陛下がラウル卿を遣わしてくれたから、お父さまの具合も良かったのかしら？」

ナターリアが微笑んでメアリーに尋ねます。

「ええ、元気しておりますわ。お父さまもカールどのお陰でもちなおしましたわ。お姉さまも良くなりましたようで…。」

メアリーは含んだように姉に答えます。

「カールどの…！それはどういうことなの、メアリー？お父さまはお加減は良くなられたとラウル卿から聞いたけれど、カールさまとどのような関係があると言うの？」

ナターリアは久しぶりに聞く初恋の人の名前に動揺しながらも、怪訝そうに尋ねます。

「もしかして、お姉さまは何もご存知ないの？お父さまのことも、お姉さまがお加減が悪い理由も、ハリス伯爵のことも…？」

メアリーは驚きを隠し切れずに姉に聞き返します。

「それはどういう意味なの、メアリー？私はただ産後のひだちが悪いただけなのに…。ハリス伯爵さまが何をされたというの？」

ナターリアは語気も強く妹に尋ねます。

「陛下はお姉さまに何も伝えてないのね。もしかして、私が婿養子を迎えることも聞いてらっしゃらないの？」

メアリーは驚きを隠し切れずに答えます。

ナターリアはあまりのことに呆然としてしまいました。

顔色が変わり、いったい何が起きているのか…。
ガタガタと指先が震えてしまいました。

ナターリアは震えた指先でシーツをギュッと掴むと、深呼吸をしました。

「メ、メアリー、何が起きているのか教えてくれないかしら…。私にも関係あることなのでしょう?」

姉のただならぬ様子にメアリーは、なんと行っていいかわからなくなりました。

けれど、姉も知っておくべきことだと思い、意を決してメアリーは伝えることにしました。

「あ、あの…、お姉さま。私から伝えていいものかわからないのだけれど、お姉さまに関係する大変なことが起きたの。落ち着いて聞いていただけます?」

「分かったわ。話してちょうだい。」

ナターリアは緊張しながらも、姉らしく鷹揚に答えます。

そして、メアリーが話すことを聞き漏らすまいと耳を傾けました。

「実は…。」

メアリーは驚きの事実を話し始めました。

「そんな、そんなことって…！」

ナターリアは、あまりのことにガタガタと体が震えてきました。

そのとき、侍女がお茶を持って入ってきました。

「失礼いたします。お茶をお持ちいたしました。」

侍女がそう言ってお茶をテーブルに置くと、ナターリアの様子がおかしいことに気がついて、

「ナターリアさま、いかがなされました？ご気分がすぐれないのでございますか？」

侍女がナターリアさまの側に近づいて 声をかけてきました。

「アレクセイさまを、陛下を、お越しいただくようお願いしてきてください。」

ナターリアはシーツを握りしめて、俯いたまま侍女に震える声で言いました。

侍女はナターリアが陛下に何かを頼むことをしたことがあまりないのに、おかしいと思い、

「あの…、いかがなされました？何かおありになったのでございますか？」

ナターリアは顔を上げて、不機嫌そうに、

「いいから、お話ししたいことがあるから陛下においで下さいと申しあげてっ…！」

いつも穏やかで話すナターリアが不機嫌そうに言うので、侍女は驚いて、

「は、はいっ。側妃さま、ただいますぐにお伝えして参ります。」
あわててお辞儀をして、転げるように部屋を出て行きました。

「お姉さま…。」

メアリーはナターリアを気遣うように話しかけます。

「メアリー、気にしなくていいのよ。あなたのせいじゃないんだから…。お茶を飲みましょう。」

ナターリアはふう〜とため息をついた後、スクツと立ち上がって、テーブルに着きました。メアリーも続いて席に着き、お茶を飲み始めました。

どこか遠くをみるような目をしてナターリアがお茶を一口飲んだあと、

「どうしてなのかしらね。なぜ私に何も言ってくれないのかしら…。」

「

「それは、私が折りをみて伝えようと思っていたからだ。」

音もなくアレクセイが現れました。

「陛下…！」

「アレクセイさま…。よくお越し下さいました。」

いつも笑顔で迎えるナターリアが、いつになく強張った顔で迎えました。

「ナターリア、話しがあるとのことだったが…。その様子では聞いたのだな？」

アレクセイが気まずそうに話しかけます。

「メアリー嬢、すまない。しばらく席を外してくれるか？ ナターリアと二人で話したいことがある。」

アレクセイはそばにいたメアリーにすまなそうに告げます。

メアリーは戸惑いながらも仕方なさそうに、

「畏まりました。失礼いたします。」

そう言うと部屋を出て行きました。

ナターリアの驚き（後書き）

これから二人はどうなるのでしょうか…。

お気に入り登録して下さい、閲覧して下さい、ありがとうございます。
ございます。

拙い小説ですが、皆様のおかげで頑張って書いております。

ナターリアと陛下の会話

ナターリアの部屋に二人だけが残されて、少しだけ重苦しい空気が漂っています。

テーブルに座っていたナターリアが何か言いたそうにアレクセイを見つめています。

アレクセイが気まずそうにナターリアに話しかけます。

「ナターリア、座ってもよいか？」

「はい…。わざわざお越しただいて恐れ入ります、アレク、いえ、陛下。」

ナターリアは俯いたまま答えます。

アレクセイは悲しそうに、

「アレクセイとは呼んでくれないのだな。それほど、驚いたのだな…。そなたに話さずにすめば、話したくなかったのだが…。」

「あの、陛下…。私にこのような大事なことをお話し下さらぬのはなぜでございますか？」

ナターリアは唇をかみ締めながらアレクセイに尋ねます。

「そんな顔をしないでくれないか。いつも穏やかな側妃さまに怒鳴られたと侍女が驚いていたぞ…。さて、そのわけは、ナターリアがきつとショックを受けるだろうから、体が良くなってからと思っていたのだ。現に相当ショックを受けているようだし…。」

アレクセイはナターリアを窺うように話し始めました。

「そ、それは、そうでございますしうけど…。確かに驚きましたけど、私は他の者からではなく、陛下から伺いとうございました。なぜ今日まで私に何も知らせられないのでございますか？かの人はすでに処罰されたと、伺いました…。私は陛下との間に王子までなしておりますのに、悲しゅうございます。」

ナターリアは右手でドレスをぎゅっと握りしめながら、答えます。

「しかし、ナターリア、話しは聞いたのだらう…？それで、よいではないか。ああ、でもこれでホツとした。何と、話したものと、思っていたからな…。」

アレクセイは、ホツとしたように少年のような笑顔で言います。

それを聞いたナターリアは、怪訝そうな顔をして、

「陛下…？なぜ、私の気持ちを分かっていただけなのですか？私は陛下から伺いたかったのですよ。」

「それは…、すまなかつたな。」

アレクセイは仕方なさそうに言います。

「あの、陛下、私はそんなお言葉を聞きたいわけでは…。」「ナターリアは落胆したようにため息をつきながら答えました。

「それでは、どうして欲しいのだ？」

アレクセイは、困惑したように尋ねます。

それを聞いたナターリアは何も言う気がなくなりました。

「もういいですわ。それから、もう一つ伺いたいことがあります。」

妹のメアリーの結婚のことです。陛下のお指図と聞きました。」

「メアリー嬢の結婚のことか？あれは、そなたのためによかれと思つてしたことだ。」

「私の…？それはどういふことでございます？」
ナターリアは怪訝そうに、アレクセイに尋ねます。

「あのようなことが起こつたのも、そなたに後盾がないためだからな。宰相の次男が公爵の婿養子となれば宰相が後盾になつてくれる。後宮での地位も安泰だ。王子のためでもある。分かつてくれ。まあ、ナターリアの弟たちには悪いと思つたが…。」
アレクセイはナターリアの手をとり、話しかけます。

「そんな…。私のために妹や弟たちが犠牲になることなど、私は、私は望んでおりません。陛下、お願いでございます。どうぞお取下げ下さいませ。」

ナターリアは哀願するようにアレクセイに言います。

アレクセイはそれを聞いて困つたように、
「すまない、ナターリア。そなたの願いなら何でも聞いてやりたいのだが、もう決まつたことなのだ。もう、もとに戻すことは出来ぬ。すでにロプーヒナ公爵も承知しておることゆえ、堪えてくれ。決して悪い話ではない。これでそなたの地位も公爵家も安泰なのだよ。もしかしたら、王妃にもしてやれるかもしれぬ。」

「そんな、私は、王妃など望んでもおりませんのに…。」
ナターリアは困惑しきつて答えます。

それを聞いたアレクセイは少し微笑んで、

「ナターリアは王妃になりたくないのか？そなたに欲のないことは知っているが、第一王子の母なのだ。考えて見てくれ。」

「私には王妃など荷が重うございます…。私は後宮の片隅で生きていければと、それ以上のことは望んでおりません。お許し下さいませ。相應しい方になっていただくのが一番でございます。」
「ナターリアはさらに哀願するようにアレクセイに話します。」

「それは、シャルロッテどののことを申ししているのか？なるほど、そうすれば母君も喜ぶであろうが、私は愛する人を側妃のままにしたい…。父君もそのことで、苦勞なされていた。」
「アレクセイは辛そうに話します。」

「陛下の父君さまが…？」

「ああ、父君には最愛の妃がおられたが、後ろ盾がなかったため王妃にすることが出来なかった。王妃である母君に気を遣って、苦勞なされていた。私の気持ちも察してくれ、ナターリア。」
「アレクセイは真剣な表情でナターリアに話します。」

「陛下いえアレクセイさま、私は…。あの、お気持ちは嬉しゅうございますが…。」

「ナターリアはアレクセイの気持ちを知ってどうしてよいか、わからなくなりました。」

そんなナターリアの様子を見たアレクセイは、ナターリアを優しく抱き寄せて、

「急なことであろうが、考えておいてくれ。」

そう言うときアレクセイはナターリアの頬にキスをしました。

そして、ナターリアから体を離して立ち上がりました。

「そろそろ行かねば…。執務を抜けて来たからな。」

「そうでしたの？」

ナターリアがぼんやりと尋ねます。

「じゃあ、また来る。」

アレクセイは執務のため、部屋を去って行きました。

アレクセイが行ってしまつと、残されたナターリアは、ため息をついて、

「私は何のために後宮に来たのかしら…。」

ぼつりと呟きました。

ナターリアとメアリーの会話

アレクセイが去ってからどのくらい時間がたったのでしょうか。日が陰り、夕食の時間になろうとしていました。

ナターリアは人を寄せつけず、夕食も食べずに一人寝室に籠っています。

乳母に抱かれた王子がお休みの挨拶をするためにナターリアのもとを訪れましたが、いつもと違って複雑な顔をしていました。

それでも、何も知らずきゃっきゃと笑う王子の笑顔をながめて、頭を優しくを撫でて、おやすみの挨拶をしました。

その夜は、アレクセイは多忙のため、ナターリアの部屋を訪れることはありませんでした。

それを伝えられたナターリアは心のどこかでホッとしていました。

そして翌日、ナターリアは妹のメアリーと朝食後、話しをしていました。

「いろいろ苦勞をかけるわね、メアリー。」

ナターリアは、複雑なそんな顔で微笑みを浮かべながら話しかけま

す。
「お姉さまこそご苦勞なされているのでは？」

メアリーは姉を氣遣うように答えます。

「そんなことは…。でも、私だけですむと思ったのに、メアリーに苦勞かけることになるなんてね。弟たちも公爵家を継げなくなってしまうて…。」

ナターリアは少し俯いて悲しそうに話します。

「お姉さま、お氣になさらないで。私ね、お姉さまだけに苦勞をかけるのは心苦しかったです…。でもこれで、お姉さまのために私が役に立ってますわ。かえって嬉しいぐらいです。」

メアリーは姉を元氣づけるように答えます。

「メアリー、ありがとう…。頼りにならない姉でごめんなさい。」
ナターリアは少しだけ微笑んで言いました。

「お姉さま、謝らないで下さいませ。私たち、きっと世間から羨まれているわ。だって、お姉さまは第一王子の母君、そして私は宰相のご子息を婿に迎えるんですもの。我が家もこれで安泰ですわ。」
メアリーは姉を元氣づけるように話しかけます。

「確かにそうかも知れないわね。そこまで望んでなかったけれど…。」
ナターリアは陰りのある表情で答えます。

しばらくの沈黙のあと、ナターリアはメアリーに尋ねます。

「ねえ、もしも…、なのだけれど、私が王妃になったら…?」

それを聞いたメアリーはさすがに驚いて、

「え、お、お姉さま…！そんなお話があるんですの？」

「も、もしものことよ…。そんな話しあるわけないわ。でも、そう
なったら私に務まると思う？」

ナターリアは上目遣いにメアリーに尋ねます。

メアリーは少し考えて、

「そうですね。第一王子の母君だからそうなってもおかしくはな
いですけど…。王妃となると、外交や公務がありますから…。お姉
さまは家庭的な方ですからご苦労なさるかも知れませんね。」

それを聞いたナターリアはため息をついて、苦笑いをしながら、
「そうよね。私には王妃なんて、無理に決まっているわよね…。お
かしなことを聞いてごめんなさいね。」

その普段とは違う姉の様子を不思議に思ったメアリーは、
「お姉さま、あの、何かおありになったのではないですか？こんな
ことをお尋ねになるなんて…」

「そ、そんなことはないわ。あまりにいろんなことがあったから…、
きつと混乱しているのよ。」
ナターリアは慌てて取り繕うように答えます。

「ねえ、お姉さま。お聞きしてもいいかしら？」

「何かしら？」

「あの、お姉さまは陛下のことを愛してらっしゃいますか？」

ナターリアは妹の突然の質問に戸惑いながら、複雑な表情で、

「あ、それは…、あの、お慕い申し上げているというべきなのでしょうけど、私、よくわからないのよ。」

「そう、なのですか…？」

メアリーは怪訝そうな表情で言います。

「あ、でも、まだお若いのに国王をおられる方だから尊敬はしているのよ。ただ、愛しているかどうかは…。」

ナターリアは困ったように答えます。

「お姉さま、もしや、まだカールさまのことを…？」

メアリーは、ナターリアに対して核心を突くような質問をします。

「そ、それは…。側妃である私にはもう、許されないことだわ。でも、カールどのお幸せになっていただきたいと思っているわ。このたびも助けていただいて…。」

ナターリアは言葉を詰まらせながら答えます。

それを聞いたメアリーはやっぱりと思い、

「お姉さま…。もしかして、後宮に入られたことを後悔なさっています?」

「それは何とも言えないわ…。でも、もう王子もいるし、もう戻れないから。」

寂しそうにナターリアは呟きました。

「心配しないでね、メアリー。王子のことはとても愛おしい存在なのよ。だから、もう少し頑張ってみるから、メアリーもお父さまたちのことをお願いね。」

そう言っただけでナターリアは、メアリーの手を握って頼みこみます。

メアリーは姉のことを哀れに感じたものの、

「分かりましたわ。でも、あまりご無理なさらないでくださいませ。私に出来ることは致しますから。」

「ありがとう、メアリー。あなただけが頼りよ。お願いね。」
ナターリアは少し涙ぐんで言いました。

そして、心配そうな表情をしながらもメアリーは後宮を出て、ロプーヒナ公爵邸に帰っていきました。

その夜、アレクセイがナターリアのもとを訪れるようでしたが、ナターリアは体調不良を理由に拒みました。

ナターリアは、なぜか逢いたくなかったのです。逃げているのは分かってはいるのですが…。

それからしばらくして、意を決したように、ナターリアは王太后に面会を申し込みました。

それは許されて、午後のお茶の時間に来るようにとの返事をいただきました。

「久しぶりですね、ナターリアどの。」
王太后がにこやかに話しかけてきました。

少し緊張しながらナターリアは、
「王太后さまにはご無沙汰を致しまして、失礼を申し上げます。
ご機嫌ゆるわしくあられて、何よりでございます。」

王太后は少し微笑んで、
「ごきげんよう、ナターリアどの。さあ、こちらにおいでなさいませ。お茶の支度をさせましたゆえ。」
そう言って王太后は庭園にしつらえたテーブルにナターリアを誘います。

ナターリアとメアリーの会話（後書き）

お読み頂きましてありがとうございます。

ナターリアには可哀そうですが、もう少し幸せになるには時間がかかりそうです。頑張って書いていきます。

王太后との会話？（前書き）

更新が遅くなりまして、すみません。

王太后との会話？

王太后の居室にある庭園には、軽やかな風が吹いて、美しい花たちが咲き乱れていました。

ナターリアはずっと寝室に籠ってばかりでしたので、ついぼんやりと立ち止まり花を眺めてしまいました。

そのぼんやりとした様子を見た王太后は、

「綺麗でしょう？これは亡き人が好きだった花なのよ。」

その声を聞いたナターリアは、ハッと我に返り、

「あ、申し訳ございません。ぼんやりしてしまつて…。あの、王太后さま、亡き人とはどなたのことでございますか？」

「それは、お茶でも飲みながら話しましょう？さあ、お座りなさい。」

王太后は微笑んで話しかけます。

ナターリアは恐縮しながら、席に座り、

「恐れ入ります、王太后さま。」

テーブルの上には香ばしい紅茶とアップルパイが用意されていました。

「美味しい…。」

ナターリアは紅茶を一口、口にすると微笑んで呟きました。

「気に入ってもらえて良かったわ。ああ、ところで王子は元気かしら…?」

王太后がにこやかに尋ねます。

ナターリアは、しまったという表情でバツが悪そうに、
そういえば王太后さまにしばらく王子を預かってもらっていたのだわ…。アレクセイさまの指示とははいえ…。

「あ、あの…。その節は大変お世話になりました、ありがとうございます
いました。お礼も申し上げずに失礼を致しました。おかげさまにて、
王子も元気しております。」
申し訳なさそうに深々とお辞儀をしながら答えます。

「気にしなくていいのよ。陛下の指示だったのでしょう?」
王太后は優しく微笑んできます。

「あ、いえ、その…。申し訳ございません。王太后さま。」
ナターリアは冷や汗をかきながら、うつむいて答えます。

「気にしないでと、申しているでしょう? ナターリアどの。顔を上げてちょうだい。」

王太后が穏やかに話しかけます。

それを聞いたナターリアが恐る恐る顔を上げますと、王太后がにこやかに微笑んで話しかけてきました。

王太后が紅茶をゆっくり飲んでからカップを置きますと、そばに控えていた侍女に何か話しかけました。
侍女はそれを聞くと下がっていきました。

「ナターリアどの、さっきの話しの続きだけれど、あの亡き人と言
うのは先帝陛下の寵妃で、テオドラの母君なの。」
王太后が懐かしそうに話し始めました。

「王女さまの母君でございましたか…。」
顔を上げたナターリアは記憶をたどりながらなんともいえない表情
で答えます。

「ふふつ…。おかしいでしょう。寵妃、クララどのとはいわばライ
バル関係。そのライバルが生んだ子を先帝陛下に頼まれたからと言
って育てるなんて…。」
王太后は笑いながら話し始めました。

「あ、いえ、そのようなことは…。王太后さまのおやさしい心遣い
かと存じます。」
ナターリアが戸惑いながら答えます。

「お世辞はいいわよ。ナターリアどのには似合わないわ。私は、ク
ララどのがテオドラを残して亡くなったとき、正直ホツとしたの。
王妃とはいえ、先帝陛下の寵愛はクララどののもの。これで先帝陛
下は私を見てくださると期待したの。だから、テオドラを育てて欲
しいと頼まれたとき、一もなく飛びついたわ。ナターリアどのも公
爵令嬢だから分かるでしょうけど、王子や王女は王宮で育つものと
定められているけれど後盾のないものほど惨めなものはないわ。
侍女にも劣るわ。クララどのご実家はすでに王女の後盾になれ
るほどの力はない存在だったもの。だから、先帝陛下はテオドラを
王妃の養女にして安心したかったのでしょうね。愛する人との子供
ですもの、ね。」

王太后は昔を懐かしむように話します。

「王太后さま……。ですけど、王女さまと王太后さまは本当に仲の良い親子のように見えますわ。」
「遠慮がちにナターリアが答えます。」

王太后との会話？

「当たり前ですよ。これでもかなりの努力をしたのよ。あの憎らしいクララどのの好きな花をここに植えてまでね…。いまでは、敵の娘がかけがえのかい大事な娘になっているわ。」
王太后が皮肉そうにふふっと、笑って話します。

「王太后さま…。」

ナターリアは、何と返事をしていいか分からず複雑そうな表情で王太后を見つめています。

「ああ…、ナターリアどの。ごめんなさい、つい昔話をしてしまったわね。ところで、今日は何か話があったのかしら？」
王太后がふと気がついたように言います。

「あ、はい。あの…、何と話してよいか分かりかねますが…。」
ナターリアは口ごもりながらも、アレクセイが王妃にと考えていることを伝えました。

「な、なんですって…!」

王太后はあまりのことに絶句してしまいました。

恐れていたことが起きて…。
いかに王子の母とはいえ…。
あら、なぜこのことをナターリアどののはわざわざ伝えに来たのかしら？

「王太后さま、私は王妃にはなることは望んでおりません。」

ナターリアは顔を上げて、はつきりと王太后に伝えました。遠慮がちなナターリアにしては珍しいことでした。

「そして、王太后さまが私ではなく、シャルロツテさまを王妃になさりたいことも存じております。」

「…だから、私に伝えたのですか？」

王太后が窺うようにナターリアに尋ねます。

ナターリアはそれを聞いて目を伏せて、言いにくそうに、

「申し訳ございません。私の気持ちを分かっていたただきたくて申し上げました。ご無礼、お許し下さいませ。」

そう言くとナターリアは深々とお辞儀をしました。

王太后さまは、私の気持ちを分かって下さるかしら…。

どのくらい時間が過ぎたのか、王太后がナターリアに話しかけました。

「ナターリアどの、もういいから顔をお上げなさい。あの、一つ聞いても言いかしら？」

ナターリアは恐る恐る顔を上げると、少し緊張しながら答えました。

「何なりとお尋ね下さいませ。」

「なぜ王妃になりたくないのかしら？王妃といえば、貴族の令嬢に生まれたからには憧れの地位なのはどうして…？」

王太后は不思議そうにナターリアに尋ねます。

ナターリアはそれを聞いてため息をついて、

「それは、私が変わっているからでしょうか。私は王妃になりたい

などと思ったことはございません。ただ、後宮の片隅で生きていければ思っているだけでございます。」

「それは答えになっていないわね。本心を聞かせていただけるかしら？」

王太后はさすがの迫力で、ナターリアに畳み掛けます。

それを聞いたナターリアは困ってしまい、

「そんな王太后さま、私は本心から申し上げておりますのに……。」

「そもそもナターリアどの、あなたはなぜ後宮に来たのかしら？」
王太后はさらにナターリアを追い詰めるように尋ねます。

ナターリアは、実家のためと言いたいところでしたが、それを言うのはなんだかとてもためらわれました。

どうしたものかと、黙っていると王太后が代わって答えます。

「実家のためでしょうか？ナターリアどのが後宮が入られたところは公爵が病気に倒れたところでしたし。」

それを聞いたナターリアは凶星を刺されて、動揺しながら、

「ご、ご存知でいらっしやいましたか……。」

「やっぱりね。夜会にもめつたにこないナターリアどのが後宮に入られるには、それしか理由がないでしょう？」

王太后がふう〜とため息をはきながら言います。

「仰せのとおりでございます。私も父のように愛する人と結婚して幸せになりたいと願っております。後宮に入るなど、思いもよらぬことでございます…。」

ナターリアはもう仕方ないと思い、思っていることを告げました。

「そうでしたか。でも、実家のために後宮に入ったのなら、王妃になれば側妃よりもっと実家に援助が出来ると思うのだけれど、それを望まないのはなぜかしら？」

王太后がさらに尋ねます。

「それは、私には重荷だからでございます。私はシャルロツテさまと違って、妃としての教育を何も受けておりませんし。私はただ、後宮の片隅で静かに生きていければと思っただけでございます。」

ナターリアは戸惑いながらも、必死に言い募ります。

そんなナターリアの様子を見ると、王太后はなんだか昔の自分を思い出しました。

「ねえ、ナターリアどの。もしかして、後宮に入る前に好きな人がいたの…？」

「な、なぜ…、そのことをご存知でいらっしやいますの？」

ナターリアはすっかり驚いて動揺してしまいました。

「あ、あの…、王太后さま、わたくしは…。」

王太后はくすつと笑って、

「心配しなくてもいいわよ。私だって、結婚前はあなたの父君に憧

れていたもの……。でも、父に言われて後宮に入って、いまは王太后
になっているわ。」

「お父さまに憧れて……。王太后さまがそんな恐れおおいことを……。
ナターリアは初めて聞くことに戸惑いながら言いました。」

「若いころの話ですよ。あなたの父君は、私だけでなく令嬢方の
憧れの存在でしたのよ。でも、あなたの母君にとられてしまいまし
ただ。」

王太后がちよつと笑って言いました。

王太后との会話？（前書き）

お待たせしました。

王太后との会話？

王太后の庭園には二人の重苦しい雰囲気と違い、風がそよぎ、美しい花が咲き誇っていました。

ナターリアもここにたどり着いたときには美しい花に見惚れていました。

しかし、今は…。

ナターリアは蛇に睨まれた蛙のようにどうすることも出来ないでいるのでした。

それもそのはず、ナターリア自身も自分の気持ちがよくわかっていないのでした。

すっかり押し黙ってしまったナターリアをどうしたものかと、王太后は考えていたとき、さきほど使いをやった侍女が戻ってきました。「王太后さま、テオドラ王女さまが参られました。」

その声になターリアはふと、顔を上げました。

「お母さま、お呼びでございますか？」

明るい笑顔でテオドラ王女がやってきました。

王女の登場に王太后は顔をほころばせ、

「テオドラ、よく参りましたね。さあ、こちらへお座りなさいませ。」

そう言うと王太后は侍女に王女のお茶を用意させました。

「はい、お母さま。あら、ナターリアどの！久しぶりね。もう、体の具合はいいの…？」

テオドラがナターリアを気遣うように話しかけました。

ナターリアは柔らかく微笑んで、

「おかげさまで、すっかりよくなりましたようでございます。テオドラ王女さまにはご機嫌麗しく、おめでとугоざいます。」

「ごきげんよう、ナターリアどの。それは何よりだわ！お兄さまもそれは、心配していらしたのよ。」

テオドラは久しぶりに逢ったナターリアに微笑みながら話しました。

二人の会話を聞いていた王太后は、含むような笑顔で、

「ナターリアどの、テオドラは今度結婚することになりましたの。」

「まあ、それはおめでたいことで…。心よりお祝い申し上げます、

テオドラ王女さま。」

ナターリアは嬉しそうに言います。

「ありがとう、ナターリアどの。私も内外にお母さまの娘に認められたようで嬉しく思ってますのよ。」

テオドラはさきほどとは違って少し緊張気味に答えます。

それを聞いたナターリアは怪訝そうに、

「テオドラ王女さま、なぜ、そのようなことを…？」

テオドラは少し悲しそうな微笑をして、

「それは、私がお母さまの本当の娘ではなく、側妃の娘だからかしら…。」

少しの沈黙が続いた後、顔を曇らせた王太后が口を開きました。

「テ、テオドラ、何を言うのです？確かに産んだのはクララどのかも知れないけど、あなたは間違いない私の娘ですよ。」

王太后が悲痛な声でテオドラ王女に言います。

「ありがとうございます、お母さま。同じ側妃の娘と言うのに、お姉さま方は小国や国内の貴族に嫁ぎました。私が大国に嫁げるのはお母さまにお育ていただいたおかげでございます。だから、嬉しいのです。」

テオドラは少しはにかんで王太后に話しかけました。

「テオドラ…、あなたは私の娘。大国の王妃になるのは当然のことよ。」

王太后はなんともいえない表情をしながら、テオドラを励ますようにその手を握りました。

「お母さま、だからお母さまの娘で嬉しいと申し上げているのですわ。皇妃の娘の分際でなどという者たちを見返してやりたいと思います。」

テオドラは少し強い口調で答えます。

「テオドラ、あなたにそのようなことを言う者が…。誰ですか、その者は!？」

王太后は少し憤り、テオドラに尋ねます。

テオドラは優しく微笑んで、王太后の方を向いて、

「お母さま、人の口に戸はたてられませんわ。その者の口を塞いでもきりがありません。お気になさらず、ね？」

王太后はため息をついて、

「確かにそうね……。テオドラ、あなたに苦勞をかけるわね。」

「苦勞だなんて、お母さま。私、この国の王女として、立派に御役目を果たしますわ。見ていてくださいませ。」

テオドラはニツコリ笑って王太后を元気づけます。

まだ子供だと思っていたテオドラに励まされ、王太后はすっかり目を潤ませました。

「テオドラ、あちらに行ってしまったらお母さまはもうあなたを守ってあげられないわ。」

「大丈夫ですわ、だって私はお母さまの娘ですもの。」

テオドラは王太后の手をそっと握って話しかけます。

そんなテオドラの姿に王太后はすっかり目をほそめて、ここに来たときは泣くばかりの少女だったのに、よく成長してくれたと内心喜んでいたのでした。

王太后は、ふと目をやると、なんともいえない表情をしているナターリアの姿が目につきました。

「ああ、ごめんなさいね。ナターリアどの、さきほどの話しただけれども場合によっては協力してあげること可能ですよ。」

王太后はふつと微笑みを浮かべて、ナターリアに言いました。

「え、あっ、あの…、それはどのようなことにございますか。」
ナターリアは明らかに動揺しながら答えるのでした。

「それは、このたびの事件で活躍されたカールとか申したかしら、その者をテオドラの側近として随行することを取り計らって欲しいのですよ。出来るかしら？」

王太后はナターリアを窺うように尋ねました。

ナターリアは思いもよらないことを王太后がおっしゃるので何と云っていいか分からずすっかり戸惑ってしまいました。

「あ、あの、それはいったいどういうことにございますか？」

「分からないかしら？それは、ああ、テオドラ、申し訳ないけれど、母はナターリアどのと少し話がありますから席を外してもらえませんかしら？」

王太后はふつとテオドラの方を向いて言いました。

テオドラは怪訝そうに、

「お母さま、何をなさるおつもりですか？私のことならご心配は無用でございます。」

「何も心配はいらないわ、テオドラ。少しだけ話しをするだけよ。さあ、王女を部屋にお連れなさい。」

そう言うと王太后はテオドラを侍女に命じて部屋に案内させました。

そうして、庭園には王太后とナターリアの二人だけになりました。

ナターリアは王太后と二人だけになり、どんなことになるのだろうと、緊張のあまり少し震えが出てきました。

何と言っても王太后は、先代の国王陛下が崩御されてからまだ幼いアレクセイを抱えて、この国を支えてきたのですから大変な力があ
ります。

そんなナターリアの姿を見て、王太后はくすつと笑い、

「ナターリアどの、別にとって食いはしないから楽にしてちょうだい。ただ、少しばかり話しがあるだけよ。」

そう言って王太后は話しを始めました。

急に決まったテオドラ王女の結婚は、あの事件の黒幕ともいえるかの国を牽制するために、かの国とライバル関係にある大国の王太子との縁組なのでした。

大国の妃となるに相応しい身分の王族となると、先代に何人が王女はいましたかどの王女も王妃の産んだ王女ではありませんでした。唯一の候補として上がったのは、王太后が養女として大切に育ててきたテオドラ王女ただ一人でした。

といつても、隣国とは友好関係にある仲ではありません。

むしろ利害が一致しただけの仲です。

何かあればどうなるか分かりません。

テオドラを本当の娘のように大切に思う王太后が、娘のためにカールを側近に望みました。

万一の際には、王女の頼もしい力になるだろうと期待してのことでした。

王太后との会話？（後書き）

いつもお読みいただき、ありがとうございます。

王太后との会話？（前書き）

お待たせしました。

ついに後宮の恐さが…

王太后との会話？

「いかがかしら、ナターリアどの？この話、あなたにとって悪い話ではないはずよ。ナターリアどのの望みどおり王妃にならずに妃の一人として後宮で過ごす代わりに幼なじみのカールとか申す者をテオドラの側近に説得をするだけでいいのよ。」

王太后は微笑んでナターリアに語りかけます。

しかし、ナターリアにとってはそれは悪魔のような微笑みに感じられました。

それというのも、隣国に嫁ぐ王女の側近といえば、出世街道のようですがそれは友好関係にある間柄だけのこと。

利害関係が一致しただけの場合、万一のことがあれば我が身はおろか王女の命さえ危ういのです。いわばていといい左遷とも言えます。そんなところに誰が喜んで行くと言うのでしょうか。

たとえ王太后のたつての願いであつたとしても…。

ナターリアは冷や汗をかきながら、言葉をふりしぼりながら答えました。

「そ、それは…。王太后さま、私にはとてもそのようなことは出来かねます。」

そんなナターリアの姿を見た王太后はくつと笑いながら、

「おや、出来ないと？ならば、王妃になるつもりですか？」

「いえ、それは…。」

ナターリアは困ったように口ごもって答えます。

「ナターリアどの、あなたは少し覚悟が足りないようね。望みを叶えたいのなら、それ相応のことをすべきでしょう?」

鼻先でふつと皮肉そうに笑いながら、王太后が真剣なまなざしで尋ねます。

ナターリアは、言われることはそのとおりなので、返す言葉もありません。

王太后がシャルロットを王妃に望んでいるのは周知のことでしたので、王太后に伝えればなんとかなると思った我が身のあまさを感じていました。

いえ、

ちよつと待って…。

王太后さまにとって、私が王妃になりたくないのは渡りに船のはず。それならばどうしてこんな交換条件を…。

もしか、私を試しているのかしら…?

それならば…。

ナターリアは意を決したように、

「王太后さま、恐れながらお聞きしてもよろしいでしょうか?」

「何か気になることでも?よい。申してみよ。」

王太后がおもしろそうに答えます。

「有り難う存じます。恐れながら王太后さまは、かねてよりシャルロットさまを王妃にお望みと伺っております。なにゆえ私にこのようなことを申されますのでしょうか？」

ナターリアは一つ一つ言葉を選びながら窺うように王太后に尋ねます。

それを聞いた王太后 はニヤリと笑い、

「なるほど、そこに気がつきましたか。そうね、確かにシャルロットどのを後宮にお迎えしたときはその心づもりでしたよ。ですが、今はナターリアどのでも構わないとも思っております。」
王太后の思わぬ答えにナターリアは思わず絶句してしまいました。

「そ、それはどういうことかお聞きしても…、よ、よろしいでしょうか？」

しどろもどろになりながらナターリアは王太后に尋ねます。

「ええ。聞きたいのでしょうか？それは、ナターリアどのの実家ロプーヒナ公爵家に我が兄の息子が婿養子に入るからよ。」

「それが理由で、ございますか…？」
ナターリアは訝し気に尋ねます。

「ええ、そう。そもそも、我が兄の宰相に娘がないのはご存知かしら？」

ナターリアを試すように王太后は尋ねます。

「そ、それは以前、そのようなことを耳にしたことはございますが……。」
ナターリアはわけが分かりませんでした。が後宮に入る前に聞いた話を思い出しました。

「そう。知っていたのなら分かるでしょう？我が実家の繁栄のためにシャルロツテどのを王妃に望んでいたと……。シャルロツテどのの姉はお兄さまの跡取り息子に嫁いでいるわ。だからよ。」
王太后は微笑んで答えます。

「あ、はい……。でも、え、あの、もしや……。メアリーとの結婚で？」
ナターリアは、まさかと思いつながら、恐る恐る王太后に尋ねます。

王太后は含み笑いをして、

「気がついたのね？そう、ロプーヒナ公爵家と縁続きになった以上、シャルロツテどのでもナターリアどのでも我が実家はどちらに転んでも安泰ということなの。だから、私はあなたが王妃になっても構わないのよ。お分かりいただけただけかしら？」

王太后と大臣の会話

「さ、さようでございますか…。よ、よく分かりました、王太后さま。」

ナターリアは驚きのあまり顔面蒼白になってしまいました。

そんなナターリアの姿を見ながら、王太后はゆっくりと紅茶を飲み始めました。

そして、飲み干したカップをテーブルに力チャリと置きました。

「ナターリアどの、お顔の色が良くないようですが…？」
王太后がいかにも心配そうに尋ねます。

「あ、いえ…。大丈夫でございます。申し訳ございませんが、本日はこれで失礼させていただきますたく存じます。また、日を改めてお伺いさせて致しますので、お許し願いますでしょうか？」
ナターリアは震える声で王太后に尋ねます。

「ええ、お加減が良くなさそうですから、お大事になさいませ。侍女に送らせましょう、誰かおらぬか？」

王太后が眉をひそめて心配そうに言うと、侍女を呼びつけました。

ナターリアは椅子から立ち上がると、

「いえ、大丈夫でございますから。どうぞお気遣いなさいませんように。」

王太后はナターリアの体を支えながら、小声で囁きました。

「何を言われます。王妃になれるかも知れない大事なお体でござ

「いまいしょう？」

それを聞いたナターリアは、また顔色を失いながらも、言葉をふりしぼりました。

「あの、王太后さま。まだ、はっきり決まったわけではございませんので…。」

「そうでしたわね。ナターリアどの、いいお返事を期待していますよ。」

ニヤリと王太后は笑って、ナターリアを侍女に託して見送りました。傍から見ると体調の優れない皇妃を気遣う優しい王太后の姿でした。

ナターリアは複雑そうな顔をして侍女に支えらながら、

「お気遣い恐れ入ります、王太后さま。また、よく考えましてお返事させていたただきたく存じます。失礼いたします。」

そう言って深々とお辞儀をして去って行きました。

ナターリアが王太后の居室から去っていくのを見計らったように庭園の隣室からシャルロットの父の大臣が現れました。

「失礼いたします。王太后さまにはご機嫌麗しくおめでとございます。」

「ごきげんよう、大臣。いつからおいででしたの？」

王太后は振り向きざまに、にこやかに大臣に話しかけました。

「少し前にございます。それよりも水臭いですなあ、王太后さま。」

何もナターリアさまに頼まれずとも、私にご命じただければよろしゅうございますものを。」

大臣は微笑んで王太后に話しかけます。

「大臣、せつかくいらしたのです。紅茶を飲んでいかれませ。いま、したくさせましょう。」

王太后はそう言うと、侍女に命じて大臣をテーブルに案内させました。

「恐れ入ります、王太后さま。」

大臣が会釈をして、席につきました。

「それで、いつから聞いていたのですか？」

王太后が皮肉そうに笑って大臣に尋ねます。

「申し訳ございません、王太后さま。聞こえてしましまして、一通りのことは…。」

大臣はいかにも申し訳なさそうな様子で答えます。

それを聞いた王太后はふつと笑い、

このタヌキが！

聞き耳をたてていたのでしょうに。

まあ、いいわ…。

「そうでしたか。壁が薄いのかしら。少し手を入れなくてはならぬいかしら？」

含み笑いをしながら王太后は大臣を試すように尋ねます。

大臣もそれを聞いて眉をひそめて、

まったく…。

食えないお方だ。

「いえ、私はあまりここに参りませんので何とも申し上げかねますな。」

大臣も素知らぬ様子で答えます。

「そう？ならそう思うことにしましょうか。ところで、大臣にはなぜこちらにおいでになりましたの？ただのご機嫌伺いとは思えませんが…。」

王太后はチクリと警告しながら、大臣に尋ねました。

「いえいえ、ご機嫌伺いにございますよ。至らぬ娘がお世話になっておりますから…。」

大臣はそう言って王太后を窺います。

王太后は無言で大臣にふつと笑いかけます。

「…と申しても、信じていただけないようですな。王太后さまには、かないません。どうぞご容赦を願い上げます。」

大臣はそう言って頭をかきました。

王太后は、ふつと笑い出しました。

「ほほほ…。大臣、私は鬼でも蛇でもありませんよ。ん、申してみなさい？」

大臣は心の中で、
蛇の方がかわいいかな…。
まったく勘の鋭い方だ！

「恐れ入ります。では申し上げます。実は、ナターリアさまが王妃になられるという噂を耳にしたものですから、気になりましてこちらに参った次第でございます。」
大臣はそう言うと王太后の様子を窺います。

王太后はそれを聞くと眉をひそめて、紅茶を飲んでいた手を止めて、カップをテーブルに置きました。
「そう、もうそんな噂があるのですか。」

「はい。しかし、噂の真偽を確かめるまでもなく、真実のようでございますな…。」
大臣はそう言うため息をつきました。

王太后は少し困った顔をして、
「ええ、残念ながらそのようでございます。ナターリアどのが嘘をつくとも思えませんし、ね。」

「そうですね、困りましたな。しかし、それよりも王太后さま、さきほどのお言葉はご本心にございますか…?」

「さきほどの言葉とは…?」
王太后は気まずそうな顔で尋ねます。

大臣は皮肉そうに笑い、

分かっているくせに、このタヌキが…。

「恐れおおいことながら、どちらが王妃になってもかまわないというところでございますよ。そういうお気持ちであられるのでございますかな？」

大臣は真剣な表情で尋ねます。

さすがの王太后も少し怯んで、

「大臣、誤解なさないで下さいね。ナターリアどのを王妃になどと考えているわけではありませんのよ。」

「ならば、あのようなことを仰せられたのでございますか？」
大臣はさらに追及するように尋ねます。

「それは、考えがあったからです。大臣、私が反対したとしても陛下はナターリアどのを王妃にするでしょう。第一王子の母でもありますし…。」

王太后は苦々しい表情で答えます。

「それは、確かに…。しかし、どうなさるおつもりで？」
大臣も眉をひそめて尋ねます。

「しばし、ナターリアどのがどうするか、様子を見ましょう。テオ

ドラのことも気になりますし…。」

「は、さようで…。しかし、テオドラ王女さまのことがご心配でしたら、私がかの者をなんとかいたしましょう。」
大臣が王太后にまた恩を売るつもりで提案します。

「いや、まだよい。ナターリアどのがダメだったときに頼みましよう。…あの者、何が不満なのか。陛下に愛され、第一王子の母でもあるのに…。」

王太后はそう言ったあと、何か思い出したように唇を噛み締めます。

王太后と大臣の会話（後書き）

なかなか話しが進まず、すみません。

そろそろ佳境に進んできました。

どうなっていくのを見ていただけるとうれしいです。

登場人物紹介（前書き）

そろそろこのへんで登場人物の紹介をしたいと思います。

一部ネタバレになる人物もいますので、先を知りたくない方はスルーしていただければと思います。

登場人物紹介

ナターリア

この物語の主人公。公爵令嬢。初恋の人カールと結婚したいと思っ
ていましたが、傾きかけた家のために後宮に入ります。

カール

ナターリアの初恋の人で、男爵家の跡継ぎ。

アレクセイ

国王陛下。父を早くに亡くしたため母の王太后に溺愛されて育つ。
初恋の人ナターリアを後宮に迎える。

エレナ

ロプーヒナ公爵夫人
でナターリアの母。

商家の娘で公爵家の侍女でしたが、遠縁の男爵家の養女となって公
爵に嫁ぐ。公爵とは恋愛結婚。

ロプーヒナ公爵

ナターリアの父。娘とカールを結婚させようと思っていたが病気に
なり、妻に後ろ盾がないため傾きかけた家のために後宮に娘を入れ
る。

王太后

先代の王妃で国王アレクセイの母。
夫を早くに亡くしたため息子を溺愛している。
夫の寵妃が生んだ王女を引き取って育てる一面もある。

女官長マーヤ

王宮の女官長。陛下の乳母をつとめた。

女官アンナ

陛下付きの女官。マーヤの娘。

侍女アリス

ナターリアの侍女。

シャルロツテ

大臣兼公爵令嬢。

父の期待を背負って後宮入り王妃の座を狙う。王太后のお気に入り。

オリガ

伯爵令嬢で母は王女。後宮に入り、王太后では頼りにならないと見て、ナターリアに近づく。

大臣

ペトロヴィチ公爵。シャルロツテの父。陛下の即位に力を貸して、王太后の信頼を得る。

テオドラ王女

アレクセイの異母妹。母が早くに亡くなったため王太后に育てられる。

ルイス

カールの異母弟。大臣に利用される。

宰相

王太后の兄。

ラウル卿

王宮お抱え医師。

レオン

宰相の次男。メアリーと結婚してロプーヒナ公爵家の婿養子となる。

ナターリアとアリスの会話？（前書き）

更新が遅くなりました。あまり進んでません…。

ナターリアとアリスの会話？

「ナターリアさま！どうなさいました…。」
よるよると王太后に仕える侍女に支えられて王太后の居室から戻ってきたナターリアに驚いて、アリスが叫び声を上げました。

「…ごめんなさい、マリア。急に気分が悪くなって、王太后さまが侍女どのを遣わして下さったの。」
ナターリアが弱々しく答えます。

「大丈夫でございますか、ナターリアさま？それにしても、王太后さまがこのようなお気遣いを…。おそれおおいことでございます。お世話をおかけいたしましたして、感謝申し上げます。」
アリスは心配しながらも、送ってくれた侍女にお礼を言います。

「いえ、王太后さまの仰せにございますれば、お気になさいませんように。」
王太后に仕える侍女が無表情に答えます。

「さようでございますか。王太后さまに感謝申し上げますとお伝え下さいますようにお願い申し上げます。あとはこちらにお任せくださいませ。」
アリスはそう言うとナターリアを侍女から受け取りました。

そのとき、ナターリアもか細い声で侍女にお礼を伝えました。

「それでは私はこれにて失礼します。」

侍女は窺うようにそう言うと王太后のもとへ帰って行きました。

ナターリアはアリスに支えられて、寝室に横になりました。

「大丈夫でございますか、ナターリアさま？」

アリスが心配そうにナターリアに尋ねます。

「ええ、もう大丈夫。ありがとう、アリス。」ナターリアが安心してように微笑んで答えます。

「出かけられるときはお元氣そうでしたのに、もしや、あちらで何かおありになつたのですか？」

アリスが眉をひそめて尋ねます。

ナターリアはすつと体を起こして、すぐそばに控えていた侍女に、

「お水を持ってきてもらえる？」

そう言うと侍女は下がっていきました。

そして、二人だけになるとナターリアは先程の出来事を話し始めました。

「私の考えが少しあまかったようです。シャルロツテさまを応援なさっている王太后さまに申し上げれば、王妃になることはないと思つただけ……。やはりここは後宮、見返りがないと動かないのですね。」

ナターリアはそう言うと、ため息をつきました。

「ナターリアさま…。」

アリスは何と言っていていいか分からず佇んでいますと、さきほどの侍女がお水を持ってきました。

「ありがとうございます。後は私が致しますから、下がっていてちょうだい。取り繕ったようにアリスはそう言っと、侍女を下がらせました。」

アリスは微笑みながら、お水をナターリアに差し出しました。

「ナターリアさま、お水をどうぞ。」

「ありがとうございます。」

ナターリアは虚ろな様子でそう言っとお水をゆっくり飲みました。

「落ち着かれました？」

アリスは心配そうな様子で尋ねます。

「ええ。」

「あの、ナターリアさま…。お伺いしてもよろしいでしょうか？」
アリスが遠慮がちに切り出します。

「何かしら？」

「ナターリアさま、いえお嬢さまはなぜ王妃になりたくないのです？」

「ございますか？ロプーヒナ公爵家のためにこの後宮に入られたはずでございましょう。」

ナターリアは驚いて、

「アリスまでそんなことを言うの…?」

「申し訳ございません、お嬢さま。ですけど、後宮に入られたばかりとはいざ知らず、もうお嬢さまは国王陛下の寵妃で第一王子の母君であられます。」

アリスは恐縮しながらも言います。

「分かってるわ、そんなこと。だから、王太后さまのもとに行っただんじやない！」

穏やかなナターリアが珍しく声を荒げます。

「いいえ、分かっておられませんわ。もうすでに、後戻りは出来ないのでございますよ。」

アリスが苦痛に満ちた顔で言います。

「では、私にどうしろと言うのです？まさかアリスまで王妃になれと…!」

ナターリアは唇を噛み締めながら言い返します。

ナターリアとアリスの会話？（後書き）

読んでいただいております。

次はもう少し早く更新できるよう頑張ります。

ナターリアにとってつらい時期がやってきます。よければお付き合
い下さい。

ナターリアとアリスの会話？（前書き）

お待たせしました。
続きをどうぞ。

ナターリアとアリスの会話？

「申し訳ございません、ナターリアさま…。そのような意味ではなく、お覚悟をなさいますと申しているだけにございます。」

アリスはすつと膝をついて、ナターリアに向かってそう言いました。

「アリス、覚悟とは…！」

ナターリアは何かシヨックを受けたように言います。

「はい、覚悟でございます。もう後戻りは出来ない以上、王妃になられるか、もしくは王妃になりたくないからと王女さまに仕えて欲しいとカールさまにお頼みするか、二つに一つでございます。」

アリスが辛そうにナターリアに進言します。

「そ、そのようなことは私には…。」

ナターリアは思わず絶句してしまいました。

「お嬢さま、お許しを…。アリスに出来ることは何でも致しますので。」

アリスは少し涙ぐみながら訴えます。

「アリス…。」

しばらくの沈黙のあと、ナターリアがアリスに抱きついてきました。

「お、お嬢さま…!どうなさいました？」
アリスが戸惑いがちに尋ねます。

「アリス、ごめんなさい。しばらくこのままで…。」
ナターリアはそう言うと、子供のときのようになりアリスにあまえてきました。

アリスは少し驚きましたが、やがて微笑んでナターリアの頭をなでながら、

「お嬢さま、いえナターリアさま…。まるで、幼い頃に戻ったようでございますね。」

ナターリアはいたずらっぽく微笑んで、

「クスツ、ホントにそうね。王宮に来てからいろいろあったから…。」

ナターリアはアリスからそつと体を離して、心細そうに尋ねました。
「ねえ、アリス…。私に王妃が務まるかしら？何の教育も受けてない私に…。」

「ナターリアさま、ご決心なされたのでございますか？」
アリスは少し緊張したように微笑んで尋ねます。

「ええ…。カールさまにこれ以上ご迷惑はかけられないし、王子の、アルバートのためにも私が頑張らないと…。」

ナターリアも少し緊張したように答えます。

「ご立派でございますわ、ナターリアさま。ですけれど、務まるかどうかは私にはなく、恐れながら、陛下にお聞きになるべきではございませんか？」

アリスはにっこり笑って、そう進言します。

ナターリアはふっと緊張からとけたように笑って、

「それもそうね。アレクセイさまに私に王妃が務まるかどうかお聞きしてみるわ。」

「その方がよろしゅうございますわ。陛下もきつとお力になって下さいます。」

アリスは微笑んで答えます。

「ありがとうございます、アリス。頼りない主人だけど、これからもよろしくね。」

ナターリアにアリスに言います。

「とんでもございません。こちらこそよろしくお願いいたします。ナターリアさまにお仕えしたおかげで、私も公爵家の侍女からもしかすると王妃さまの侍女になれるのですもの。光栄の極みでございます。」

アリスは少し興奮したように答えます。

「まあ、アリスったら。相変わらずね。」

ナターリアはクスクスと笑いながら言いました。

「ナターリアさまの笑い声は久しぶりですね。これからはカールさまのことはよい思い出になさいます。」

アリスはふつと声をひそめてナターリアに言います。

「ええ、分かっているわ。カールさまは、きっと私の初恋だった方。これからは、王妃として生きるのだから……。」

ナターリアは少し遠い表情をしてポツリと呟きました。

初恋……、

ナターリアの？

ナターリアを驚かそうと突然訪ねてきたアレクセイが扉の前で我が耳を疑いました。

側に控えていた侍女がアレクセイの様子が少しおかしいと感じ、

「陛下、いかがなさいました？」

と尋ねました。

「いや、なんでもなし。そちはもう下がってよい。」

アレクセイは少し難しい顔をして、部屋に入って行きました。

「ナターリア、体の具合は大丈夫か？」

アレクセイは少し複雑そうに尋ねました。

ナターリアは突然、アレクセイが部屋に入ってきたので少し驚き、「まあ、アレクセイさま！突然、どうなさいましたの？」

「いや、少し驚かそうと思ってな。それに、体の具合が悪いのに母君のところに向ったと聞いたが…。」

アレクセイが少し疑わしそうに尋ねます。

ナターリアは少しアレクセイの様子が少しおかしいとは思いましたが、気まずそうに、

「ええ、王太后さまに少しお話ししたいことがございましたので。」

「そうか、どんな話しをしたのだ？」

アレクセイは窺うように尋ねます。

ナターリアは、そう聞かれても、まさか王妃にしないで欲しいと頼みに行ったとは言えずに、

「いえ、あの、たいした話しではございませんので…。」

戸惑ったように答えます。

「余には言えぬことなのか？」

アレクセイは不機嫌そうに尋ねます。

「いえ、そのようなことは…。お話しするようなことではないもの

ですから。」
ナターリアは困ったように答えます。

側に控えていたアリスは助け舟を出すように、

「恐れながら陛下、ナターリアさまがお話ししたいことがおありになるこのことでございます。」

アレクセイはさらに不機嫌そうに、

「アリスとやら、無礼ではないか！余はいま皇妃と話しているのだぞ。」

アリスは申し訳なさそうにビクツと怯えて震えながら、

「も、申し訳ございません…。ご無礼を致しました。」
か細い声で答えます。

ナターリアは、慌ててアリスを庇いました。

「お許し下さいませ、アレクセイさま。アリスの無礼は主人である私の責任でございます。どうぞ責めは私にお申しつけを…。」

「まあ、よい…。こたびはナターリアに免じて許そう。アリス、側に感謝するのだな。」

吐き捨てるようにアリスに向かって言いました。

アリスはすっかり恐縮しながら、

「恐れ入ります、陛下。感謝申し上げます、ナターリアさま…。」

そう言つと深々とお辞儀をしました。

「もう、下がね。ナターリアと話しがあるゆえ……。」

アレクセイは近くの椅子に座りながらアリスに言い放ちます。

「は、はいっ……。ご無礼を致しました。」

アリスはすっかり小さくなりながら、足早に部屋を出て行きました。

ナターリアの決心

「ナターリア…。立ってないで座ったらどうだ？」

アレクセイが気遣うようにナターリアに言いました。

「あ、はい…。失礼いたします。」

ナターリアはこんな不機嫌そうなアレクセイを見るのは初めてのことでしたので、びくびくしながら近くの席にそっと座りました。

ナターリアが座ったのを確認すると同時に、アレクセイがぶっきらぼうに尋ねました。

「それで話したいことはなんだ？」

「はい、アレクセイさま…。先日の王妃にとのお話でございます
が、私に務まるのならぜひお受けしたいと存じます。」

ナターリアは少し緊張しながら答えました。

アレクセイは喜ぶべきところでしたが、先ほどの話しを聞いたばかりでしたので素直にその言葉を聞くことが出来ずに、

「そうか。無理にとは言わないぞ。ナターリアが嫌なら、なかったことにしてもいいのだが…。」

アレクセイのあまりの変わりようにナターリアは、どうしていいかわからなくなり、心細そうに、

「あの、陛下…。私では務まりませんか？」

アレクセイはそのナターリアの言葉を拒否と受け取り、試すように、「いや、そうは思わぬが…。ま、王妃になるのなら、先ほどの侍女は実家に返した方がいいだろうな。」

それを聞いたナターリアは、愕然としてしまいました。

「それは、なぜでございますか？先ほどのことはお許しをいただいたのでは…。」

「まあ、そうだが…。しかし、あのような侍女は王妃付きにはふさわしくないとと思うぞ。ナターリアが苦勞をするだけだ…。代わりの侍女なら余が遣わせよう。」

アレクセイは少し含みをもたせたように話します。

「そ、それは…、私が王妃になるためにはアリスは邪魔なのですか？で、ですがアレクセイさま、アリスは私にはかけがえのない大切な侍女でございます。」

ナターリアはアレクセイに哀願するように答えます。

「いや、まあ…。あの侍女もよく仕えているのだろうが、これまでとは違い、王妃付きともなれば気苦勞も多い。実家に返した方が幸せではないかと思ってな。」

アレクセイは取り繕うように答えます。

「それは、そうかも知れませんが。アリスのためになるのなら、仕方ありません。そのように致しましょう。」
ナターリアは思いつめたように答えます。

アレクセイは少し驚いて、

「よいのか？大切な侍女のだろう、いなくなつては…。」

「はい…、アレクセイさま。私にはアレクセイさまやアルバートがおりますからきつと大丈夫でございます。」
ナターリアは健気に決心して答えます。

それを聞いたアレクセイは急に機嫌が良くなり、

「もちろんだとも。きつとナターリアを守ってみせる。」

そう言つとアレクセイはナターリアの側に寄つて抱きしめました。

「アレクセイさま…？」

ナターリアは戸惑いがちに問いかけました。

「いや、ちょっと嬉しくて…。今日はここに泊まってもよいかな？」

アレクセイは少しはにかみながら尋ねました。

「はい…。うれしゅうございます。」

ナターリアはアレクセイがいつもの様子になつたことに安心したの

か、ふつと安心して微笑みました。

笑ったナターリアを見て、アレクセイも嬉しくなって、その夜はいつになく、仲良くいい時間を過ごしました。

翌日、アレクセイが戻ってから、ナターリアはしばらく泣き伏してしまいました。

それはアリスとの別れを悲しんでいるのか、それとも王妃への重圧に苦しんでいるのか……。果たしてそのどちらか、その両方だったのかも知れません。

ナターリアの決心（後書き）

読んでいただいております。

このお話しを書き始めたときは一人でも読んでくださる方がいればと思っていたのですが思いがけなくたくさんの人に読んでいただいで感謝するばかりです。

そのためか、私の思うように書いていっていいのか悩んでいましたが、思うように書いてみることにしました。

よろしければどうぞお付き合いただければ幸いです。

王太后の企み（前書き）

じわじわと意地悪が始まります。
苦手な方はスルーして下さい。

王太后の企み

ナターリアが決心してから数日たち、アリスも間もなく公爵家に下がって行きました。

その代わりに遣わされた侍女とは、あの事件の折、仕えてくれた女官のアンナでした。

「ナターリアさま、お久しぶりでございます。これからどうぞよろしくお願いいたします。」

アンナは深々とお辞儀をして挨拶をしました。

ナターリアは見知った者でしたので、少し安心したように、

「まあ、アンナ……。これからよろしく頼みます。」

「ふつつかではございますが、精一杯務めます。」

アンナは微笑んで答えます。

「ありがとうございます。頼りにしているわ。早速だけれど、王太后さまのもとに伺いたい。お願いしてもいいかしら？」

少し複雑そうな顔をしてナターリアはアンナに言いました。

「は、はい。早束手配いたします。ではこれにて……。」「アンナは少しナターリアの表情が曇っているのが気にかかりましたが、王妃になられるからかしらと、思い直し、王太后さまへの訪問の手配にとりかかりました。」

「そう…。私の頼みが聞けないって言うことね、ナターリアどの？」
不機嫌そうに王太后がナターリアに言い放ちました。

「は、はい…。ご期待に応えられずに申し訳ございません、王太后さま。」

ナターリアは俯いて申し訳なさそうに答えます。

「それでは王妃になられるのかしら？」
王太后が窺うように尋ねます。

「は、はい。恐れながら、陛下にそのように申し上げました。」
ナターリアは言いづらそうに答えました。

王太后は眉をひそめて、
「それはおめでとうと言うべきかしら、ね。だからナターリアどのの侍女にアンナが付いたのね。」
そう言うと王太后は側に控えていたアンナに視線を向けました。

「恐れ入ります。」
ナターリアは恐縮しながら答えます。

「そうですか…。あの侍女もよく仕えていたと思ったのだけれど、

ね。」

王太后は皮肉そうに微笑みました。

ナターリアはその言葉を聞いたときには、本当にそうだと、辛い表情で俯くばかりでした。

王太后はそんなナターリアを見て、ふつと笑い、

「ナターリアどの、あなたがそんなに利己的な人だったなんてね…。ずっと仕えてくれた侍女を切り捨てて王妃になるなんて思わなかったわ。」

それを聞いたナターリアは、あまりの言いようにふるふると体が震えが止まりませんでした。が、ふつと顔を上げて言い返しました。

「王太后さま、アリスは私にはもったいくらいの侍女でございました。」

「あら、それならなぜ実家に返したのかしら？」
王太后が意外そうに聞き返しました。

「私のために苦勞させてはと、思っています。」
勇気をふりしぼり、ナターリアは答えます。

その答えを聞いた王太后ははっとしました。

強くなったものだわ…。後宮に入ったころとは大違いだわ。

「そう、誤解してたようですね。失礼を許してちょうだい。ナターリアどの優しい方ね。いい王妃になりそうなこと。」

王太后は軽くお辞儀をして、謝罪しました。

「いえ、とんでもございません。こちらこそ失礼をいたしました。」
ナターリアは静かに答えます。

これでは、シャルロツテどのを王妃にするのは難しそうね。
王太后は難しい顔をして、

「ナターリアどの、準備でお忙しいでしょうからもうお帰りなさいませ。」
取り繕うように提案します。

「あ、これはお気遣いをいただきまして、ありがとうございます。
それでは、お言葉に甘えまして失礼させていただきます。」
遠慮がちにナターリアはそう言うと、アンナとともに部屋へ戻って
いきました。

二人が王太后の居室から去ると同時に王太后は大臣へ使いを出しました。

それはもちろん今後のためでした。

それから一ヶ月もしないうちに大臣の暗躍によりカールがテオドラ
王女付きとして仕えることになりました。

「さすがは大臣ですね。どんな手を使ったのかしら？」
王太后は満足そうに大臣に話しかけます。

大臣は思わず、くつと笑い、
「それはお知りにならない方がよろしいかと存じますが。それより、
お約束の件、よろしく願います。」

「分かっておりますわ。もう手配済みだから期待していてちょうだい。
」
王太后は心得たように答えます。

「それはそれは、楽しみでございます。して、お披露目はいつ頃にな
りそうですか？」
大臣は期待に満ちた表情で王太后に尋ねます。

「そうね、次の夜会でお披露目となるでしょうね。」
王太后はそう言つと紅茶を飲み干しました。

「それは楽しみでございますな。我が娘は幸せ者でございますよ。」
大臣も満足そうに紅茶を飲みました。

王太后は、
夜会でナターリアどのはどんな顔をするかしら…。

楽しみだわ。

ふふつと意味ありげにほくそ笑みました。

そして運命の夜会の日がやってこようとしていました。

この日は表面上テオドラ王女の婚約祝いでしたが、アレクセイはナターリアを王妃候補としてお披露目するつもりでした。

王太后は王太后で、大臣の娘の祝いのお披露目をしようとして計画をしていました。

「ナターリアさま、お聞き及びにございますか？」

アンナが夜会の支度を整えたナターリアに尋ねます。

「何をですか？」

ナターリアが不思議そうに尋ねました。

「あの、以前ご実家のロプーヒナ公爵家をお救い下さいましたカールさまがテオドラ王女さまのお付きになられたとのごことでございます。」

アンナがナターリアを気遣うように答えます。

それを聞いたナターリアは、驚きのあまり、手にしていた扇を取り落としてしまいました。

「そ、それは…。いったいどうして?」

「さあ、詳しいことは存じませんが、王太后さまはその者がテオドラ王女さまのお付きになると、たいそうお喜びになられておられるとのことでございます。」

アンナが聞いたばかりの噂をナターリアに告げます。

「そ、そんな…。では私が王妃になることには、何の意味もなかったの?」

ナターリアはすっかり放心したように呟きました。

アンナはナターリアが落とした扇を拾い上げて渡しながら、

「そ、それはどういうことにございますか? ナターリアさま。」

アンナは聞き捨てならない様子で尋ねます。

ナターリアは、動揺したように、

「いえ、あの…。私、以前に王太后さまに私を王妃にしないで欲しいとお願いしに行ったことがあるの。でも、その代わりにカールどのを王女さまのお付きにと望まれたのです。」

「そ、そのようなことが…。それでナターリアさまは何となされたのでございます?」

アンナが先を促すように震える声で尋ねました。

「あの…。その件はお断りしました。カールどのにご迷惑をおかけするわけにはいかないですもの。だから、私が王妃になればと思っただけれど…。」

ナターリアが力無く答えました。

「そんなことがあったのですね……。経緯は分かりませんが、カルさまのことはもう止められますまい。」
「アンナが仕方なさそうに言います。」

王太后の企み（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

読んでいただける方がいらっしゃると思うと励みになります。

いまは苦しいですが、早くハッピーエンドが迎えられるように頑張ります。

夜会？（前書き）

すみません。つらい話です。

夜会？

「そんな…。」

ナターリアは呆然として立ち尽くしてしまいました。

アンナは急にこんな話しを聞いたものですから、何と云っていいか分からず困ってしまいました。

アレクセイ付きの女官としてずっと仕えていたアンナは、アレクセイにナターリアの侍女が急に辞めたから代わりに仕えて欲しいと言われて来たら、こんなことになってしまったのでした。

今にして思うと、アレクセイの様子もナターリアの様子も少しおかしいなとは思いつつでしたが。

それによく考えるとおかしなことでした。

皇妃の侍女が辞めたからといって、国王陛下付きの女官を仕えさせるなんて聞いたことはありません。皇妃が新しく侍女を雇えばすむ話しなのですから。

これはいったい何が起こっているのか…。

「あの、恐れ入りますが、ナターリアさま…。このまま夜会にご出席なさってもよろしいのでしょうか？」

アンナは思わずナターリアに確認するように話しかけました。

「え、あの…。私は…。」

ナターリアは口ごもってしまいました。

カールのために王妃になろうと、アリスまで手放したのに、それなのにカールは王女に仕えることになってしまいました。

でも、

ここまできて…。

いまさらやめることも…。

私さえ我慢すれば実家は安泰なんだし。

メアリーも結婚したのだから。

ふう〜。

ナターリアは目を閉じてため息をひとつつきました。

そして、アンナに向かって言いました。

「このまま出席するわ。いまさらやめるわけにはいかないでしょう。」

「

「それはそうでございませうが…。」

アンナが少し心配そうに答えました。

コンコン…。

「失礼いたします。夜会のお時間でございます。」

「どつちやら時間のようです。参りましょう、アンナ。」

ナターリアが姿勢をただして言います。

「は、はい。ご案内申し上げます。」

アンナが部屋の扉を開けて夜会の会場へ向かおうとしました。

そのとき、迎えに来た侍女が遠慮がちに

「あの、恐れ入りますが陛下から緊急のお手紙を預かっております。

」

「緊急のお手紙でございますか？これから夜会でお逢いになれますの…」。ナターリアさま、どうぞ。」

アンナが不思議そうに侍女から手紙を受け取り、ナターリアに手渡しました。

「ありがとうございます。何かしら…。」

そう言いながらナターリアが手紙を読むと驚きの内容が書かれています。

「アンナ…。参りましょう。」

ナターリアは唇を噛み締めて、震える声で言いました。

「どうなさいました？陛下は、何と…。」

アンナは心配そうに尋ねました。

「いえ、いいの。急ぎましょう。」

そう言うとナターリアは会場へ急ぎました。

ため息を一つ残して…。

王宮の広間では、それはにぎやかに夜会が行われていました。上段にアレクセイと王太后が鎮座していました。

そして、その近くに当然のようにシャルロットも控えておりました。

「あら、ナターリアさまよ。珍しいわね。夜会に出られるのは……。」

「本当ね。出られるってことは何かあるのかしら？」

「もしかしたら、もしかするかもよ……。」

ざわざわとナターリアの噂話が飛び交います。

ナターリアは、決意はしたものの初めてのことに思わず、足がすくんでしまいました。

「ナターリアさま、大丈夫でございますか？」
心配そうにアンナが声をかけます。

「あ、いえ……。大丈夫、ありがとうございます。」
ナターリアがハッとしたように答えます。

「では参りましょうか。陛下もお待ちでございますわ。」
アンナは微笑んでそう言って、アレクセイのもとへ案内します。

ナターリアは少し暗い顔で、アレクセイのもとへ行きました。

アンナは王妃候補として紹介されるものとして張り切っていますが、恐らく歓迎されないのはナターリアは分かりきっていました。それにさきほどの手紙で無理だと分かりましたし…。

「側妃ナターリアさまご到着でございます。」
アンナは誇らしげに告げました。

ナターリアの姿を見たアレクセイは嬉しそうでしたが、すまなそうな顔をして、当たり障りのない挨拶を交わしました。

側にいた王太后が微笑んで声をかけてきました。

「ナターリアどの、夜会でお見かけするのは初めてですね。今日は楽しんでらしてね。」

「恐れ入ります、王太后さま。」
ナターリアが俯いて答えます。

「そうそう、おめでたいことがありましてね。シャルロツテどの、こちらへおいでなさい。」

王太后は楽しそうにそう言つと側にいたシャルロツテを呼び寄せました。

「はい、王太后さま。ナターリアさま、お久しぶりです。」
につこり笑ったシャルロツテが現れました。

「実はね、シャルロツテどのの妹のルイーーズ嬢が結婚することになりましたね。」

「そ、それはおめでとうございます。」
ナターリアは戸惑ったように答えます。

「ありがとうございます、ナターリアさま。王太后さまのお計らいで素晴らしい方をお迎え出来て、我がペトロヴィチ公爵家にとつても名誉なことですわ。」
シャルロットは自慢げに話します。

「そうなのよ。ペトロヴィチ公爵家は女の子ばかりで男子がいないからいい婿養子をと頼まれていたのだけれど、テオドラ王女が嫁ぐ隣国の王太子殿下の従兄弟にあたられる方なのよ。素晴らしいご縁でしょう?」
含むような笑顔で王太后が話します。

「まあ、それはそれは…。誠におめでたいことでございます。心よりお祝い申し上げます。テオドラ王女さまもご縁のある方が我が国においてになられると、さぞ心強いことでございますよ。」
ナターリアは感情を押し殺して、微笑んで言います。

「ありがとうございます、ナターリアどの。本当にこれで王女を安心して、嫁がされますわ。頼もしい側近もついておりますし。あとは陛下に早く王妃を決めていただければ私も安心なのですけれどね。」
少し含み笑いをしながら、話しかけます。

ふふ…。

どうかしら、ナターリアどの。

私の頼みを断るからよ。これで王妃は難しくなったわね。

あなたに恨みはないのだけれど、悪く思わないでちょうだいね。

それを聞いたナターリアは、暗い気持ちになりましたが、

ああ、やっぱりカールさまは隣国に行ってしまったのね。

もうどうでもいい…

けど、せめて実家だけは守らなくては！

「さようでございますね。早く王妃さまを迎えられますようにお祈り申し上げます。」

「ほほ…。陛下、ナターリアどのも薦めてくれたことですし、早く王妃をお決めなさいませ。」

王太后は横に座っているアレクセイに含んだ笑顔で話しかけました。

「母君、まだ王妃を迎えるには早いように思いますので。」
アレクセイは苦々しい様子で答えます。

母君、ナターリアを王妃に迎えたいと思っていたのに、邪魔をした張本人がそんなことを言うとは…。

「あら、そうですか。もういいころだと思ったのですけれど、ね。」
王太后は怯むことなく、答えます。

「まあ、いずれはお考え下さいませね。ではどうぞゆるりとお過しなさいませ、ナターリアどの。」

「ありがとうございます。では御前失礼いたします。」
ナターリアはそう言うと淑女の礼をしました。

アレクセイからは、申し訳なさそうな表情で、楽しんでくれと声をかけました。

しかし、ナターリアは堅い表情で会釈をして去って行きました。

もう愛想笑いをする気分にもなれなかったからです。

アレクセイはもう、不安な気持ちでいっぱいになりました。

しかし、国王であるのに席を離れるわけにもいきません。

ただ、黙って見守ることしか出来ませんでした。

ナターリアが挨拶を終えると、その様子を見守っていた周りの人々が囁きました。

「あら、どうやら王妃はナターリアさまじゃなさそうね。」

「そうよね。隣国の王族を婿に迎えた大臣の息女が側妃で、別の妃を王妃に迎えるわけにもいかないですものね。」

「王子さまの母君でいらっしやるのにお気の毒なこと……。」

ナターリアはそんな人たちの中にいることが耐え切れずに走り出していると、遠慮がちに声をかけてきた人がいました。

夜会？（後書き）

読んでいただいております。

書いててどっちつかずの陛下が憎たらしくなってきました。
頑張ってナターリアをなんとかしたいです。

メアリーとの再会

「お姉さま！」

呼び止めたのは妹のメアリーでした。

結婚したばかりの夫で、宰相の次男のレオンも一緒です。

「メアリー、来ていたの？」

嬉しそうにナターリアは妹のもとに駆け寄ります。

「ええ、陛下にご招待いただいたので。お姉さまにお逢いしたくて……。」

メアリーも嬉しそうに姉に話しかけます。

「そうだったの、陛下が……。あら、ご一緒にいるのはもしかしてレオンのかしら？」

ふと気づいたナターリアがレオンに話しかけます。

レオンは微笑んで会釈すると、

「初めてお目にかかります、ナターリアさま。父から話を聞いておりましたが、お美しい側妃さままでいらつしやいますな。恐れ多いことながら、ご実家に婿養子に入りましたレオンと申します。以後お見知りおきを願います。」

「はじめまして、レオンの。堅苦しい挨拶はいいですよ。私たちは身内なので。どうか妹をよろしく願いますね。」
「ナターリアはレオンの手をとって、にこやかに話しかけます。」

レオンは、側妃といれば美人だけれど、気位の高い方と想っていたので、きさくなナターリアに驚きました。ましてや、第一王子の母です。

やや恐縮しながらもレオンは、答えました。

「恐れ入ります、ナターリアさま。第一王子の母君であられる側妃さまのご実家に相応しくなりますように務めます。」

それを聞いたナターリアは悲しそうに微笑みました。

「ナターリアさま…。」

遠慮がちにアンナが話しかけます。

「何かしら？」

「恐れながら、差し出がましいと存じますが別室でゆっくりお話しなされてはいかがでございますか？」

それを聞いたナターリアは、パツと顔色が変わり嬉しそうに、

「い、いいのですか…？」

「はい、もちろんでございます。このようなこともあるつかとご用意しております。さあ、ご案内申し上げます。」

アンナが心得たようにそう言って案内をします。

「ありがとう、アンナ。メアリー、レオンどの、よろしいかしら？」

嬉しげにナターリアが提案します。

「ええ、お姉さま……。でも……。」

メアリーが言いにくそうに夫であるレオンをちらっと見つめました。

それに気づいたレオンが、

「どうした、メアリー？まさか……。」

「だんなさま、申し訳ないのですけれど、お姉さまと二人だけで話したいので席を外していただけないでしょうか？」

メアリーが苦々しい表情でレオンに頼みます。

「あ、それは……。そうだな。」

レオンは少し傷ついたようにポツリと答えます。

「メアリー、ちょっとそれは失礼ではなくて？」

さすがにナターリアがメアリーをたしなめます。

「あ、あの、お姉さま……。二人だけで話したいことがあるので、お許しを……。だんなさまも……。」

メアリーが申し訳なさそうに言います。

ナターリアは困った顔をしながらも仕方なさそうに、

「仕方ないわね……。レオンどの、どうか妹のご無礼お許し下さいませ。」

そう言って申し訳なさそうに礼をします。

その様子にあわてふためいたレオンが、

「お止め下さいませ。側妃さまにそのようなことをされましては、立つ瀬がございません。ご姉妹でお話しになりたいこともございましょう。気にしておりませんので、お気遣いなさいませんように。」
そう言っつて礼を返します。

「レオンどの、感謝します。このお詫びはいずれいたしますので。」
ナターリアはそう言っつてレオンの手をとつて感謝の意を伝えます。

そしてナターリアとメアリーは別室へと向かいました。
残されたレオンは、美しいナターリアに手を握られたので少しドキドキして、ほんのり顔を赤くしてぼんやりとしながらも、やはり叔母の王太后のしたことがひっかかるのだからと立ち尽くしていました。

その様子をナターリアのことが気になって追いかけてきたアレクセイが目にあたりにして、少し恐い顔をしてレオンを問い詰めました。
「側妃と何を話していた？」

「これは陛下、お目にかかれて光栄でございます。恐れながら、側妃さまにご挨拶申し上げます。」
レオンは従兄弟とはいえ国王陛下に礼を尽くします。

アレクセイは眉間にシワを寄せて不機嫌そうに、
「それだけか？それにしては、手を握つて、親しげであったではないか！？」

「恐れながら申し上げます。ナターリアさまは私の妻の姉君にございます。妹のことをよろしく頼むと仰せられただけでございます。」
レオンは不機嫌な国王陛下にいささか緊張しながらも答えました。

「そ、そうであつたな…。して、皇妃はどちらに？」
アレクセイは力を落とし、ナターリアの行方を尋ねます。

「恐れながら、ナターリアさまは我が妻メアリーと別室にて歓談中でございます。」

「それで、あつたか…。しかし、レオンいやロプーヒナ公爵、誤解する行動は慎んで欲しい。ナターリアは義姉かも知れないが、王妃で第一王子の母だ。」

アレクセイは嫉妬で歪んだ顔でレオンに言います。

「恐れ入ります。以後気をつけます。」

レオンは礼をして答えながらも心の中で冷笑していました。

母に頭が上がりず女一人守れないのに、嫉妬だけは一人前だな…。

さて、そのころナターリアたちは王宮の客間におりました。

「お姉さま、いったいどういうことなのですか？陛下よりはお姉さまを王妃にと聞いておりましたのに…。」
メアリーは心配そうに尋ねました。

「そ、その話しはもうなくなったの…。」
ナターリアは悲しそうに答えました。

「それは、やはりシャルロッテさまの妹君の縁談のこと…。？」
メアリーは苦々しい表情で確認するように尋ねます。

「ええ…、仕方ないの。気にしないで、メアリー。でも私、実はホツとして居るのよ。王妃なんて重荷だし、これで後宮の片隅で気楽に生きて行けるもの。」
ナターリアは微笑んで答えます。

しかし、その姿は強がっているようで、メアリーには痛々しく感じました。

「お姉さま、もういいですわ…。もう後宮を辞して下さいまし。お姉さまを不幸にしてまで、公爵家を存続させてなんになりましょう。」

メアリーは姉に取り縋りながら涙声で訴えます。

メアリーとの再会（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

これから、ナターリアのまわりが少しずつ変わっていきます。
よろしければお付き合い下さいませ。

夜会？

ナターリアは抱きついてきた妹を複雑そうな表情で、ただ抱きしめていました。

「メアリー、変わらないわね。幼いときから何かあったら泣きじゃくって、私のところにやって来たわね。」

メアリーはそれを聞くとすっと、ナターリアから体を離して、慌てて涙をぬぐいました。

「お姉さま、私のことではございませんわ！お姉さまを案じてのことでございます。」

「そう、だったわね…。でも気にしないでいいのよ。私はロプーヒナ公爵家の長女ですもの、これは義務だわ。」

ナターリアは悲しげな微笑みをたたえながら、きっぱりと言います。

部屋の隅に控えていたアンナはそれを聞いて何とも言えない気持ちになりました。

幼いときからアレクセイに仕えていたアンナでしたから、そんなナターリアの言葉を聞くと、

やはり、ナターリアさまは実家のために後宮に入られただけなの…？
愛してはいないのだろうか…。

陛下は本当に愛しておいでだけねど。

「お姉さま！何をおっしゃいます。もう十分に義務は果たされましたわ。後は私が引き受けます。」

メアリーは勢いづいてそう姉に訴えます。

ナターリアは驚いて、

「何を言うの、メアリー！レオンどのご縁は私が第一王子の母なればこそ。側妃でなくなれば、そのご縁も消えます。分かっているでしょう？」

「分かつ、ておりますわ…。でも、このままではお姉さまはどうなります？」

メアリーは、力なく答えます。

「メアリー、私のことは気にしないでいいですよ。それよりもお父さまはお元気なの？」

ナターリアは一番気になっていたことを尋ねます。

「ええ、お姉さま。だいぶお元気になられて、だんなさまに公爵位を譲られたあと、お母さまと一緒に別荘に静養に行かれましたわ。」

メアリーはナターリアを安心させるように微笑んで答えました。

「そう…。レオンどのに気を遣ったのね。別荘って、もしかして、あの菜の花の綺麗な…？」

「ええ、あの綺麗な菜の花畑が近くにある別荘ですわ。よくお姉さまたちと花畑に遊びに行きましたわね。」

「そうだったわね。懐かしいわ。綺麗な菜の花が一面に広がってて…。あの頃に戻れたらいいのに…。」
ナターリアは思わず懐かしそうに遠くを見るような表情で呟きました。

「お姉さま、やはり私が…。」
メアリーが思わず身を乗り出してナターリアに問いかけます。

それに気づいたナターリアは寂しそうに笑って、
「メアリー、ちょっと言っただけよ。さあ、もう行きましょう。レオンどのがお待ちですよ。」

そう言うとナターリアは立ち上がり、アンナに目配せをしました。

アンナは言いにくそうに遠慮がちに、
「あの、ナターリアさま…。恐れながらこのまま後宮に戻られてはいかがでございますか？お疲れでしょう？」

「いえ、疲れてなどおりませんわ。夜会にもどります。さあ、メアリーまいりましょう。」
ナターリアは微笑んで答えます。

「でも、お姉さま！あのようなところに戻られる必要などありませんわ。」
メアリーは不満そうに言います。

「何を言うのです、メアリー？今夜は公爵を継いだレオンどのお披露目ではありませんか？それに私も王子の将来のために頑張らなくてはいいけませんし。」

ナターリアはしつかりとした口ぶりで言います。

それは国王の側妃とは思えない立派な態度でした。

その迫力に気圧されたのかメアリーもアンナもナターリアに従って、夜会の会場に戻りました。

夜会に戻ったナターリアたちはレオンのもとに向かいました。

「レオンどの、お待たせいたしました。公爵夫人をお返しいたしましたわね。よろしければ、一緒に挨拶回りをさせて下さいませ。」
ナターリアは微笑んでレオンに話しかけます。

それを聞いたレオンは、えっという表情をして、

「あ、あの…、それは恐れ多いことでございますので。」

そんなレオンの戸惑いの様子を気遣ったメアリーが、

「だんなさま、お姉さまはだんなさまのお披露目をなさりたいおつもりなのです。ご意向に従って下さいまし。」

それを聞いたレオンは、ホツとしたのか、嬉しいのか分かりません

が安心した表情で有り難くその申し出を受けて、優雅に挨拶回りを始めました。

ナターリアは一步踏み出します前にため息をひとつして、呼吸を整えました。

そして、顔を上げて微笑んで歩き始めました。

「ごきげんよう、オルティス公爵夫人。」

「これは、もしや、側妃のナターリアさまでいらっしやいますか？ お逢い出来て光栄でございます。」

突然声をかけられた中立派の公爵夫人は戸惑いながら挨拶を交わしました。

「こちらこそお逢い出来て嬉しゅうございます。父から公爵さまのお話しは聞いておりましたので。」

含みをもたすようにナターリアはにこやかに話しかけました。

「まあ、ロプーヒナ公爵さまがだんなさまのことを…？」公爵夫人は少し驚いて聞き返します。

中立派でしたから妃とはあまり関わりたくないと思っていたのですが、若いときに憧れたロプーヒナ公爵の話が出たのでつい答えてしまいました。

それにナターリアは女ながらも若い頃のロプーヒナ公爵によく似ていました。

微笑まれると息をのむような美しさでした。

「はい。以前父のお見舞いに戻りました折に伺いまして。ですが公爵夫人、父はもう公爵ではございませんのよ。」

「え、戻られたときですか…?」
公爵夫人は怪訝そうに尋ねました。

それもそのはずです。後宮に入った妃たちは規則により、よほどのことがない限り後宮から出ることが出来ません。
外出する時は国王の許可が必要となります。

「あの…、恐れながらナターリアさまが公爵さまのお見舞いに伺いたいと陛下にお頼みなされたのでございますか?ご寵愛深い側妃であられますゆえ、許可なされたのございましょうねえ。」
遠慮がちに公爵夫人が尋ねます。

その規則のことを知らないナターリアが不思議そうに、
「いえ、王太后さまのご配慮で馬車まで用意していただいて父のお見舞いに戻りましたの。それが何か?」

それを聞いた公爵夫人は信じられない気持ちでした。

王太后がもう一人の側妃を鼻屑にしているのは、周知の事実でしたが父の見舞いの口実があるとはいえ帰らせるとは…。

帰るときは実家から迎えが来るのが慣例だから、これは国王陛下の許可があつてのことではなさそうね…。

「そ、そのようなことがおありになられたのですね…。それは公爵

「さまもお喜びでしたでしょうか？」

公爵夫人はややひきつりつつ答えました。

「ええ、私も帰れると思っておりますので父に逢えて良かったですわ。」

それを聞いていた周りの人々が思わずざわめきました。

夜会？（後書き）

知らないということは恐いかもしれないです。

ちょっと王太后に不利な展開になっていきます。

ふっ…、楽しみです。作者ですが、一番の読者です。

夜会？（前書き）

すみません。更新が遅くなりました。

夜会？

「まあ、さようでございますか……。もし、ナターリアさま、お困りのことがございましたらおっしゃって下さいましね。私に出来ることでしたら、ご支援させていただきますので。」

中立派のオルティス公爵夫人が気の毒そうにナターリアに支援を約束します。

ナターリアはそれを聞いて、

嫌味など言われこそすれ、支援の申し出を言われるとは思っていませんでしたので、こんなことは社交辞令ではないかしらと思い、戸惑いながらも丁寧に断りました。

「ありがとうございます、オルティス公爵夫人。ありがたいお申し出ではございますが、私は側妃の一人にすぎない身にございます。ご支援いただきましても、何のお返しも出来ませんので、お気持ちだけ頂戴いたします。」

「まあ、ご遠慮には及びませんわ。ナターリアさまはご謙遜なされておられますが、側妃とは申しても第一王子さまのご生母ではございませんか！それなのに、このようなお扱いを受けておられるなんて、黙っておられませんか。ねえ、皆様方？」

オルティス公爵夫人が周りの貴族たちに呼びかけました。

周りにいた貴族たちは、あまりのことに憤慨する者、大臣に遠慮する者、いろいろでしたが中立派のオルティス公爵夫人の言葉は人望もありましたから無視出来るものではありません。

周りの人々が何人か、ナターリアに同情して次々と支援を申し出ま

した。

その様子に驚きを隠しきれないナターリアとロプーヒナ公爵夫妻が
おりました。

あまりの展開に驚いて、どうしてよいかわからないナターリアに代
わって公爵を継いだばかりのレオンが答えました。

「ありがとうございます、皆様方。ナターリアさまには、あまりの
嬉しいお申し出に声も出ないようでございます。のちほど私の方か
らお返事させていただきたく存じます。」

「それもそうね。」

「ここでは人も多いことだし……。」

「では、お返事お待ちしておりますわ。」
オルティス公爵夫人がにこやかに答えます。

「ありがとうございます、オルティス公爵夫人。何分にも公爵位を
継いだばかりの若輩者にございますれば、ご支援いただきますれば
ナターリアさまや王子さまをお支えできるやも知れませぬ。」
レオンが信じられない表情で緊張気味に受け答えします。

オルティス公爵夫人は、その様子を見て
訝し気に、

「確かレオンどのは、宰相さまのご子息であられましたな。父君か
らご支援はないのですか？」

それを聞いたレオンは、困り顔で、

「いえ、それはここではちよつと……。また改めてお話いたしますゆえ、ご容赦下さいますように。」

「そうですか……。ではお返事をお待ちすることにいたしましたでしょうか。」

オルティス公爵夫人は、王太后の圧力でもあるのかしらと解釈して同情に満ちた顔で答えます。

それは支援を申し出た人々も同じことでした。

それを隣で聞いていたナターリアが何と思ったのか、執り成すように、

「レオンどの、誤解する言い方はしない方がよろしいのでは？」

「ナターリアさま、お気遣い恐れいりますが、ここは私にお任せ下さいますように。」

レオンがニヤツと笑って答えます。

レオンは、父に何かと兄と比べられてきましたので、次男であるがゆえに養子に出された恨みもあり父に復讐というか見返すチャンスとほくそ笑んでいました。

「そう？レオンどのがよろしいのならいいのだけど……。」

ナターリアは心配そうに答えます。

ナターリアは公爵家に育つたわりには政略結婚ではない仲の良い両親のもとで育ちましたので、そんなレオンの思いなど知る由もなく、ただ父君との仲がおかしなことにならないかしらと心配しているの

でした。

「お姉さま、ご心配には及びませんわ。私の夫ですもの、なんとかいたしますわ。」

メアリーも心配そうな姉に向かって話しかけます。

「そうね……。」

ナターリアは少し疲れた表情で呟きました。

「それよりもお姉さま、お疲れではございませんの？少しお顔の色が優れないようですが……？」

メアリーは心配そうに姉を気遣います。

「いえ、だいじょうぶよ。夜会が慣れないものだから、疲れただけだわ。」

ナターリアは少し弱々しい表情で微笑みながら答えます。

「ナターリアさま、本当にお顔の色が優れないようでございますよ。もう下がられた方がよろしいのではございませんか？」

オルティス公爵夫人も気遣うように尋ねます。

「ありがとうございます。それではお言葉にあまえまして失礼をいたします。」

そう言って立ち去ろうとしたその時でした。

「ナターリアさま、お帰りでございますかな？」

取り巻きをつれた大臣が現れました。

夜会？（後書き）

次は大臣とナターリアとの初対面です。

どんなことになるやら……。

今回もお読みいただきましてありがとうございます。

こんな拙いお話しを読んで下さるお心の広い皆様に感謝しております。

夜会？（前書き）

お読みになる前にお伝えしたいことがあります。

大臣の敬称についてですが、何としたりいいか考えましたが、「さま」で統一することにしました。

閣下は閣僚や将軍、貴族に対する敬称ですが、外交上で利用することが多いものだそうです。

さまは何か感覚的に違うような気がするのですが、さまに相手に敬意を現して使う一般的なものなので、これを使うことにしました。

もし、いい敬称があれば教えて下さるとありがたいです。

へタレな作者で申し訳ありません。

夜会？

「これは、大臣さま……。ご機嫌ゆるわしく存じます。」
オルティス公爵夫人がスツと大臣の前に現れて、にこやかに挨拶を交わします。

それを聞いた大臣が、意外そうな表情で、

「ごきげんよう、オルティス公爵夫人。思わぬところでお目にかかりますな。」

「意外でございますか？それはそうと、このたびのご令嬢のご婚約お祝い申し上げます。」

オルティス公爵夫人が微笑んで、祝いの言葉を述べます。

「ありがとうございます。オルティス公爵夫人からも祝われるとは、娘も幸せものです。ところで、公爵はいずれにおいでで？」

大臣は顔は目は笑ってないものの、にこやかに答えました。

「あちらにありますわ。呼んで参りましょう。」

オルティス公爵夫人はそう言うと、名残惜しげに公爵を呼びに行きました。

そこに残された大臣は、邪魔者は去ったといわんばかりに、ナターリアに近づき話しかけました。

「お初にお目にかかります、ナターリアさま。側妃シャルロツテさまの父でございます。」

ナターリアは少し緊張気味に、

「はじめまして、大臣さま。お目にかかれてうれしゅうございます。このたびのご令嬢のご婚約、お祝い申し上げます。」

「これは、側妃さまにまでお祝いいただくとは、些か面映ゆいですな。ところで、お帰りとお見受けいたしましたか？」

「ええ、少し気分がすぐれないもので失礼させていただこうかと思ひまして。」

ナターリアは少し疲れたように答えます。

「それは残念ですな。お美しいナターリアさまがおいでになりますとこの夜会も華やぎますものを……。」

大臣はいかにも残念そうに言います。

「いえ……。他にもお美しい方々がおいでになりますのに、そのようなことはございますまい。」

ナターリアは俯き加減にそう言います。

「ご謙遜を、ナターリアさま。お帰りにになられる前に、お近づきのしるしに乾杯をいたしましょう。」

大臣はそう言うのと側に控えていた侍女からワイングラスを受け取ると、ナターリアに渡そうとします。

その様子を見たメアリーはスツと前に出て、

「恐れ入りますが、姉は気分が悪うございます。私は代わりにいただきたく存じます。」

それを聞いた大臣は少し不機嫌そうな様子です。

側にいた取り巻きの貴族の一人が心得たように、メアリーに向かっ

て咎めます。

「大臣さまが側妃さまにと話しておられるのに、無礼ではないか！」
普通の女性ならこれで怯むはずですが、そんなことで怯むメアリーではありません。

「申し訳ございません、大臣さま。側妃さまを思うがゆえでございますので、ご容赦を。」

そう言つてメアリーは、お辞儀をします。

そんなメアリーの様子を見た大臣は、なんだか咎められてるような気がしました。メアリーを咎めた貴族に向かって、

「いや、もうよい。気にしておらぬゆえ……。」

大臣は形ばかりそう言つて、制します。

そして、ナターリアに向かって、

「姉思いの妹君をお持ちですな、ナターリアさま。」

「恐れ入ります、大臣さま。妹は私を思つてのことゆえ、ご無礼は私が代わつてお詫びいたします。どうぞお許し下さいませ。」

ナターリアはそう言つて、大臣に向かってお辞儀をします。

それを見た大臣や取り巻きたちは、満足そうに微笑みました。

周りのいる貴族たちがざわつき始めたので、大臣が仕方なく、ナターリアを制しました。

「お止め下さいませ、ナターリアさま。私には何も気にしておりませんので。」

そんなときにオルティス公爵夫人が公爵を連れて戻ってきました。

その姿を見たオルティス公爵夫人は驚いて、

「まあ、ナターリアさま！何をなさっておいでなのですか？」

ナターリアは頭を上げると、何ともいえない表情で、

「いえ、妹が大臣さまに無礼をいたしましたので、代わりに謝罪を
していたところですよ。」

「まあ、そのようなことが？大臣さま、側妃さまに頭を下げさせる
なんて…。」

オルティス公爵夫人が眉をひそめて尋ねます。

隣にいたオルティス公爵も怪訝そうな表情で見つめます。

「いいえ、私が勝手にしたことです。大臣さまは何も
おっしゃってはおりませんわ。」

ナターリアは遠慮がちに答えます。

「そうなのですよ、オルティス公爵夫人。」

大臣が少しだけ申し訳なさそうに言います。

「そうですか…。メアリーどのと申されましたな？公爵夫人になら
れたのですから、あまり姉君にご苦勞をおかけしないようになさい
ませ。」

オルティス公爵がメアリーに注意をします。

メアリーは、話しが大きくなり申し訳なさそうに、

「はい…。申し訳ございません。」

と言って頭を下げます。

大臣は微笑んで、

「さあ、もうよろしいでしょう、オルティス公爵？皆でお近づきのしるしに乾杯でもいたしましょう。」

そう言うとお大臣は侍女に命じてグラスを配らせました。

そして、大臣、ナターリア、ロプーヒナ公爵夫妻、オルティス公爵夫妻で乾杯をしました。

少しやつれ気味のナターリアがグラスを傾けて飲み干そうとしたその時です。

ナターリアの手からワイングラスが落ちて、その場に倒れていきました。

「ナターリアさま！」

「お姉さま！！」

「側妃さまが倒れられた！」

「誰か、医師を！」

メアリーが姉の側に寄り添い、泣きながら、

「だから私が申したのですわ、お姉さま！お飲みにならない方がよろしかったのに……。」

「それはどういうことだ…?」
騒ぎを聞きつけたアレクセイが暗い低い声で問い詰めます。

「陛下…!」

「陛下…!」

アレクセイの登場にざわめきました。

「何をしてのです。すぐに側妃さまを部屋にお連れしなさい。ラウル卿をすぐ呼び、診察させるのです。」
後からついてきた女官長が指示をとばします。

ナターリアが部屋に移されて、その場にメアリーたちが残されました。

「して、どういうことなのだ?」
アレクセイが怒りに満ちた表情でメアリーに尋ねます。

「は、はい。大臣さまがお姉さまにワインをすすめられましたが、お姉さまがご気分が優れないようでしたので、私が代わりにと申し上げたのです。でも、でも…、お姉さまは私の代わりに謝罪なさってお飲み…。ヒクッ…。」
メアリーは途切れ途切れに答えます。

それを聞いたアレクセイは怒りのあまり、顔色が変わり、

「大臣、しばらく王宮に留まるように。客室を用意させる。」

低い声を這うような声で言い捨てると奥へ引き上げていきました。

「陛下…！」

「お待ち下さい、陛下！私は何もしておりませんぞ。」

大臣が必死で言い募ります。

「どういうことだ？」

「訳が分からぬが、どうやら大臣さまが無理にワインをお勧めになられて、ナターリアさまがお倒れになられたらしいぞ。」

「まさか、大臣さまが…。」

「いや、有り得るぞ。ナターリアさまは第一王子のご生母だからないなくなれば…。」

その場にいたたまれなくなった大臣は呆然と立ち尽くしていました。

その大臣を侍女たちが客室に案内をしました。

侍女たちに客室に案内をさせたのは、王太后への配慮だったのかも知れません。

女官長が泣き崩れるメアリーに声をかけました。

「ロプーヒナ公爵夫人、さあ、お立ち下さいませ。ナターリアさまのもとに参りましょう。」

「え、私が側にいてもいいのですか？」
メアリーが戸惑いがちに答えます。

「もちろんでございますよ。ナターリアさまも妹君がお側にいれば心強いことでしょう。」
女官長が優しく微笑んで言います。

「はい、そうですわね。女官長、お姉さまのもとへお連れ下さいまし。」
メアリーはそう言って立ち上がりました。

それを聞くと女官長は、側にいたレオンとオルティス公爵夫妻たちにも声をかけました。

「恐れ入りますが、ロプーヒナ公爵さま、オルティス公爵ご夫妻にも本日は客室にお泊り願えますでしょうか？」

レオンは少し驚きつつ、
「私たちもですか？」

「ええ、申し訳ございませんが。公爵夫人は興奮しておられる様子にて、もう少しお話しを伺いたく思いますので、付き添いをお願いいたしたく存じます。」
女官長が申し訳なさそうに言います。

「はい。そういうことでしたら……。」
レオンとオルティス公爵夫妻もそう言うと、客室へ向かって行きま

その日はそのまま夜会が行われましたが、大変なことになったと噂でもちきりで普段の夜会とは違ったものとなりました。

夜会？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

いよいよ佳境に入っていきます。

反撃というか、立場逆転？していく予定です。

よろしければ、またお読みいただければ嬉しいです。

客室にて？（前書き）

お待たせしました。

お気に入り登録が増えて嬉しい限りです。

客室にて？

「うふふ…。」

「ナターリア、こっち来て！」

誰？

私を呼ぶのは…

カールさま？

いえ、違うかしら。

誰なの…？

「お目覚めでございますか？」

王宮お抱え医師・ラウル卿が心配そうに話しかけます。

王宮の大広間の近くの客室に運ばれたナターリアがゆっくりと目を開けました。

「ここは…？」

「王宮の客室でございます。覚えておいでになられますか？夜会でお倒れになられましたので、こちらにご案内させていただいたので

「ごぞいます。」

ラウル卿が静かに答えます。

ナターリアはうつつななのか、ぼんやりした表情で、

「そうですね…。」

夢だったの…。

きれいな菜の花だった…。

あれは誰だったのかしら。

ああ、いけない。
もう起きないと。

ナターリアはそう思うと、行動が早いのか、寝台から体を起こそうとしました。

ラウル卿は驚いて、

「いけません、ナターリアさま。まだお体の具合がすぐれぬのですから、おやすみ下さいませように。」

と言ってあわてて制します。

「いえ、もうだいじょうぶですわ。」

ナターリアはだるそうな体を起こします。

「ナターリアさま、大事なお体なのですからどうかお休み下さい。」
ラウル卿はなおも押し止めます。

「大事な体…？私などいてもいなくても…。」
ナターリアはそう言っていると皮肉そうに、フツと笑いました。

それを聞いたラウル卿は、いつも穏やかなナターリアがこんなことを言うなんて
と、驚きつつも、

「何を仰せられます。ナターリアさまは国王陛下の寵妃であり、またお子をみごもっておいでなのでございますよ。」

しばらくの沈黙ののち、

「みごもった、と…？」

ナターリアは眉をひそめてつぶやきました。

「さようでございます。誠におめでたきことにて、ご懐妊心よりお祝い申し上げます。ナターリアさま、陛下もご心配なされておいででございますし、この嬉しい報告をせねばなりませんので、こちらで少しお待ち下さいませでしょうか？」ラウル卿はそう言っていると、ナターリアに礼をしました。

「いえ、ラウル卿、この報告はしなくてもよい。祝うようなことではない…。」

ナターリアは不機嫌そうに吐き捨てるように言います。

ラウル卿は、なぜナターリアがそんなことを言うのか、信じられま

せんでした。

いろいろあるとは、思っではいきましたが…。

「な、なぜ、そのようなことを仰せられます…。それに陛下もですが、妹君のメアリー嬢いや今はロプーヒナ公爵夫人でしたな、ご心配なされて別室に控えておられます。せめてご無事をお伝えすれば、さぞ安心なされますでしょう。」

ラウル卿はわけが分からぬまま、なんとか説得しようと思いました。

ナターリアはため息をついて、暗い表情のまま、

「そうですね。分かりましたわ。お伝えしてきて下さい、ラウル卿。」

そう言うとナターリアは寝台に横になりました。

「かしこまりました。ではのちほどかがいます。御前、失礼いたします。」

ラウル卿は礼をして客室を後にしました。

さて、ここは王宮の客室の一つで、アレクセイと女官長、ロプーヒナ公爵夫妻、オルティス公爵夫妻がイライラしながらラウル卿の訪れを待っていました。

「はあ…、まだなのかしら。お姉さまはどうなっているの!」

メアリーがいてもたってもいらねず立ち上がりました。

そんな時です。

コンコン…。

「ラウル卿でございます。側妃さまの診察結果のご報告にに参りました。」

「おお、ラウル卿…。待っていたぞ。これへ参れ。して、ナターリアの様子は？」

アレクセイは思わず立ち上がり、ラウル卿の報告を求めました。

その様子を見た女官長は思わず眉をしかめました。

「医師を立てて迎えるなど国王の威厳にかかわるからです。」

もちろん女官長もナターリアのことは心配でしたが…。

「では、恐れながらご報告いたします。ナターリアさまは、少し心労がおりのご様子でございますが、ご病気ではございません。それに陛下がご心配の毒が入っている可能性でございますが、一切そのようなことはございませんでした。」

ラウル卿はアレクセイの様子を窺いながら報告します。

それを聞いたアレクセイは、安心しながらも訝し気に、
「…しかし、それだけであのようなことに？」

横で聞いていたメアリーは、姉が無事だと聞いて安心したものの、
そんなことと言うアレクセイの言いようがひっかかりました。

「はっ、それが、その…、ナターリアさまはこの報告はお望みでは
ございますが、ご報告させていただきませう。」

ラウル卿は冷や汗をかきながら言います。

「どんなことだ、申して見よ。」

その場にいた全員が固唾をのんで、ラウル卿の報告に耳を傾けまし
た。

「おめでとございます。側妃ナターリアさま、ご懐妊でございます。
す。」

ラウル卿が礼をして、報告します。

「懐妊…！」

「お姉さまが…。」

その場にいた誰もが驚きつつも嬉しそうな笑みを浮かべました。

「それは間違いなのか、ラウル卿！」
アレクセイは嬉しそうにラウル卿に尋ねます。

「はい、間違いございません。おそらくお倒れになられたのはご心
労のせいもございますが、つわりもせいもあつたのやも知れませ
ん。」
ラウル卿はにこやかではありますが、少々複雑な表情で答えます。

「そうか、めでたいことだ！」
アレクセイは満足そうな表情で言います。

その場にいた者たちもお決まりのように、
「陛下、側妃さまのご懐妊心よりお祝い申し上げます。」
と言い、礼をしました。

「皆、ありがとう。」
アレクセイが嬉しそうに答えます。

しかし…。
罪のない大臣を牢ではありませんが、客室に押し込めたのは事実で
す。

果たしてどうすべきか…。

女官長は複雑そうな表情でアレクセイの前に進み出て、

「陛下、ナターリアさまのご懐妊は誠におめでたいことではございますが、大臣のことはいかがなされるおつもりでございますか？」

「そ、それは…！」

アレクセイはうっと、答えにつまりました。

「陛下、恐れながら申し上げます。確かに大臣さまは、罪はございませんがロプーヒナ公爵夫人が止められたにもかかわらず、無理にワインを薦められたことは決して褒められたことではございません。疑われる行為をなさったのですから、あまり気にされる必要はないのではないのでしょうか。」

オルティス公爵が冷静に進言します。

アレクセイは少しホツとしたように、

「そうか…。それもそうだな。しかし、大臣に礼は尽くさねばならぬかも知れぬな。」

それを聞いたメアリーは嫌な予感がしました。

まさか姉に大臣に頭を下げさせるつもりなのかしらと、思いました。

メアリーは思いつめた表情でアレクセイに尋ねました。

「陛下、恐れながらお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何かな、ロプーヒナ公爵夫人？」

「恐れながら陛下、よもやとは思いますがお姉さまに頭を下げさせようとお考えではございませんまいな。」

メアリーはふと、静かな怒りを感じさせるように尋ねます。

アレクセイは、凶星をさされたように動揺しながら、

「そ、そのようなことがあるわけがないだろう。ナターリアは何もしていないのだから。」

そこでさらに畳み掛けるように、レオンが、

「メアリー、失礼なことを申し上げるものではない。つわりで自分の優れぬ側妃さまを大臣に謝罪されることなどあるはずはないか。ましてや大臣を客室にと命じられたのは陛下ご自身でいらつしゃるのですから。さようございましょう、陛下？」

含み笑いをしながらレオンが言います。

「…そ、そのとおりだ。これは余が解決すべきことだ。何も気にする必要はない。」

アレクセイが少しレオンを睨みつけながら答えます。

「恐れ入ります、陛下。妻もナターリアさまも安心なされることと
ございましょう。」

レオンはそう言つと慇懃無礼のように礼をしました。

アレクセイは、

相変わらず食えない奴だな…。

とレオンを憎らしく思いましたが、自分が勝手にしたことナター

リアに頭を下げさせる必要はないのは事実でした。

「ところでナターリアさまには、お加減はよろしいのですか？さきほど、ラウル卿は妙なことを言われましたが…。」
「オルテイス公爵夫人が心配そうに尋ねます。」

客室にて？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

今回はいれられませんでした。少しずつ大臣へのお仕置きが始まります。

それにしても、陛下は…。

客室にて？（前書き）

お待たせしました。

客室にて？

アレクセイはそれを聞いて、えっという表情をしました。

「え…、あ…、ラウル卿。それはどういうことなのだ？」

アレクセイは動揺を隠しきれない様子で、ラウル卿に尋ねました。

ラウル卿は尋ねられて、些か困惑しながら答えます。

「は、それがその…。側妃さまには、始めは報告しなくてもよいとのご意向でしたが、私の立場を申し上げますと、あるがまま報告するようにとのことでございます。」

「なぜ、そのようなことを…？」

アレクセイは顔色を変えて呆然としながらも、ラウル卿に尋ねます。

「そ、それは、私には分かりかねます。恐れながら、側妃さまには何かお悩みがおりがあつてのことと存じます。」

ラウル卿は、

まさかナターリアが「祝うようなことではない」と言っていたとは言い出せないので、遠回しに言葉を濁して答えました。

アレクセイはそれを聞くと、ショックだったのか暗い表情で、座っていた席のひじ掛けに俯いてしまいました。

しばらくの沈黙のあと、虚ろな顔をしたアレクセイが尋ねます。

「ラウル卿、ナターリアに逢うことは出来るのか…？」

「え、はい、陛下…。さきほど、お目覚めになりましたゆえ、少しのお時間でしたら可能でございます。ご案内申し上げますようか？」

ラウル卿は、虚ろな様子のアレクセイを気遣いながら答えます。

「頼む…。」

アレクセイはそう言うと、立ち上がってトボトボとラウル卿と一緒に客室を出て行きました。

その様子はまるで捨てられた子犬のようでした。

どこにも国王陛下としての威厳はありませんでした。

「ちょっと、何なの！私だってお姉さまを心配しているのに…。ほつたらかし！？」

アレクセイとラウル卿が何も言わずに部屋を出てナターリアのもとに向かったから、あまりのことにメアリーが思わず叫びました。

「落ち着いて、メアリー。すぐ陛下も戻られるよ。」

レオンがポンと肩を叩いて、メアリーを慰めます。

そして、ちらっと女官長を方を向いて、

「そつだよね、女官長…？」

女官長は少し気まずそうに、頭を下げて、

「申し訳ございません、ロプーヒナ公爵さま。陛下には、側妃さまをご心配のあまり出て行かれたものと存じます。私が様子を伺って参りますので。」

「そう、悪いね？でも僕だけに謝られても困るなあ…。他にも、ね？」

レオンがニヤリと笑って女官長に追い討ちをかけます。

女官長は、

コイツは…！

いくら陛下のいとはいえ…。

なんだかレオンが憎たらしくなりましたが、他に人がいなければと思いましたが致し方ありません。

ふう〜と、ため息をついて心を落ち着けて、また頭を下げました。

「誠に申し訳ございません、ロプーヒナ公爵夫人ならびにオルティス公爵ご夫妻。陛下に成り代わりましてお詫び申し上げます。

ただいま様子を伺ってまいりますので、こちらで少しお待ちいただけますでしょうか？」

「いや、女官長。私どもは気にしておりませんので。こちらで待ちましょう。」

オルティス公爵が穏やかに話しかけます。

「ありがとうございます、オルティス公爵さま。」

女官長は少しホツとしたように答えます。

「まあ、私もそのようにしていただけたら、お待ちしますわ。でも、女官長みずからなんて、なんだか申し訳ないですわ。」
メアリーも少し機嫌をなおしたのか、女官長を気遣います。

「ありがとうございます、ロプーヒナ公爵夫人。私の役目でございますから、どうぞお気になさいませんように。」
女官長が微笑んで答えます。

「そつだよ、メアリー。気にすることないよ。だいたい女官長があまりやかして育てたからこんなことになったんだから。」
微笑んでレオンが軽口を言います。

その場にいた女官長以外の人間は、危うく吹き出しそうになりましたが女官長の前ですから、なんともいえない表情で、お互いの顔を見合わせました。

気まずそうな表情で女官長は、

「レオンさまにはかたがたありませんわ。では、私は様子を見てまいりますので失礼いたします。」
そう言つて部屋を出て行きました。

ぷっ！

ふふふ…

「だんな様たらっ…。ちょっと言いすぎじゃないの！」
メアリーは女官長が部屋を出ていくと、たまらずに吹き出してしまいました。

「そんなことないよ。あのくらい言ったほうがいいんだよ。義姉君がお優しいのをいいことにあまえすぎてるんだし。」
レオンが少し憤慨したように言います。

「うーん、それは否定しないけどね。」
メアリーもそう言うと、微笑みながら、お茶を飲みました。

「ククツ…、ロプーヒナ公爵夫人、私どももそう思いますぞ。少し耳にはいっただけですが、王妃ではないにせよ、第一王子の母たる側妃にたいしてあまりのお扱いに存じます。」
オルティス公爵が少し笑いながら言います。

「あ、これは…。オルティス公爵、ありがたいお言葉にございます。」
メアリーは、姉ナターリアの敵ならいくらでもいましたが、味方になってくれた人は初めてでしたので少し戸惑いながら答えます。

「少し、警戒しておられますかな？ご心配には及びませんぞ。私は、大臣とはつきあいはありませんぞ。ただ、知らぬこととはいえ、申し訳ないことをしたと思ひます。中立の立場をとっていたとはいえ、王子の母たる妃にたいしてこのようなお扱いは…。何か出来ることがありますたら、何でもお申し付け下さいますようにどうぞ姉君さまにお伝え下さい。」
オルティス公爵が真摯な態度で、メアリーに話しかけます。

それを聞いたメアリーが少し信じられないような面持ちで、レオンを顔を見ます。

レオンはにっこり微笑んで、

「心配ないよ、メアリー。公爵は大臣と違ってたぬきじゃないから信用できるよ。」

それを聞いたメアリーは少し安心したように笑って、

「だんなさまたらっ！あの…、オルティス公爵、頼みにしておりますので、よろしくお願いします。」

そう言うとメアリーかぺコリと頭を下げました。

「お仲のよろしいことね。ロプーヒナ公爵ご夫妻は…。お任せ下さい。出来ることはいいたしますので。それしても陛下はナターリアさまをもう少し庇ってさしあげなくては、身の置き所がないでしょうに。」

オルティス公爵夫人が同情したようにしんみりと話しかけます。

客室にて？（前書き）

少し短いです。すみません。

客室にて？

さて、こちらは場所変わってナターリアのいる客室です。

ぼんやりとベットに横になっていたナターリアのもとにアレクセイとラウル卿がやってきました。

「失礼いたします。ナターリアさま、陛下がおいででございます。ラウル卿がナターリアに告げました。」

「……。」

ナターリアは何と云っていいかわからず、顔を何ともいえない表情をしたままベットに横になっていました。

「あの、ナターリアさま……。」
遠慮がちにラウル卿がナターリアに促します。

ナターリアは返事をしなければならないとは思いつつ、いま一番逢いたくない人、でも一番逢わなければならない人、それがアレクセイでした。

どうしようかしら……。

いまは逢いたくない。

でも……。

「あの、ラウル卿……。申し訳ないけれど、気分が優れないので帰りいただくように伝えていただけないかしら？」

無駄だとは思いつつ、ナターリアはため息をつきながら、ラウル卿に頼みます。

「さようでございますか…。ですが、一目なりともお逢いになれませんかでしょうか？」

ラウル卿は申し訳ない思いでしたが、隣室に控えるしょんぼりとしたアレクセイのことを思い浮かべて、ナターリアに頼み込みます。

「それは…。あの、ラウル卿、お願いできないということ？」
ナターリアは唇をかみ締めながら、ラウル卿に尋ねます。

「いえ、そのようなことは…。かしこまりました。そのようにお伝えいたします。」

そう言うとラウル卿はナターリアのいる客室を出て、隣室のアレクセイにそのことを伝えに行きました。

「そ、そうなのか…。しかし、一目だけでも逢いたい。」
アレクセイは、恨みがましい目つきでラウル卿に言います。

「ですが、その…。側妃さまのご意向でございますので…。」
ラウル卿は国王陛下の意向は絶対だとは思いつつ、ナターリアのあのような姿ははじめてなので、どうしてよいかわからずに戸惑って

おりました。

「あの、ラウル卿…。悪いが、一目だけでいいからとナターリアに伝えてもらえないだろうか？話したいこともあるし…。」
アレクセイは思いつめたようにラウル卿に命じます。

誤りたい…。

本当なら王妃候補としてのお披露目のはずだったのに…。

ラウル卿は、困った顔をしながら、

「かしこまりました。お伝えしてまいります。」

そう言つて、ナターリアのもとへ行きました。

弱りきつたラウル卿がナターリアのもとへやってきました。

「あの、ナターリアさま…。」

言いづらそうにラウル卿がナターリアに話しかけます。

「無理でしたの、ラウル卿？」

ナターリアがベットから身を起こして、不機嫌そうにラウル卿に尋ねます。

「申し訳ございません、ナターリアさま。一目なりと陛下が仰せられました。お話しになりたいことがおありのご様子にございます。」
ラウル卿は平謝りをして、ビクビクしながらナターリアに答えます。

「分かりました。私は話すことはないのだけれど…。」
はき捨てるようにナターリアはそう言うと、側にいた侍女に身支度を整えさせました。

「ナターリア…。」
アレクセイがこわごわと部屋に入ってきました。

「アレクセイさま、ようこそおいでくださいました。」
ナターリアがいつもと違って、冷淡な様子でアレクセイを迎えました。

「あの、ナターリア…。今日はすまなかった。」
アレクセイが申し訳なさそうにナターリアに話しかけます。

「いえ…。お話とは、そのことでしょうか？」
ナターリアが少し顔を強張らせて、アレクセイに尋ねます。

「それと…、ラウル卿から子ができたと報告を受けた。大事にしてください。私にできることはなんでもするから。」
アレクセイが少しうれしそうでしたが、腫れ物に触るようにナターリアに話しかけます。

「何でも、でございますか？」
ナターリアは眉をひそめてアレクセイに尋ねます。

「ああ…、今日のことのお詫びもかねて、出来ることはする。」

アレクセイは力強く言いました。

なんでも…。
それならば…。

「では、私をいますぐ王妃にして下さいませ。」
ナターリアはアレクセイを試すように言い放ちました。

「そ、それは…、ナターリア。申し訳ないが出来ない。」
アレクセイは力なく答えました。

「分かっておりますわ。でも、なんでもと、仰せられましたのに…。」
ナターリアは自嘲気味に言いました。

「すまない。でも、ナターリアを王妃にしたいという気持ちは本当なんだ。そのうちなんとか…。」

「アレクセイは、苦しそうにナターリアに言います。」

分かってくれるだろうか…。
あの大臣の娘と隣国の王族との縁談さえなかったら、今頃は…。
ナターリア。

「そうですね…。でも、出来ない約束はなさらない方がいいのではないですか？」

ナターリアは、分かってはいてもつい言いたくなってしまい、辛らつな言葉がでてしまいました。

ナターリアのその的をついたような答えに、アレクセイは返す言葉もありませんでした。

「あの、アレクセイさま……。その代わりと言ってはなんですが、お願いがございますの？聞いていただけますか？」

ナターリアが少しあまえるようにアレクセイに尋ねます。

「何だ？私に出来ることなのか……？」

少し怯えるようにアレクセイが尋ねます。

「ええ。たいしたことではありませんわ。わたくし、しばらく里下がりを見せていただきたいのです。王子を連れて。」

にっこりと笑ってナターリアが言いました。

客室にて？（後書き）

読んでいただいております。
拙い話でお恥ずかしいです。

ついにナターリアも陛下を見限るのかな…。

ナターリアの旅立ち

夜会も終わり、静まりかえった王宮の客室の一つで、側妃ナターリアの発した言葉によって国王アレクセイは、目の前が真っ暗になってしまい、呆然としてしまいました。

え…。

実家に、

里下がりって…

ナターリア…

それは、

もしかして…

「なんで…?」

それを言ったアレクセイの様子はまるで捨てられた子犬のようでした。

こんな日が来るなんて思いもしなかった…。

ナターリアがいなくなる?

そんな…。

ナターリアは、そんなアレクセイを見て思わず初めて出逢った菜の花畑のときのことを思い出していました。

あのおときもひどい表情をしていた。

確か母君の束縛が…なんて言ってたかしら…。
国王として逢ってからはその面影もなくなっていたけれど。

「…リア、ナターリア？」

いまにも泣きそうな顔をして、アレクセイが問いかけます。

ハツと我に返ったナターリアは、そんなアレクセイの姿を見ると気の毒になり、ここにしようかしらとも思いましたが、でも、後宮に入ってからというものあまりいろいろありすぎて、すっかり疲れてしまいどこか遠くに行ってしまうたい気持ちが出てきました。

それに、お父さまに逢いたい…！

ナターリアは気づいていませんでしたが、心のどこかにカールに逢いたいという思いもありました。

父はいまあの、菜の花畑のある別荘で療養をしています。

隣国に王女に付いて行ってしまっているの、いるはずもないのに…。

それでも、あそこは幼い頃、カールと遊んだ思い出のつまったところ、
です。

そして、アレクセイと初めて出逢ったところ、です。

ナターリアはため息をついて、

「ごめんなさい。私、少し疲れたの。少しお父さまの側で休ませて欲しいの。」

「疲れた、の…？でも、父君の側ってことはここからいなくなるんだよね…？」

「ええ…。でも、何でも出来ることはすると仰せられたでしょう？」
ナターリアは少し唇を噛み締めて、アレクセイに言います。

こんなことも叶えてもらえないの？

「それはそうだが…。帰ってくるよね？」

アレクセイが少し不安そうな顔をして尋ねます。

アレクセイはなんだかナターリアがこのままどこかに行ってしまう戻ってこないような気がしたのでした。

それは予感のようなものでした。

あの会話を聞いてしまったアレクセイにとっては…。

「はい。」

ナターリアは複雑そうな顔で答えます。

言葉は丁寧でしたが冷ややかな声でそう言つとナターリアは、アレクセイに背を向けて横になってしまいました。

それはアレクセイにとって、初めてナターリアの冷たい態度でした。本来は不敬なのですが、あまりのことに呆然としてしまいました。

二人の間にまた子供が生まれるというのに…。

「分かった。じゃあ、大事にしてくれ。手配はしておく。」
アレクセイはそう言つと、寂しそうに客室を出て行きました。

パタン…。

行ってしまった…。

悪いことをしてしまったかしら。

ナターリアは少し後悔しながらも、後宮を出てなつかしいお父さまに逢える…！

そのことを考えるだけで心が弾みました。

アレクセイは客室を出ると、そわそわと待つ女官長がいました。

「女官長、どうしたのだ？」

アレクセイが少し驚いて尋ねます。

「あ、はい…。皆様方がご心配なされておられまして、お迎えに参りました。」

女官長が複雑そうな表情で答えます。

「ああ…。そうだったな。戻るか。」

アレクセイは、気のない返事をしつつ、ナターリアのいる客室を振り向いてドアを眺めました。

「陛下…?」

女官長が心配そうに尋ねます。

「いや、なんでもない。行くぞ。」

アレクセイは何かを振り切るように、女官長を連れてメアリーたちのある客室へ戻りました。

「陛下、ナターリアさまのご様子はいかがでございましたか?」
歩きながら女官長が心配そうに尋ねます。

「ああ、少し気分が優れないようだが、大丈夫なようだ。ちょうど女官長に頼みたいことがある。」
少し暗い表情でアレクセイが答えます。

「どのようなことでございますか?」

「いや、それは公爵たちのもとで話そう。ここでは誰が聞いているか、

分からぬ……。」「

「かしこまりました……。」「

女官長は思わず周りを見渡しました。

そのまま二人は黙ったままメアリーたちの待つ客室に向かいました。

「失礼いたします。陛下がお戻りでございます。」「

女官長はそう言うとアレクセイと共に部屋に入って行きました。

「待たせたな、公爵方。」「

アレクセイが無理に微笑んでいます。

「いいえ、陛下。それよりお姉さまのご様子はいかがなのですか？
メアリーは姉のことがよほど心配なのか、勢い込んで尋ねます。

「ああ……。心配はいらぬ。気分が優れぬようで、もう休んでいるが
……。」「

少し暗い表情でアレクセイが答えます。

「まあ、お姉さまは大丈夫なのですか？」「

メアリーが不安そうに尋ねます。

「ああ、大丈夫だ。しかし、静養が必要のようだからしばらく離宮

に移そうと思う。」

アレクセイが意を決したように言います。

「え…！陛下、ナターリアさまを離宮にお連れになるのでござい
ますか？」

女官長が少し驚いたように尋ねます。

「ああ、だかそれは表向きのこと。ナターリアは父君にお逢いした
いゆえ、近くの離宮に静養にいく形をとる。ロプーヒナ公爵いやレ
オンすまぬが、里下がりをお願いしたい。」

「里下がりですか？しかし、なぜそのようなややこしいことをなさ
るのです？」

レオンが怪訝そうな顔で尋ねます。

「それは…。ここにはいろいろ申すものも多い。そういついとして
ておいた方がいいと判断したためだ。」

アレクセイは少し気まずい表情で答えます。

レオンはそれを聞いて、呆れたようにため息をついて、

「やれやれ、世間では国王陛下の寵妃にして第一王子の母君であら
れるナターリアさまを羨む者も多いというのに。現実はこのなもの
ですか…。」

アレクセイは、事実ですので返す言葉もなく暗い表情で押し黙って

しまいました。

確かに何もしてやれてない…。
はあ…。

王子を生んでくれたのに。

王妃の地位も与えてやれず。

側に控えていた女官長がさすがに、

「公爵さま、それは少しお言葉が過ぎるのではございませんか？」
そう言ってレオンをたしなめます。

「無礼であると申すのか、女官長？謝罪が必要なら謝罪もしよう。

しかし、義姉君に対してあまりのお扱いで黙ってはおられなかった。

「
レオンは憤慨したように言い募ります。

その瞬間、客室の空気は一変しました。

その空気を打ち破ったのはオルティス公爵夫人でした。

「おほほ…。レオンどのは、ロプーヒナ公爵になられても怖いもの
知らずでいらっしやること。さすがは宰相さまの秘蔵っ子ですわ。
さあ、レオンどの…。」

オルティス公爵夫人はそう言うと、レオンに目配せをしました。

「申し訳ございませんでした、陛下。」
レオンはしぶしぶでしたが、頭を下げて謝罪をしました。

アレクセイもそれを見て苦々しい顔から少し顔が和らぎました。
その様子を横目でちらっと見たオルティス公爵夫人は、にこやかに微笑んで、

「陛下、こうしてレオンドのも謝罪なされたことですし、私に免じてお許し下さいまし、ね？」

アレクセイはホツとしたように、
「オルティス公爵夫人にはかないませんね。内々のことですし、何も気にしておりませんよ。では、もう遅いですし公爵方にはゆっくりお休み下さい。女官長、後を頼むぞ。」
そう言つとアレクセイは客室を出て私室に戻って行きました。

その夜は、ロプーヒナ公爵夫妻、オルティス夫妻は客室に泊まり翌日に屋敷に帰って行きました。

そして、ナターリアも翌日には何かに追われるように王子とともに離宮へと旅立って行きました。

王子の母ということもあり、何台もの馬車で護衛に囲まれての旅立ちでした。

「行ったか…。」

王宮の一室の窓際で涙をこぼして見送るアレクセイの姿がいました。

「陛下、大臣さまとのお約束の時間でございます。」

侍従が王宮の客室に泊まった大臣との謁見時間を知らせてきました。

ナターリアの旅立ち（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

これからアレクセイに頑張ってもらおう予定です…。

大臣との謁見（前書き）

対決です。

大臣との謁見

「そうか…。」
侍従に後ろ姿を向けたままアレクセイが鷹揚に答えます。

侍従に分からぬようにそっと涙を拭くと、

「では参ろう。」

そう言つとアレクセイは正面を向いて部屋を出ていこうとしました。

部屋を出ていく寸前、ふと思いついたように侍従に尋ねます。

「ところで母君はいかがなされておる？」

侍従は陛下付きのせいか後宮のことまでは分からないのか、とつさ
のことで答えられず恐縮しながら、

「も、申し訳ございません。私には分かりかねますので、謁見の間
にて女官長がお待ちですのでそちらでお聞きいただけませんでしょ
うか？」

それを聞いたアレクセイは思わず眉をひそめて、
「大臣に逢う前に確認したかったのだが…？」
不機嫌そうに答えました。

「も、申し訳ございません、陛下。」

侍従は恐縮のあまり床に頭をつけんばかりに謝罪します。

「陛下、私ならここに控えております。」
部屋のドアの前で女官長が現れました。

「女官長、謁見の間ではなかったのか？」
アレクセイが少し驚いたように答えます。

「その予定でしたが、陛下が王太后さまのことをお氣にかけているかと存じまして、こうして参りました。」
女官長は何か心得たようにゆったりと答えます。

アレクセイはにっこりと笑って、
「さすがマーヤだな。して母君にはいかがなされておられる？」

「恐れ入ります。王太后さまには、大臣さまが面会を申し出があったようでございましたがお許しにならなかったようでございます。」
女官長は何か腑に落ちないように言います。

「はて、なぜお許しにならなかったのか？母君なら謁見の間にも押しかけて来るのではないかと思っただが…？」
アレクセイも腑に落ちないように答えます。

「はい。私もそのように思いましたが、王太后さまには謁見の間に

もお越しになるご様子はございません。陛下にもご伝言も伺っておりませんし。何かおありになったのでしょうか。」
女官長は何か考え込むように言います。

「そ、うか…。何か企んでおられるようで不気味だな。」
アレクセイは我が母ながら、何を考えているか分からずに考え込んでしまいました。

母は私を国王にすることだけを生きがいに行っている方だと思っていたが、父君の寵妃の子であるテオドラを父君の頼みとはいえ、我が子同様に育てた方…。

何か別の思いがあるのか…。

「なんとも申し上げかねますが…。しかし、謁見の時間が迫っております、陛下。」
女官長はなんとも言えない表情で言います。

「そうだな。しかし、母君が来ぬとなればやりやすいやもしれぬな…。」
アレクセイは些か困惑しながらも、前向きに考えます。

「その意気でございますよ、陛下。さあ、お時間が迫っております。参りましょう。」
女官長がアレクセイを元気づけるように言います。

「行くか…。」
アレクセイはふうくと深呼吸をしてから、女官長とともに大臣の待つ謁見の間に向かいました。

「陛下、しつかりなさって下さいまし。ナターリアさまのおためでごじますよ。」

謁見の間にたどり着いた女官長がアレクセイに囁きました。

「分かっている…。」
少し緊張気味にアレクセイが答えました。

中にいるのはタヌキかキツネか…。

「陛下の御成りでございます。」
侍従がアレクセイの訪れを告げました。

中で待つ大臣、ロプーヒナ公爵夫妻、オルティス公爵夫妻らが一斉に頭を下げました。

「大臣を始め公爵夫妻方、待たせたな。」
アレクセイが声をかけながら、玉座に座りました。

「とんでもございません、陛下。」

「恐れ入ります、陛下。」

口々に大臣や公爵たちが答えます。

ひときしり答えた後、沈黙が謁見の間を支配します。

アレクセイの側に控えていた女官長がわざとらしく、コホンと咳をしてアレクセイの方をちらっと見ます。

アレクセイはたたりと冷や汗をかく思いで、大臣に謝罪の言葉を述べます。

「ところで大臣、昨夜のことは申し訳なかった。許せ。」

「陛下、恐れ多いことでございます。私はよろしいのですが、このような疑いをかけられて我が娘の婚約者が何とお思いになるか考えるだけで身震いがいたします。」
大臣はニヤリと笑って、恐れ入る様子をしながらもチクリと嫌味を言います。

アレクセイはうつと、つまりながら、

「そ、そのことは誠に申し訳ない。しかし、側妃がいきなり倒れたのだ。関係者に話しを聞く必要上、致し方なかったのだ。察して欲しい。」
苦しそうにアレクセイが大臣に釈明します。

「それはそうかも知れませぬが、他にも方法があったように思いますが、いかがでございますでしょうか？」

大臣は丁重な言い方をしていますが、尚も不満を言い募ります。

さすがにその様子に見かねたのか、オルティス公爵が言い咎めます。
「大臣、もうよろしいのではないか？陛下も謝罪なさっておられるようですし、大臣だけがこの王宮に留まられたわけではありませんまい。」

「これは、オルティス公爵。ずいぶん寛大なお心をお持ちでいらつしゃいますな。」

眉をひそめて大臣はオルティス公爵に言い返します。

「大臣は何を言われておられるのやら…。我々は陛下にお仕えする臣下ではありませんか。陛下が謝罪なさっている以上、それを受け入れるのが臣下としての勤めと言うもの。」
微笑んでオルティス公爵が嫌味のように大臣に語りかけます。

「それはそれは…。オルティス公爵は臣下の鏡でいらっしやいますな。私のような者には、到底真似できません。しかし、私が疑いをかけるということはシャルロットさまや我が娘の婚約者を軽視していることに他ならぬことゆえ、到底容認いたしかねます。」
大臣も怯むことなく言い返します。

タヌキめ…。

ここに叔母君もおらぬのに叔母君を傘に着るつもりか…。

「大臣もなかなかおっしやいますな。しかし、陛下の御前でそこまでおっしやってもよろしいものでしょうかね。」
含みを持たせたようにレオンが割り込んできました。

大臣はこの若僧がと思いながら、

「これはレオンどのいや、ロプーヒナ公爵。聞き捨てならぬことを…！」
少し睨みつけながら言います。

「おお、怖い…。そんなに睨まないで下さいよ。」
レオンがその場の空気を読まないような軽口をたたきます。

その様子を見たメアリーが大丈夫かしらと、不安そうに見守っています。

その側にオルティス公爵夫人が、大丈夫よと言うように微笑みました。

「大臣、ロプーヒナ公爵はまだお若いのですから……。」
オルティス公爵は執り成すように大臣に言います。

「それもそうですが……。」
大臣は些か不満そうに言い募ります。

「ロプーヒナ公爵、もしや何かおっしゃりたいことがおありなのは？」
オルティス公爵がレオンにアイコンタクトをして、尋ねます。

「そうですね。大臣は昨夜、我が義姉のナターリアさまに頭を下げさせておられましたよね？メアリーがたかがワインを断ったぐらいで……。」

ニヤリと笑って、ちらっとアレクセイの方を見ます。

それを聞いたアレクセイは、わなわなと奮えながら、
「それは本当か、大臣…！」

さすがの大臣も少し怯んで、

「ご、誤解なさらないで下さい、陛下。側にいた者が申したことで、
私は止めたのですぞ。」

「おやおや、都合のいいことをおっしゃる。公衆の面前でしっかりと
頭を下げさせた後で止めたくせに…。」
レオンが涼しい顔で痛いところをつきます。

大臣は痛いところをつかれて、
少しやり過ぎたかと思いつつながら、
「な、何をおっしゃいますのやら…。突然のことで驚いていただけ
にございますぞ、陛下。」

「謝罪する必要はなかったかも知れぬな…。」
アレクセイが暗い表情で大臣につぶやきます。

「誤解でございます、陛下。ナターリアさまにお聞きになれば分か

ることにございますぞ。私はナターリアさまに謝罪を要求したこと
などありません。」

大臣は少し焦りながら訴えます。

「大臣さま、恐れながらナターリアさまは静養のため離宮へと出発
なさいましてもう王宮にはおいでではございません。」
女官長が冷ややかに大臣に言います。

「え…！離宮に行かれたと…？」

大臣は残念そうなしかし、少し嬉しそうな表情で答えます。

「大臣、心なしか嬉しそうですね？」

嫌がらせのようにレオンが大臣に尋ねます。

「冗談が過ぎますぞ、ロプーヒナ公爵。私はただ、ご懐妊のお祝い
を申し上げたかっただけです。」

大臣はその場を取り繕うように、言い返します。

「それは失礼をしたな。ナターリアも大臣の気持ちは有り難く思っ
ていることであろう。」

アレクセイは微笑んで大臣に話しかけます。

「恐れ入ります、陛下。このたびのこと、私にも手落ちがあったことですし、謝罪を受け入れなかったことに致しましょう。」大臣は丁寧にアレクセイに答えます。

まあ、今回は謝罪も引き出せだし、何よりも我が娘の最大のライバルが王宮から消えてくれたのだから良しとするか。
また子供が出来たのは些か気になるが…。

「そうか。感謝するぞ、大臣。では今日は執務には及ばぬ。もう下がって休むが良い。」

アレクセイがホツとしたように大臣にそういって、下がりました。

ふう〜。

なんとか乗り切ったな…。

しかし、大臣め、なんてことを…。

アレクセイはふつつと湧き出る怒りを抑え切れませんでした。

レオンの暴言（前書き）

お待たせしました。

すみません、あまり進んでません。

レオンの暴言

パタン…

「しっかし、たぬきじじいそのものだな。よくしゃあしゃあと…。」
大臣が去った後、レオンがおもむろに口を開きました。

「だんなさま、陛下の御前ですよ。」
メアリーが少し笑いを含みながら、レオンをたしなめます。

席に座っていたアレクセイがなんとも言えない表情でため息をつきました。

「はあ…。大臣はああいう人間だからな。」

「分かっているのなら、何か手を打つべきではありませんか？」
レオンが辛らつな言葉をアレクセイに投げかけました。

アレクセイはうつ、と言葉に詰まりながら、
「分かっているが、今のところ手がないのだ。」そう言うと、思わず顔をしかめました。

「何ということですか。だから、義姉君は王宮を出られたのでしょうか。お気の毒に…。」
レオンはアレクセイのいところであるせいか、遠慮のない言葉をいいます。

その直後、謁見の間の空気が緊張につつまれました。

「…レ、レオンさま、いえロプーヒナ公爵さま！それはあまりに無礼ではありませんか？」

女官長がわなわなと震えながらレオンに注意を促します。

メアリーはさすがに心配そうにレオンの様子を窺いますと、レオンが心配ないからと言うように微笑みました。

レオンは悪びれもせず、

「これは、失礼を致しました。陛下に対して誠に無礼でございます。お許しを願います。」

そう言つて神妙そうに平伏しました。

「ロプーヒナ公爵、許すゆえ頭を上げよ。」

アレクセイはレオンの言葉によって傷つきましたが、事実なので、反論するわけにもいきません。

それに、頭を下げて誤っている以上許さないわけにもいきません。それに何より、愛するナターリアの実家の人間でもあります。処罰したとなれば、ナターリアがどんなに悲しむことでしょう。

まったく、こいつは自由に発言してから…。

処罰しにくいということ分かっているのか。

国王の立場にもなれ…。

「ははっ。寛大なお心に感謝致します。」

レオンは何か含むような笑みを浮かべて頭を上げました。

そばにいたメアリーもホツとしたように、「感謝申し上げます、陛

下。」

そうアレクセイにお礼を申し述べました。

「ふふ…。まったくロプーヒナ公爵は怖いもの知らずですな…。」
オルティス公爵が笑ってレオンに話しかけます。

「恐れ入ります。」

アレクセイには、いとこの気安さと義姉のナターリアのあまりの扱いに憤慨していたせいもあり、些か言葉が辛辣でしたが、人望のあるオルティス公爵にかかつては恐縮して、レオンはうつむき加減で答えます。

「さすがのロプーヒナ公爵さまも、オルティス公爵さまには弱いと見えますね。」

女官長はレオンをからかうように言います。

「女官長、ロプーヒナ公爵をあまりからかうものではない。」
アレクセイが少し機嫌をよくしたのか、笑いながら女官長をたしなめます。

「これは、失礼を致しました、陛下。ロプーヒナ公爵さま、申し訳ございません。」
女官長がしまったと言うようにレオンに謝罪しました。

レオンは謝られて、なんとも言えない表情でアレクセイの方を見ます。

「もうよろしいではございませんか？それよりこれからのことを考えませんか…。」

オルティス公爵夫人が遠慮がちに割り込んで入りました。

「そうだな。レオンが余計なことを申すからな。」

アレクセイが自由に生きているいとこのレオンを睨みつけました。

「も、申し訳ございません。」

レオンがしぶしぶ答えました。

「恐れながら陛下、これからどうなさるおつもりでございますか？
オルティス公爵夫人が遠慮がちにアレクセイに尋ねます。

「どうするとは…？」

アレクセイは少し緊張しながら言いました。

「もちろんナターリアさまのことでございます。たとえシャルロットさまが王妃になられるとしても第一王子の母君に相応しい待遇にして差し上げなくてはなりません。私どももいままで知らぬことはいえ、何も出来ずに申し訳なく思っております。」

オルティス公爵夫人が沈痛な表情でアレクセイに訴えます。

「陛下、及ばずながら私に出来ることは協力させていただきますので…。」

続いて慎重なオルティス公爵もアレクセイにたたみかけます。

「あ、ありがとう…。オルティス公爵夫妻、その言葉嬉しく思うぞ。」
アレクセイもいままでナターリアに対して好意的な貴族たちに出逢うことがなかったので、少しとまどってしまいましたが、国王としての偉ぶった返事を返しながらもなんだか嬉しくなつて表情がゆるんでしまうのを隠し切れませんでした。

父が早くに亡くなったため、若くして国王に即位してからというものの、アレクセイはいつしか国王の仮面を被るようになっていたのです。

その仮面が外せるのはナターリアだけだったのですが…。

その年季の入ったアレクセイが表情を隠しきれないとは、よほど嬉しかったのでしょうか。

「感謝申し上げます、オルティス公爵さま。陛下が謁見の間どのように喜ばれたのは久しぶりでございます。」

女官長も乳母として育てたアレクセイが喜んでいる姿が嬉しいのか、妃に対して公平であらなければならぬ立場を忘れて感謝の言葉を伝えます。

「恐れ入ります、陛下。しかし、臣下として当然のことでございますゆえ、礼には及びませぬ。」

オルティス公爵が臣下の礼をしつつ、にこやかに答えます。

「それにしてもおかしいな？あの叔母君が何にも言っていないで…。陛下はどう思われます？」

レオンが不思議そうにアレクセイに尋ねます。

「うーん、実は僕もそれが謎なんだけど、ね…。そうだ！レオン、母君のところに行って何か聞き出して来てくれ。」

アレクセイはポンといいことを思いついたようにいたずらっぽくレオンに頼みます。

「な、何言ってるんですか？嫌ですよ！あの叔母君ですよ。また、ぐだぐだと説教受けるだけでな～んにも聞き出せませんよ。」
レオンが本当に嫌そうに首をぶんぶんと振って拒否します。

「くっ…。レオンにも怖いものがあつたのか？」
笑いを含みながらアレクセイが尋ねます。

「からかわないで下さいよ。ただ、ちょっと苦手なだけですよ。あ、それより、陛下が聞き出して来られてはいいかがですか？かわいい一人息子だからすぐに何でも教えてくれますよ、きつと！」

アレクセイはそれを聞いた瞬間、目が泳いでしまいました。

「いや、たぶん無理だ！最近、ナターリアのことで仲が良くないんだ…。」

弱り切ったようにアレクセイが答えます。

「あの…。」

何か言いたそうにメアリーが目で訴えます。

「何、メアリー。どうしたの？」

レオンが振り向いて、メアリーの顔を覗き込んで尋ねます。

「あの、だんなさま…。どちらでもいいんですけど、お姉さまのために王太后さまのご意向を聞いて来ていただけませんか？」
あまえるようにメアリーがレオンにお願いをします。

それを見たレオンは、蕩けるような表情なり、

「まいったなあ…。メアリーに頼まれると嫌とは言えないな。」

「じゃあ、だんなさま…！」

メアリーが期待に満ちた顔でレオンに話しかけます。

「うん。そういうわけだから、陛下よろしくお願いしますね。」
レオンが事もなげにアレクセイに頼みます。

「「え！」」

その場にいたレオン以外の全員が見事にハモりました。

「おい、レオン！違っだろっ。おまえが頼まれたんじゃないか!？」
アレクセイがレオンにツッコみます。

レオンが頭をかきながら、
「いや、よく考えたらさあ…。ナターリアさまが離宮に行かれたから、うちの別荘にいる義父君たちに使いを出したり、召し使いの手配や何やらとすることが多いから、ね。だから、陛下よろしくお願いします。」

「確かに、それはそうだな…。」
アレクセイは何か腑に落ちないようでしたが、自分が行かなければいけないような気がしてきました。

「そうでしょう？夫が妻の幸せのために働くのは当然のことですよ。
それに、ナターリアさまの妹に嫌われたくないでしょう?」

レオンがニヤリと笑ってアレクセイに尋ねます。

こっ、こいつは…。

「分かったよ。夫は妻の幸せのために働くよ。女官長、行くぞ。」
アレクセイはすっかりお手上げとばかりに、席をたちあがりました。

「よろしくお願いします、陛下。」
ペコリと頭を下げて、メアリーが頼みます。

「分かった。」
アレクセイはにっこり微笑んで出て行きました。

パタン。

同じ姉妹でも違うのだな…。
ナターリアはあまえることなどなかったが。

しかし、頑張つてなんとか状況を変えねば…。
ナターリアのために！

アポもなく王太后の居室に向かうアレクセイでしたが、そこにはあ
る人物が王太后に驚く報告をしておりました。

レオンの帰宅（前書き）

すみません。王太后の登場はありません。次回はきつと…。

レオンの帰宅

「…だんなさま、陛下にお願いしてよろしかったのですか？」
メアリーが心配そうにレオンに尋ねます。

「いいんだよ。あのくらいいしないとね、義姉君もここに戻ってきてもつらいだけだからね。」
レオンはそう言うとメアリーにいたずらっぽくウインタしました。

「ま、確かにそうですけど…。」
メアリーも同意するように答えます。

「そうだろ？それより、もう今日はもう邸に帰らないといろいろ手配しないといけないし…。ねえ、もう帰っていいんでしょう？」
側に控えていた侍従にレオンが尋ねます。

「はい。大臣さまとの謁見が終了後、公爵さま方にはお帰りいただくように陛下から申しつかっております。お帰りでございますしたら、馬車をご用意いたしますので少しお待ち願えますでしょうか？」
侍従が少し緊張気味に答えます。

「いや、馬車はよい。待たせておるゆえな…。」
オルティス公爵が口をはさみました。

「オルティス公爵、馬車を用意してくれるのになぜです？」

レオンが怪訝そうに尋ねます。

オルティス公爵は苦笑しながら、

「ロプーヒナ公爵、側妃のご実家なのですからあまり自立つ行動は差し控えられた方がよろしいと思ったまでのこと。王太后さまも側妃のころはそのようになされていたはずでは？」

「あ、そう言えばそうでした…。」

うっかりしていたようにレオンが答えます。

「それに、大臣さまはきつと王宮で用意した馬車でこれみよがしに帰られたでしょう？王妃候補と目される側妃の父を誇示するようにね。そうでしょう、侍従？」

ニヤリとするようにオルティス公爵は侍従に尋ねます。

「あ、はい。誇示なされたかどうかは分かりませんが、確かに王宮で用意した馬車で帰られたと聞いております。」

「ありがとうございます、侍従。ほら、ごらん。ロプーヒナ公爵、思った通りだ。だから我々は自分の馬車で帰ろう。」

ポンとレオンの肩を叩いて、オルティス公爵は帰りを促します。

「しかし、それでは大臣さまに負けたことになりませんか？」レオンは抵抗するようにオルティス公爵に訴えます。

「分かってないですね、ロプーヒナ公爵いやレオンどのは…。皆、ナターリアさまに無理じいをした大臣さまの姿を夕べ見ているでしょう?」

クスクスと笑いながら、オルティス公爵が言います。

レオンはなんだか馬鹿にされたような気がして、ムツとして、

「それと馬車と何の関係があると言うのですか、オルティス公爵?」

「おおありですよ。つまり、大臣さまは自分で手を下してないといえ、第一王子の母であるナターリアさまに失礼を働いた。その直後、ナターリアさまが倒れた。疑いをかけられたもの、ナターリアさまがご懐妊と判明したため、疑いは晴れ国王陛下の謝罪を受けて、王宮の馬車で意気揚々と帰られた。そして、ナターリアさまは離宮に行かれた。一方、ご実家のロプーヒナ公爵夫妻はご自分の馬車で帰られた。これを皆は、果してどう思いますかな?」

ニヤリと笑ってオルティス公爵はレオンに尋ねます。

「あ…！つまり、義姉君に同情が集まり、大臣さまに批難が集中すると言うわけですね。オルティス公爵は人望のある方と伺っておりましたが、なかなか意地の悪い方ですね。」

レオンは嬉しげにオルティス公爵に答えます。

「それは褒めていただいているのか、それともけなされているのでしょうか、レオンどの?」

苦笑いしながらオルティス公爵が尋ねます。

「もちろん褒めております。けなすなどとてもない。さすがはオルティス公爵でいらつしやると…。」

「これは恐れ入ります。さあ、参りましょうか？まあ、明日になれば、もしかすると大臣さまがナターリアさまを追い出したと噂になつておれば上々ですがな。」

フツと意地悪そうにオルティス公爵が言います。

「オルティス公爵もお人が悪い。まあ、大臣さまには自業自得と言つてところですが。」

レオンもフツと意地悪そうに微笑みました。

「そういうところですか。ナターリアさまが王宮を出られた真相はどうあれ、皆はきつと大臣さまが圧力をかけて追い出したと見るでしょうからな。では、帰りましょう。侍従、陛下によるしく伝えてくれるか？」

「ははっ。承りました。確かに陛下にお伝え申し上げます。」
侍従は平伏して答えます。

側で聞いていたメアリーが少し怯えた表情で話しを聞いていました。

その様子を見たオルティス公爵夫人が気遣って、

「どうしました、ロプーヒナ公爵夫人？」

「いえ、あの…。」

メアリーは何と答えていいか分からず戸惑いがちに返事をします。

オルティス公爵夫人はニツコリと微笑んで、

「びつくりなさったのでしょうか？でも、政治とはそういうものですわ。心配なさらないで、私たちがついております。」

「あ、ありがとうございます。オルティス公爵夫人にそう言っただけだと心強いですわ。」

メアリーは少しはにかんで答えます。

「まあ、可愛らしいこと。結婚前でしたら、私たちの嫁に欲しいところですね。」

オルティスはニコニコと言います。

「だめですよ、オルティス公爵夫人。メアリーは僕の大事な奥さんですからね。」

レオンは嫉妬したのか、メアリーを抱き寄せます。

「だ、だんなさまっ！人前ですから…。」

メアリーが恥ずかしそうに抵抗します。

「おやおや、仲のよろしいこと。レオンドの、妻はあまりに公爵夫人が可愛らしいのでつい言葉にしただけのこと。他意はないのだ、許してくれ。」

オルティス公爵が夫人に代わって謝罪します。

「分かっておりますよ。しかし、つい心配になりましたね。」
レオンはそう言うと、メアリーが愛しくてならないような表情で見つめます。

「これはすっかりあてられてしまいましたな。後は邸でゆっくりなさいませ。では、我々はこちらで……。」
オルティス公爵はそう言うと夫人と共に邸に帰りました。

レオンたちも自分の馬車で大臣とは違ってひっそりと帰りました。

このことが良かったのか大臣に関する噂が貴族たちの間で飛び交うようになりました。

夜会ではシャルロツテが王妃目前と言われていたと言うのに……。

レオンの帰宅（後書き）

お気に入り登録いただいた方、お読みいただいた方、ありがとうございます。

王太后のシヨック(前書き)

急展開です。

王太后のショック

さて、ここは王太后の居室です。

夜会の翌朝、王太后は信じられない報告を受けておりました。

「な、なんとということ…！」

あまりのことに王太后は絶句していました。

「お兄さま、それは事実なのですか？」

震える声で王太后は尋ねます。

「残念ながら事実でございます、王太后さま。」
宰相は苦々しい表情で答えます。

王太后は何を思ったのか、大臣のことを調べるようにと兄の宰相に依頼しました。

その報告の結果があの日会の翌日にようやく届きました。

その結果は思いもよらぬことでした。

大臣は王太后の信頼をいいことに、王宮に納めるべき収入を自分のものとしていたのです。
そのうえ…。

「それに、大臣はフレデリカ男爵の子息を罪に陥れているとの報告もございます。」

吐き捨てるように宰相が言います。

「このうえ、まだ…！それにしても、フレデリカ男爵とは、どこかで聞いたような気がします…？」

王太后は唇を噛み締めて、宰相に尋ねます。

「王太后さま、覚えておいでになりますでしょうか？テオドラ王女さまのお付きとして隣国に参ったカールとか申す者の実家ですよ。」

「ああ…、あの者ですか。しかし、なぜたかが男爵家の者を陥れる必要が…？」

王太后が不審そうに尋ねます。

「それは、もう少し調べてみませんか？と分かりかねますな。」

「そうですね…。あ、まさか…！」

王太后は何か思い出したように言います。

「何か思いあたることでもおありですか？」

「お兄さまもご存じでしょう？大臣にカールとか申す者をテオドラ

のお付きに手配を頼んだことがありましたでしょう。嫌がる者が多い役目ゆえ、どんな方法でと聞いたのです。そのとき大臣は知らぬ方が良くと申したのです…。まさか、お兄さま、これは…！」
王太后は震える手でドレスを掴みながら言います。

「はあ…。もう少し調べてみないと何とも言えませんが、まさかやも知れませんか…。」
苦悶に満ちた表情で宰相が答えます。

「そうですか…。」
そうつぶやくと、王太后が困り果てたような顔をして椅子にもたれかかりました。

「それにしても王太后いやエリザベス、なぜ大臣を調べようと思ったのです？あれほど信頼していたのに…。」
宰相が臣下の顔で妹の王太后で接していましたが、ふっと、妹に対する態度に変わりました。

「お兄さま。その名前を呼ばれるのは久しぶりですね。陛下が崩御されて以来かしら…。」
ふっと、懐かしそうに王太后がつぶやきました。

「…エリザベス、いまは思い出に浸っているときではないのだが？」
宰相が冷静に王太后に言います。

「お兄さま、分かっておりますわ。でも、あのころのように亡き陛下が生きていらしていたらこんなことは…。」
王太后いやエリザベスは夫が亡くなって以来、気を張り詰めて生きてきたのに、その結果がこれではなんだか情けなくなりました。

私の見る目がなかったのか。

アレクセイの即位に力を貸してくれたハリス伯爵に続いて、大臣も…。

出来るだけの待遇をしたのに、なんということ…。

あまりのことに王太后は泣き崩れてしまいました。

「エリザベス…。気持ちは分かるがしつかりしなさい。亡き陛下と約束したのだから？陛下とテオドラ王女さまをしつかりと支えろと…。」
宰相が泣き崩れた王太后を慰めるように話しかけます。

「そうでしたわね、お兄さま…。」
王太后はそう言いながらも、涙がなかなか止まりませんでした。

どれくらいだったのでしょうか。

王太后がやがて肩を震わせて、クスクスと笑いながら、
「…お兄さま、私、本当に人を見る目がありませんでした。アレクセイの方があつたみたいですよ。」

宰相は妹がおかしくなってしまったのかと、

「エリザベス、どうしたのだ？」
怖れおののきながら尋ねました。

「どうもしておりませんわ、お兄さま。これをご覧になって下さいませ。」
ハンカチで涙を拭いて、王太后はそばにある引き出しの中から大切に
そうに一通の手紙を出しました。

「それは…?」

「前ロプーヒナ公爵からの手紙ですわ。」
複雑そうな表情で王太后が宰相の前に差し出しました。

「私が読んでもよろしいのですか？」

「ええ、お兄さまなら構いませんわ。読んで下さいませ。」

「では、失礼いたします。」
宰相はそう言うと、手紙を開いて読みはじめました。

手紙を読んだ宰相は顔を上げて、驚きを隠しきれない表情で、
「前ロプーヒナ公爵は気づいていたと言うことですか？」

「それは分かりませんが、危険だと思ってたのでしよう。私が選んだ妃たちは 王妃に不適格で、アレクセイが選んだ妃は王妃に相応しいと言うことでしょうか。王子も生んでくれましたし。」
複雑そうな表情で王太后が答えます。

「そのようですね。それにしても、この報告がもう少し早ければ…。」
宰相が悔しそうに齒ぎしりしながら言います。

「確かに、でもあの時はああするしかなかったし…！まさか大臣がこんなことをするなんて思いもしなかったし、隣国の王族と婚約者が大臣の娘なんて…！」
王太后が頭を掻きむしるように後悔に身をよじりました。

「それは本当のことなのですか…!？」

「誰ですか！誰も通してはならないと申したはずですよ！」
苛々が募る王太后が頭を上げるとそこにいたのは、アレクセイでした。

王太后はあまりのことに絶句してしまいました。

「へ、陛下…!」

アレクセイの後ろから侍女が申し訳なさそうに、

「も、申し訳ございません、王太后さま。お止め申し上げたのです
が…。」

泣きそうな顔で怖ず怖ずと言います。

力がすっかり抜けてしまい放心状態の王太后に代わって、側にいた
宰相が、

「侍女どの、陛下では致し方ないでしょう。さあ、王太后さまには
私から執り成すゆえ、下がってよい。また、このことは外には漏ら
さぬように。万が一漏れた場合は、そなたを始め家族も含め無事では
すまぬと心得よ。それと、引き続き誰も近づけないようによろし
く頼みますぞ。」

侍女はそれを聞いて震え上がり、

「は、はい…！誰にも申しません。」

「よろしい。ではもう下がちなさい。」

宰相は威圧するように一睨みすると、侍女を下がらせました。

「はっ、はい。失礼いたします。」

「母君、どういふことなのですか…！」

アレクセイが驚きと怒りに満ちた表情で言います。

「陛下、落ち着いて下さい。まずはお座りを…。」

宰相は動揺しながらもアレクセイに席を勧めました。

アレクセイはジロリと宰相を睨みながら、ドサツと乱暴に席に座りました。

「叔父君も知っていたのですか、大臣のことを…？」

アレクセイの乱入（前書き）

お待たせしました。

すみません、あまり進んでません。

アレクセイの乱入

宰相も席に座り、ため息をついてから話し始めました。

「陛下、何と申してよいやら分かりかねますが……。このたびのことは、私が知ったのはつい先程にございます。」

「それはどういう…?」

アレクセイは疑わしそくに尋ねます。

「宰相の言っていることは本当のことですよ、陛下!」
気持ちが少し落ち着いていた王太后が悲痛な声で言います。

「母君まで私をごまかすおつもりですか?」

「そんなつもりは…。お兄さま、あの。」
王太后はめずらしく弱気な有様で宰相に助けを求めます。

「陛下、実は王太后さまに頼まれて大臣のことを調査したのですがその報告が上がってきたのがつい先程のことなのです。」宰相が王太后を安心させるように話します。

「そ、そうなのですか、母君?」

アレクセイが面食らったように尋ねます。

「え、ええ…。実は前ロプーヒナ公爵から手紙をもらって、大臣のことを調べてもらったのです。」

「前公爵が…。しかし、なぜ…?」

「それは分かりかねますが、結果として大臣に不審な点が見つかりました。ゆえにシャルロットさまを王妃にするわけには参りません。」

「宰相が力なく答えます。」

「勝手なことを…！母君も叔父君もあれほどシャルロットを王妃に望まれていたではありませんか。」

アレクセイが呆れたように答えます。

「それはこの事実を知らない時のことにございます、陛下。罪を犯した身内のいる者を王妃にしては国の威信に関わります。陛下にもお分かりのほにございましょう。」

苦々しい表情で宰相が答えます。

「そ、そのようなことを申しているのではない！この事態をいかなされるおつもりか！？大臣の息女が隣国の王族を婿養子に迎える手筈を整えたのは母君にございましょう?」

アレクセイはイライラして、怒鳴り散らします。

「そ、それは…。私も困っているのです。ああ、あの手紙が届いた時に調べていけば…。」
そう言うと王太后は泣き崩れてしまいました。

アレクセイはこんな母の姿を見たのは、父が亡くなった時以来でしたのですっかり動揺してしまいました。

「母君、僕は責めているわけでは…。」

「陛下、私が悪いのですわ…。前ロプーヒナ公爵まで娘を王妃にしたくてこんなありもしないことを書いて寄越したと、思い込んでしまっ…。あの方がそんなことをするはずがないのに。」「
王太后はぐずぐずと涙を噉りながら言います。

「母君、これを…。」

アレクセイはそう言うとポケットからハンカチを差し出します。

「ありがとう、アレクセイ。母はただあなたのためを思って…。」
王太后はハンカチを受け取って涙をふきました。

「母君、そう思われていたのになぜお調べにならうと…?」
アレクセイはふと、疑問に思っただけ尋ねます。

「私にも分かりません。ただ、ナターリアどのを見ていると何か違うような気がしてきて、お兄さまに頼んだのです。」

「その結果が分かったのが、少し遅すぎたようですね。しかし、もう少し調査を行う必要があります。」

「宰相いや叔父君、何をのんきなことを…。すぐに大臣を拘束して調べればすむ話でしょう!」

「陛下、それはなりません。ハリス伯爵の時とは違い、大臣の息女が隣国の王族との婿養子に内定しているのです。ことは慎重に運びませんと…。」

「それはそうかも知れないが、何を調べる必要があると言っているのです、叔父君?」

「フレデリカ男爵の子息の件です、陛下。」

「フレデリカ男爵の?その者がどうしたと…。」

「恐れながら陛下、大臣がその者を罪に陥れたやも知れぬのです。この件について、詳しく調査をしなければなりません。」

「それは分かるが、なぜそれにこだわる？」

それを聞いた宰相は王太后と顔を見合わせました。

「陛下、ご存じないのですか？ 罪に陥れたフレデリカ男爵の子息の兄は、テオドラ王女さまの側近として隣国に行ったカールですよ。」

「カール…？それはどういうことだ。」

「まだ何とも言えませんが、王太后さまが王女さまの側近に望まれて、その手配を大臣に頼まれました。そのことに関係していると思われるわね。早急に調べさせますので、しばしお時間をいただきます。」

王太后は申し訳なさそうな顔をして、

「ごめんなさい、アレクセイ。こんなことになるなんて思わなくて…。」

アレクセイはため息をついて、

「まさか母君は何かテオドラのためだけでなく、他に理由があった？ ナターリアに関することですね。」

王太后は、うつつまりながら、

「あの、アレクセイ、誤解しないでね。最初はナターリアどのに頼んだのよ。でも、断れたから大臣に頼んだのよ。」

「ナターリアに？それはなぜです？」

「幼なじみと聞いているし、それにナターリアは王妃になりたくないようでしたから条件を出したのよ。その代わりに王妃にしないようにして上げるからと言って。でも、ナターリアどの断ってきた…。」

「そ、そうですか…。」

アレクセイは複雑そうな表情で答えます。

ナターリアは王妃になりたくなかった…。

しかし、断ったと言うことは受け入れたのか…。

わからない。

カールはただの幼なじみではないのか。

王女の側近として、隣国に行かせないために王妃に…。

思いつめた表情をしているアレクセイに、ふと気がついたように宰相が話しかけます。

「ところで陛下にはなぜこちらにおいでになったのでしょうか？」

アレクセイはあっと、思い出したように、

「ああ、そうでした。昨夜の夜会でのことはご存じですね。」

「はい、確かナターリアさまが倒れられたと聞いておりますが。その後、いかがでございますか？」

「そのナターリアのことです。実は懐妊しておりまして、静養のため王宮を出ました。」

「何ですって！王宮を出たと…？私は何も聞いておりませんよ。」
王太后は驚いて叫びました。

「急なことでしたから。ナターリアが望んだことです。表向きは離宮に行ったことになってますが、近くにあるナターリアの実家の別荘に行かせました。」

「な、なんてことを…！このような事態になって、前公爵がナターリアどのを返さないと言ったらどうするつもりです。」
王太后が悲痛な様子で言います。

「そ、そんなことは…。ただ、父君に逢いたいだけです。アルバートもいるし、そんなことにはなりませんよ。」

言いながらアレクセイはなんだか不安になりました。
もしかして、帰ってこないのだろうか…。
アルバートも一緒だし。

しかし、母君も誰のせいで王宮を出たと思っているんだ…。

「呑気なことを…。早く使いを出しなさい。すぐに王宮に戻って来るように。」

「何を言っているんですか。だいたい、母君も原因の一つでしょう。それにこの問題が解決しない限り、戻りたくないはずですよ。それに、お腹の子に何かあったらどうされるつもりですか？」

「そ、それは、そうかも知れないけど…。」
痛いところをつかれて王太后は黙りこくってしまいました。

「まあ、陛下。そのくらいで。この件については、早急に調べますのでそれまで内密に願います。今後のことはその後話し合いますよ。」

宰相が怖ず怖ずと提案します。

「仕方ないですね。ではそのように……。」
アレクセイはしぶしぶそう言いつと部屋を出て行きました。

アレクセイの乱入（後書き）

読んでいただきましてありがとうございます。

終わりにクライマックスに近づいてきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5728o/>

初恋をあきらめて

2011年10月13日14時51分発行